

---

# 遠い夏の日

木立久美子

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

遠い夏の日

### 【Nコード】

N5903C

### 【作者名】

木立久美子

### 【あらすじ】

「俺たちは、ずっと一緒にいたんだよ」… …純矢の通う高校に、1人の編入生がやってきた。どうやら彼は純矢のことをよく知っている様子だが、でも純矢にはまったく覚えがなくて…。

## 編入生

夏休み。

夕暮れ時の悪戯で、茜色に染まった図書館。

会いに行くと、あいつはいつも窓際の席に腰掛けて、何やら難しい本ばかり読んでいた。

声をかけたって、ちよつと顔を上げてこっちを見るだけで、すぐ意識を本の方へ戻してしまう。

だから俺は、その隣に座って、あいつが俺の方をちゃんと見てくれるまで待つんだ。

ぱら、と。ページが繰られていく音を、瞼を下ろして聞いている。待つ時間は不思議と苦痛じゃない。

退屈だけど、好きだった。

あいつが本をぱたんと閉じて、「そろそろ帰ろうか」って、うとうとはじめた俺の頭を撫でてくれる、その瞬間。

それが、どうしようもなく待ち遠しくて。

優しく微笑むあいつの顔が、すごくすごく好きだった。

「明日も、ここにいるから」

その言葉を信じて待っていた。

ずっと一緒にいられるわけがないのだと知りながら、それでも信じて待ち続けた。

懐かしすぎて、大切すぎて、思い出すたびに幸せで切なくて。

今ではもう、心の奥底に眠ってしまった記憶。

あいつの隣で過ごした、遠い夏の日。

「純矢。おい、起きろよ」

肩を乱暴にゆすられて、純矢はのろのろと瞼を開き、緩慢な動作で上体を起こした。

下校時間をとうに過ぎた図書室には人影が無い。

「どうやら、課題をやっている最中に、ついつい居眠りしてしまっただらしかった。」

「まぬけな顔して眠ってたぜ。何の夢を見てたんだよ」

「……」  
「からかうような友人の声を、純矢は右耳から左耳へ素通りさせた。寝起きのせいだろうか、頭がひどく重い。ぼんやりしている。」

目を擦って、あくびを1つ噛み殺した。

友人は溜め息混じりに純矢の顔を覗き込んで、おい、と呆れたように声をかける。

「しっかりしろよ、まだ寝ぼけてんのか？」

「ん…もう起きた。平気」

「あっそ。それじゃあ、帰るぞ。校内に残ってるの、どうやらもう俺たちだけらしいからな」

その友人は、純矢の分の鞆までも持ち上げて、そのままスタスタ歩き出した。

「あ、ちよつと」

ようやく意識がはつきりしてきた純矢は、待てよ、と慌てて友人の背中を追いかける。

追いつくと、2人ならんで図書室を出た。

廊下はひっそりとしている。窓から夕日が射し込んで、電灯もついでいないのに眩しいくらいだった。

「思い出せないなあ」

「何が」

「夢、見てたんだよ」

「へえ。やっぱりな、どうりで変な顔してたわけだ」

「変な顔、つて？」

「憎たらしいくらい幸せそうな面してたよ、純矢。おおかた食い物の夢でも見てたんだろ？」

「違う、」

「誤魔化さなくていいぜ。お前の食い意地が張ってることぐらい、誰でも知ってる」

勝手に決めつけて、友人がけらけらと笑う。

本当に違うのに。純矢は小さく呟いたけれど、かと言って夢の内容を明確に思い出せるわけでもなかった。失礼なほど大声で笑う友人をそのまま放っておいた。

昇降口で靴を履き替え、校舎の外に出ると、体にじんわりと暑さがまとわりついてくる。

沈みかけた夕日が赤く染まっていて、綺麗だった。

「おい。見るよ、真っ赤だ」

「すげーな」

明日もきつと良い天気だ。

そう呟く友人の声には、わずかな憂鬱が含まれている。毎日毎日、憎いくらいの快晴。雨も降らずに暑い日ばかりが続いて、正直なところ、そろそろ青空にも飽きてきたところなのだ。

居眠りすると、いつも変な夢ばかり見る。

場面は決まって図書館。夢の中で俺は、必ず誰かと一緒にいる。

傍にいただけで幸せになるような、誰かと。

それなのに目が覚めた瞬間、それが誰だったのか思い出せなくなるのだ。

どうしてだろう。

その答えが知りたくて、放課後に図書室へ行くのが癖になってし

まった。

休日に暇なときは、なんとなく図書館へ出かけて、意味もなく閉館時間まで残ったりもした。

図書館にいれば、会える気がするんだ。  
会えたためしはないけれど。

不思議な夢。

見始めたのは確か中学生の頃。  
もうすぐ、あれから3年が経つ。

今は高校2年、夏。

外から聞こえる、ひぐらしの声がやけに五月蠅かった。

「編入生？」

「純矢。また教師の話、ちゃんと聞いてなかったのかよ」

友人に頭を小突かれて、純矢はなんとなく「ごめん」と謝った。

謝る理由は、自分でもよく解っていないかったのだけれど、とりあえず謝った方が無難だと思った。

「今日、うちのクラスに来るんだよ、編入生が。昨日言われただろ  
う」

「覚えてない」

「あほ」

そう言っつて、また頭を小突かれた。

ことあるごとにポカポカ殴られていては、純矢もたまったものじやなかったけれど、痛みはそれほどではない。友人も、ちゃんと手加減はしてくれているようだった。

そんなことよりも小突くという行為自体をやめてほしい、と純矢は思ったが、言ったところで相手が聞いてくれる見込みはなさそうである。多分もう、彼にとってはスキンシップの一部になっている

のだろう。

それよりも、と。純矢は小突かれた頭を自分で撫でてやりながら考えた。

「編入生ねえ……。でもさ、夏休み直前の中途半端なこの時期に、おかしくないか？」

「そうだな。俺も詳しくは知らないけど」

始業前のざわついた教室内で、友人は聞こえやすいようにと少し大きめの声で説明してくれた。

「そいつ、どうやら東京から島流しにあって来たって話だ」

「島流しって……ただの転校だろう？」

「いや、違うんだよ。だってさ、そいつ、東京の有名な私立進学校に通ってたんだって。しかも全寮制の。」

残りたいと思えば残れたはずなのに、わざわざ親にくっついて学校を出て行く理由なんか無いだろう？」

友人はどこか楽しそうにまくしたてた。

純矢は小さく溜め息を吐き、頬杖を付きながら面倒くさそうに口を開く。

「……だから？」

「だから。そいつ、エリートなんだよ。こんな寂れた町の寂れた高校に、そんなヤツが自分から来たがると思うか？」

きつと、前の学校で何か問題を起こして、それで仕方なく転校したんだ。間違いないね。なんなら、購買のサンドイッチを賭けてもいい」

「それ、いちばん安いヤツだろう」

純矢はボソッと呟くと、鞆の中から1限目で使う教科書とノートを取り出し、予習を始めようとした。正直、これ以上この友人の馬鹿話に付き合いたくはなかったのだ。

けれど、いくら経っても友人があまりにも熱心に説明を続けようとするものだから、やがて純矢もやれやれと仕方なく教科書を閉じて、諦めたように友人の顔を見据えた。

人生、諦めもそれなりに肝心である。

「おつ、やっと俺の話聞いてくれる気になったのか」

「まあね。で、その話に根拠は」

「あるわけないじゃないか。俺の想像なんだから」

「…お前、」

「そう怖い顔をするなよ、純矢。わかってくれ、俺だって退屈なんだ」

「その退屈潰しのために、馬鹿な妄想話を聞かされたこっちの身にもなってくれよ」

純矢がしかめっ面で言った直後、がらりと廊下側の扉が開き、クラスメイト達の視線がそちらに集中した。

つられて、純矢も扉の方を見る。

このクラスの担任である年配の男教師が、一人の少年を伴って入室してきた。

少年の名は、朝川直樹といった。

「あー、昨日も話したので、みんな知ってると思うが、彼は今日からこのクラスの一員になる。親御さんの仕事の都合で、東京から急遽引っ越してきたらしい。学級委員は、あとで校内を案内してやるように。…それじゃ朝川、挨拶して」

教師に促され、朝川直樹は一步前に出て微笑んだ。

万人に好かれそうな、やわらかい笑顔だった。

「朝川直樹です。中学2年生の夏頃までは、この近くに住んでました。俺のこと、もし覚えている人がいたら、気軽に声かけてやってください。知らない人も、これからよろしく」

声に緊張や不安は一切ふくまれていなかった。

あくまでも自然で、まったく物怖じしない、それでいて図々しくもない態度。

友だちをつくるのが上手そうなタイプだなと、純矢はなんとなく

思った。

「あそこの、窓際の席に座ってくれ。教科書は予備の物を貸そう」  
「ありがとうございます」

教科書を受け取って、直樹は指定された席へ向かった。

腰を下ろしながら、隣の席の生徒にさりげなく話しかけている。

やはり、友だちをつくるのに不自由はしないタイプらしい。休み時間の頃には、すでに数人の生徒たちに囲まれて、あれこれと質問を受けていた。にこにここと親しみやすい笑顔で、当たり前障りのない答えを返しているように見える。

だが時々面白いことも言うようで、たまに彼の周りにどつと笑い声が起こった。話術もなかなかのようだ。

純矢は自分の席から、じっとその編入生を観察した。野次馬根性ではない。なぜか彼のことが気になって、でも、直接声をかけるのは躊躇われた。

「なんだか…都会っぽい感じ、するよな」  
隣の生徒が小声で話しかけてきたので、純矢は確かにと頷き返した。

編入生らしからぬ落ち着き。まるで、何ヶ月も前からこのクラスにいるような存在感。

背丈は純矢と同じくらいなのだけれど、随分と雰囲気大人っぽい。やはり、田舎者の自分たちからすれば、東京は少し進んでいるように感じられても無理はないのだろうか。

純矢は観察を続けた。

派手ではないが、それなりに整った顔立ち。瞳は切れ長なのに優しげだ。さらさらとした短髪は色素が薄くて、茶色がかって見えた。染めているのか、それとも生まれつきのものなのか、いまいち判断が付かない。

「…あさがわ、か」

純矢は頬杖を付きながら目を細める。

朝川直樹。

## 遠い夏の日

どこかで聞いた名前のような気がしたが、どうしても思い出すことが出来なかった。

まるで、いつか見た夢のようだ。

## 帰り道

その日の放課後。

補習で居残らなければならなくなった友人をあつさり教室へ置き去りにして、純矢は一人で下校することにした。

いつも明るく賑やかな、あのクラスメートのことは嫌いじゃなかったけれど、徐々に静かな下校タイムを楽しみたかったのである。

純矢は部活動には所属していなかったから、ホームルームが終わるなり、すぐさま教室を出てきた。何かと理由を付けて純矢を引き留めようとする、友人の手から逃れるためだ。

建物の向きが悪いのか、いつも薄暗い昇降口から外へ出ると、急な眩しさに少し目眩をおぼえる。

「…暑い」

やはり、今日も良い天気だった。

高校の敷地を出ると暫く、なだらかな坂道が続く。

夏の日射しに目を細めながら、純矢はてくてくとその坂を下っていった。

珍しく道には人通りが少ない。

蝉の鳴き声だけが聞こえ、それも時折とぎれては、心地よい静寂を創りだしてくれる。

しかし、並木道の辺りにさしかかった頃、ふと、純矢は他人の足音を聞いた。

先ほどまで気づかなかったが、随分と近い。

誰だろう、と思った次の瞬間。

「純矢」

やわらかな声。

呼ばれて振り向くと、例の編入生、朝川直樹がこちらを見つめ微笑んでいた。

目が合うと、その笑みがいつそう深くなる。

「久しぶりだね」

その言葉の意味を理解しかねて、純矢はきよとんと目を瞬いた。

「えっと」

「学校じゃ声かけてくれなくて、寂しかったよ」

「は？」

いったい何を言っているのだろうか。

純矢がまごついていてる間に、直樹はスタスタとこちらへ近づいてくる。

懐かしそうな、嬉しそうな微笑みを浮かべて、純矢の顔を覗き込んできた。

「3年ぶりだよ。だけど、俺はすぐに純矢だって分かったよ。あの頃より背が伸びてたし、顔や雰囲気もちよつと違ってたけど…でも、やっぱり純矢は純矢だ。懐かしいな、本当に」

親しみのこもった声だった。

まるで幼いころからの友だちを相手にするように、くだけた調子でまくしたてる。大人びた雰囲気の中に、はしゃぎまわる子どものような幼さが見え隠れした。

優しいな笑顔。それは、初対面の人間に対するそれではない。

どうやら、たいへん不思議なことだけれど、直樹は純矢のことを以前から知っているらしかった。

だが哀しいかな、純矢にとっては今日が彼との初対面。直樹の発する親しげな言葉の意味も、残念ながら、まったく覚えのないことである。

どう答えたものかと純矢がおろおろしていると、その様子に気づいた直樹が、怪訝そうに首を傾いだ。

「純矢…どうした？」

「あ、いや」

首を横に振りかけて、純矢は思いとどまる。

「ここは、素直に白状しておいた方が良さだろう。」

おそろおそろ直樹と目を合わせると、純矢は口を開いた。

「ごめん」

「…え？」

「ばつの悪さを感じて、純矢は頬を掻きながら言葉を続ける。」

「…どつかで、会ったことあったっけ？」

「えっ？」

直樹が大きく目を見開いた。

「よほど驚いたらしく、暫くの間そのまま硬直してしまっただけくらいだ。」

相手のそんな様子に純矢はなんとなく罪悪感を感じながら、本当にごめん、と言葉を次ぐ。

直樹の途惑ったような表情を見つめると、もやもやしたものが、全身に広がっていくようだった。

「純矢…何を言って、」

「俺…朝川のこと、ぜんぜん知らない。今日が初対面だと思ってたんだ」

「…」

「もし前に会ったことがあるんだしたら、その…本当に、ごめんな、」

朝川。俺、物覚え悪い方だし…」

「呼ぶな」

「え？」

2人の中の空気が硬く強張る。

「朝川なんて、呼ぶなよ。昔は直樹って呼んでくれただろう」

今度は純矢が驚く番だった。

直樹の表情からは、やわらかさが消えていた。今朝の微笑みが嘘のように険しい顔で、じつと純矢の顔を見つめている。その瞳は、どこか悲しそうでもあった。

それを見た途端、胸にちくりと痛みがさす。慌てた純矢が何かを言う前に、直樹が静かに口を開いた。

「純矢、俺のこと怒ってるの?」

「へっ?」

びっくりしている間に直樹の手が伸び、純矢の肩をつかむ。細身に見える体に似合わず、強い力だった。

そのまま、ぐいっと引き寄せられて、鼻先が触れそうなくらい、お互いの顔が近くにある。

直樹は切なげに目元を歪めた。

「怒ってるんだろう。俺が、あときの約束を破ったから。…でも仕方がなかったんだよ。俺だって、本当はもつと一緒にいたかったけど、あときはどうしようもなかったんだ。破りたくて約束を破ったんじゃない。純矢は、俺の気持ちを解ってくれてると思ったのに…」

「ちょ、ちょっと待てよ」

純矢は慌てて直樹の言葉を遮った。ついでに、つかまれていた肩を振り払う。

相手の言っていることに全く心当たりがなかった。言葉の意味を、ちっとも理解できない。

純矢は俯いた。

もしかしたら人違いじゃないだろうかとも思ったけれど、直樹は、純矢の名前を言い当てた。そうすると、やはり彼は、純矢のことを以前から知っているのだ。その事実が、いつそう純矢を混乱させた。だって。自分は、本当に覚えていないのだから。

暫く沈黙が流れて、その重さに堪えきれなくなった純矢が、目を伏せたまま口を開く。

「ごめん」

ありきたりな言葉。

でも、それ以外に言えることなど無かった。

「ごめん。本当に、ごめんとしか言いようがないんだ。俺、何を言われてるのか、ぜんぜん分からない」

「純矢」

呆然と呟いて、直樹が悲しそうに手を握りしめた。

蝉の鳴き声だけがうるさくて、重苦しい静寂を嘲笑うかのように響き渡る。

夕方とはいえ、夏の暑さは侮れない。木陰にいるにも関わらず、鞆を持つ腕には汗がじんわりと浮かんできた。

「…本当に、覚えてないの」

直樹の、ひどく寂しげな声。

伸ばしかけた手が、力なく下ろされた。

その横顔に木漏れ日が揺れるのを見つめながら、純矢はもう一度、「ごめん」と謝罪の言葉を口にする。

今朝、友人に謝ったときと同じように。

謝る理由さえ、自分では解っていなかったのだけれど。

## 直樹と祐介

「純矢」

手のひらが触れる。

さらさらと、風の流れる音がする。

「…俺、明日もここにいるから」

窓が開いて、夏の匂いがやわらかく漂っていた。

淡く、まっすぐに射し込む光。

揺れるカーテン。

あいつの顔がぼやけて見える。

はつきり見たくて、俺は何度も目を擦ったのだけれど、視界は良くなるどころか、どんどん霞んでいくばかりだった。

あいつが遠くなる。

やがて、姿さえ見えなくなるくらい。

「お願いだから、待っていて」

その言葉だけが脳裏にこびりついた。

どうして。

あいつの顔を思い出せない。

とてもとても、大切な存在であつたはずなのに。

「おい、起きろ」

がつん、と。後頭部に痛み。

どうやら、拳骨をくらったらしかった。

「ん…？」

「目が覚めたか。まったく、朝からずっと居眠りかよ。良いご身分だな、純矢」

呆れたような表情を浮かべ、友人は純矢の顔を覗き込んだ。

彼の席は純矢の1つ前なので、椅子に座ったまま少し上体をひね

るだけでいい。

「もう休み時間だぜ。本当によく寝たぞ、お前。授業中に当てられなくて良かったな」

「…寝不足なんだ。昨日、考え事してて、夜あまり眠れなかったんだよ」

「へえ、どうしたんだ。心配事でもあるのか。まさか、恋の悩み？」  
「違う」

純矢は起きあがり、顔をしかめる。

寝不足の原因はもちろん昨日、朝川直樹との出来事だ。

『…本当に、覚えてないの』

悲しげな表情と声。

知らない。本当に、何も覚えていない。

だけど直樹は、純矢のことを知っていると言う。3年前まで、確かに自分たちは一緒にいたのだと。

そのことが気になって気になって、仕方がなかった。しかし、いくら考えたところで答えなど見つかるはずもなく、純矢は布団の中でただ悶々としながら夜を越した。

思い出すと、知らず知らずのうちに顔が曇っていく。

それを見た友人が、心配そうに口を開いた。

「違うなら、なんだよ。言ってくれば相談にのるぜ？」

「え、」

「困ったときはお互い様だ。話してみろよ」

その言葉に、純矢は少し思案する。

確かに、話してみても損はしないだろう。この友人は一見ちゃんぽらんだが、ときには非常に真摯な態度で接してくれることもあるのだ。

目を合わせると、安心しろ、とでも言うかのように友人が頷いた。それを見た純矢は暫しの間の後、わかったよ、と頷き返す。

「…実は、」

とりあえず試みに相談してみようと、彼が口を開きかけた、その

とき。

「おーい、オギー」

廊下の方から、友人の名を呼ぶ声がした。

2人が扉の方へ目をやると、隣のクラスの生徒がひよっこりと顔を出す。

「オギ、先生が呼んでるぜ」

友人が怪訝そうに眉をひそめた。

「なんで」

「さあな。説教じゃないか？ お前、昨日の補習のとき、ちゃんとプリント最後まで終わらせなかっただろう」

「…そういえば」

あからさまに顔をしかめた友人を見て、隣のクラスの生徒は小さく笑う。

友人は舌打ちをしながら席を立つと、純矢の方を見て言った。

「ごめん、ちよっと行ってくる。話は、後でちゃんと聞くから」

「いや。いいよ、気にするな。たいしたことじゃない」

「だけど…」

「おーい、オギー、早くしろー」

「ああもう。ハイハイ、うるせえな、いま行くよ」

苛ついた声を出して、友人は駆け足に教室を出て行く。

その後ろ姿を見送った純矢は、タイミングが悪かったなと思って溜め息を吐いた。

オギというのは友人のニックネームで、彼の本名は小木野祐介という。

その安直な呼び名はいつのまに定着したのか、親しいクラスメイトはもちろん、気づけば隣のクラスの生徒達までもが、彼を「オギ」と呼ぶようになっていた。

彼を下の名前でちゃんと「祐介」と呼んでやるのは純矢1人で、そのことがまた、彼が純矢を気に入る要因の1つとなっている。なぜだか知らないが、祐介は入学式に知り合ってから、無条件で純矢

に好意を持っているのだ。

別にそれが迷惑ではなかったし、純矢も祐介のことは割と好きだった。ので、一緒にいて嫌なことなどないけれど。

純矢はあくびを噛み殺しながら時計に目をやった。

休み時間はまだ始まったばかりで、次の授業までの間は長い。祐介が帰ってくるまで寝直そうかと机に突っ伏してみたものの、先ほどのような睡魔は訪れなかった。一度覚醒してしまうと、純矢はなかなか眠りにくい質である。

仕方なく、ちろりと瞼を開いた純矢は、そのまま薄目で直樹の姿を探してみた。彼の席は、純矢から見て斜め右の3つ前に位置しており、今のところは1人で本を読んでいるらしい。少し俯き気味の背中が見えた。

なんだったんだろう、昨日のあれは。

そつと、誰にも聞こえないくらい小さく呟く。

結局、朝川直樹は今朝、たったの一度も純矢に話しかけてこなかった。

昨日の放課後にあれだけ気まずい別れ方をしたのだからと、純矢はそれなりの覚悟をしていたのだけれど、予想に反して、直樹の態度は普通だった。例の人好きのする笑みを浮かべて、転校初日に仲良くなったらしい近くの席のクラスメート達と、なごやかに談話していた。

読書中の今でも時折、他のクラスメートがやってきては声をかけていくが、直樹はそれを笑顔でのらりくらりとかわしていた。耳をそばだてると、どうやら放課後どこか遊びに行かないかという誘いのようである。なぜだか知らないが、彼はそれを全て断っているらしかった。

「悪いけど、…だ」

「へえ…か。それなら…ないな」

教室内のざわめきがノイズとなって、肝心の声がよく聞こえない。狸寝入りを続けながら、純矢はじつと耳をすませていた。

しかし、それ以上は直樹達の会話は流れてこず、やがて純矢は再びうとうとし始めた。

意識が途切れがちになり、何も考えられなくなる。直樹たちの会話を盗み聞きすることを諦めた純矢は、仕方なく、もう一度このまま眠ってしまふことにした。

やがて職員室から戻ってきた祐介が、「また寝てんのかよ」と、呆れた顔をしながら純矢を揺り起こしてくれるまで。

「ちょっと付き合ってくれないか」

意外にも、直樹が行動を起こしたのは放課後になってからだ。純矢がちょうど帰り支度を済ませ、祐介と一緒に教室を出ようとしていたときである。

扉の前で突っ立っただけは他の生徒の邪魔になるので、3人は廊下に出ると窓際の隅へと寄った。下校する生徒、部活動や委員会活動に向かう生徒が、横をざわざわと流れていく。

「ここは騒がしいね。もう少し端へ行こうか」  
促されるままに移動する。

暑さを少しでもしのぐためか、廊下の窓は全開にしてあって、時折さわさわと風が吹き込んで、純矢の前を歩く直樹の髪を揺らした。まるで女のように細く柔らかそうな髪をしているんだなど、純矢はなんとなく思う。

やがて、3人は人影の少ない北側廊下で立ち止まった。

「何か…用事？」

否応なく頭には昨日の出来事が浮かぶ。

訝しむ純矢を見て微笑むと、直樹は穏やかな調子で言葉を次いだ。「少し、話がしたいんだ。2人で」

「話？」

「そう。昨日のことも含めてね。…いいかな」

「えっと」

「ちょっと待て」

それまでは純矢の隣で大人しくしていた祐介が、いきなり怒ったように身を乗り出した。

彼は顔をしかめ、じろじろと無遠慮に直樹を見つめる。

「おい編入生。純矢に何の用だよ」

「言っただろ。昨日のことについて、話がしたいんだ」

「…」

驚きもせず、さらりと答える直樹。祐介は彼に無言を返して、くるつと純矢に振り向いた。

やけに険しい表情である。

「…なんだよ、昨日のことって。純矢、こいつと何かあったわけ？」

「あ、いや」

「はつきりしろよ」

理由は知らないが、祐介はかなり苛々しているようだった。その矛先が純矢へ向いてしまった。

きつい口調で問われて、純矢は途惑いながら言葉を濁す。

刺々しくなってきた雰囲気の中に、直樹は平然と割り込んできた。

「ねえ、少し黙っていてくれるかな。俺が用があるのは純矢だけだ。

君には関係ないことなんだよ」

「…なんだと」

「俺が純矢と何を話そうと、勝手だろう。…いちいち口出しして、保護者にでもなったつもりなのか。祐介、本当に昔から変わってないよね」

直樹の顔を睨みつけながら、祐介が忌々しそうに舌打ちした。

そのやりとりに違和感を覚えて、純矢は目を瞬かせながら2人を見比べる。

直樹は今、祐介のことを「祐介」と呼んだ。「オギ」でも「小木野」でもなく。まるで昔から知っている相手にするように。その無遠慮な物言いは、どう考えても、昨日今日知り合ったばかりのクラスメートに対したものでなかった。

自分以外の人間が祐介を下の名前で呼ぶのを、純矢は初めて聞いた気がする。

それは、彼にとって親しみの証だからだ。

一体どうということだろう。おろおろしながらも、険悪な空気を漂わせる2人をこれ以上放置しておくわけにはいかないと思い、純矢はおそろおそろの間に入った。

「や、やめてくれよ、2人とも」

「純矢」

「何が何だか知らないけど、いきなり喧嘩腰になることはないだろう」

そして純矢は、ちらつと友人を見やる。

「祐介：さっきのは、どういう意味なんだ。昔から、って。どういうことだよ。お前ら、知り合いだったのか」

「：なんでもない」

「嘘つけ。だって、さっき…」

「なんでもないって言ったら、なんでもないんだ」

祐介はぴしゃりと押さえつけるように言い放ち、最後に冷たい表情で直樹の方を一瞥した。

直樹も、口元の笑みを消し去って見つめ返す。一瞬のことだったが、その場の空気が硬直した。

その様子は、まるで旧敵が久方ぶりに再会したかのような切迫感と、喧嘩別れした友人と偶然はち合わせしてしまったかのような緊張感が混ざり合っていて、なんとも居心地が悪かった。

やがて、ふいっと2人の目が逸らされる。

祐介が踵を返した。

「俺：先に帰っとくよ。じゃあな、純矢」

「祐介、」

慌てて呼び止めたけれど、祐介はスタスタと歩いていってしまい、純矢が逡巡してるうちにもう姿が見えなくなった。

階段を下りる微かな足音だけが、人通りの少ない廊下に響いて消

える。

急に怒り出すなんて彼らしくない。一体どうしたのだろうかと、純矢はわけがわからず困ってしまった。

「純矢」

呼ばれて、直樹の方を見る。

どきりとするぐらい優しい微笑みが、そこにあった。

「図書室に行こう」

断る言葉が思いつかず、純矢は無言で頷いた。

## 図書室

この学校の図書室は、規模の割には広々としていた。おまけにクーラーまでついている。

中に入ると、心地よい涼しさが体を包んだ。

見たところ利用者はあまり多くなく、純矢たちの他には3〜4人の生徒が隅の机を使用しているのみである。ちなみに、図書委員会の活動場所は、1つ隣の図書準備室だ。

直樹は「ついてきて」と言い置くと、そのまま迷うことなくスタスタ歩き出した。

編入してきたばかりだというのに、躊躇う素振りすら見せない。

純矢は怪訝そうに「どこへ行くんだ」と声をかけた。

「いや、場所は特に決めてない。適当に歩いてるだけだよ」

そんなことを言いながら、直樹の足はしつかりと目的を持って進んでいる。言動と全く一致していない。

あやしいと思いつつも、純矢は黙って彼に従う。

やがて日本文学やら歴史小説やらが並ぶ本棚をぬけて、2人は一番奥の大きな棚に辿り着いた。そこにあった本のタイトルを目で追ってみると、英文学のコーナーだった。

司書の先生が座るカウンターからも、他の生徒たちのいる机からも見えない位置である。

「…この辺りでいいかな」

どうやら静かで見られにくい場所を探していたらしい。

直樹は小さく呟き、純矢を見やった。

「それにしても驚いたよ。あいつが、まだ純矢の傍にいたなんて」「え？」

「呆れたもんだよな。そんなことしたって報われないのに、3年前から、ずっとだ。…見たか？ さっきの、あいつの顔。俺のことが憎らしくてたまらないんだって、書いてあったよ。よっぽど大切に

思っているらしい」

「大切につて…誰が、誰を？」

「祐介が、純矢を、だよ」

直樹は溜め息混じりに純矢を見つめる。

その目には、少し悔しそうな、残念そうな表情が浮かんだ。

「…本当に…覚えてないんだな。祐介も可哀想に。あれだけ君のことを好いてたのにさ」

純矢は少しむっとして、眉をひそめた。

「わけがわからないこと、言うなよ」

溜め息が出る。いい加減、疲れてきていた。この編入生がやってきてから、変なことばかり起こっているのだ。初対面なのに「久しぶりだね」なんて言われるし、祐介は彼と一触即発状態になるし、拳げ句の果てには、怒って先に帰ってしまうし。本当に、何から何まで混乱することばかりで。

純矢は直樹を睨むように見据える。

「いいかげんにしてくれないか。昨日から、覚えてるとか覚えてないとか、そんなくだらないことばかり言っつて。悪いけど、こっちは一切心当たりがない。…俺は、あんたのことを知らないんだよ」

言葉が自然と口をついて出た。

直樹が目を睨り、純矢は顔を歪めながら俯く。

「そりゃ、もしかしたらどこかで会ったことがあるのかもしれないし…忘れてしまった俺も悪いのかもしれないけど。でも、そんなふうに、俺を責めるような顔するのはやめてくれ」

「純矢…」

「俺の身にもなってみろよ。昨日から、わけのわからないことだらけでさ。それに祐介は…ただの友だちだよ。3年前に何があったのかは知らないけど、俺には関係ないことだ。俺はあいつと、高校の入学式で初めて会ったんだから」

なるべく相手の顔を見ないようにして、純矢は早口に言い終える。その言葉を受けて、直樹が顔をどんどん曇らせていくのが分かつ

たからだ。

確かに自分でも驚くくらい、きつい口調だった。寝不足のせいで苛ついているのかもしれない。

でも、一度声に出してしまった言葉は撤回することは出来なかった。

「どうして？　なんで、そんなことを言うんだ」

暫しの沈黙の後、ようやく絞り出された直樹の声は、微かに震えていた。

どうしてと、訊きたいのはこっちの方だったけれど、今の純矢はうまく言葉を返すことが出来ない。再び罪悪感が体に広がった。昨日の放課後のときのように。

だって。あんまりにも、哀しそうな目で見つめるから。

「君と祐介が、高校で知り合ったって？　…そんなはずない。くだらないことを言っているのは、どっちだよ。頼むから、そんなこと言わないで。俺たちは、ずっと一緒にいたんだ」

直樹の手が純矢の頬に触れる。

指先はひんやりと冷たかった。

「解ってくれてたはずだろう、純矢。俺の気持ちも、あいつの気持ちも。…なのに、どうして忘れちゃったんだよ」

ひどく切なげな声。

「…祐介は、君の幼馴染みなのに」

わけがわからなくて、頭の中がごちゃごちゃで。

そのまま唐突に抱きしめられても、純矢は身動き一つ出来なかった。

「ごめん」

やがて直樹が呟いた声で、純矢はハッと我に返る。

訪れたのと同じくらい唐突に、そのぬくもりは去っていった。

体がじんわり痺れている。自分で感じていたよりも、強い力で抱

きしめられていたらしい。

いまだに状況を把握しきれないまま、純矢は混乱した頭で、何とか言葉を絞り出した。

「…どういう、つもりだ」

あんなふうにも男が男を抱きしめるなんて。小さい子どもに対してならまだしも、自分は高校生だ。体格だって、直樹とほとんど同じだというのに、とつさに振り払えなかった自分が情けないと思った。直樹は、ばつが悪そうに目を伏せる。

「ごめん。手を出すつもりは、なかったんだ。気を悪くさせたかったわけでもない。ただ、俺：少しでいいから純矢と話がしたかっただけで、その、…本当だよ」

落ち着き払った微笑を浮かべていた彼と、同一人物だとは思えない。

ぼそぼそと弁解するその姿が、あまりにもしおらしく見えたものだから、純矢はそれ以上相手を責める気がなくなってしまった。聞いているうちに、波立っていた心も少しだけ落ち着く。

純矢は小さく息を吐くと、いいよ、と相手の言葉を遮った。

「わかった。…いいよ。話をしよう。俺も、昨日のことが気になってたから。あんたの納得がいくまで喋ればいい」

それを聞いて直樹がホッと表情を緩めた。

立ち話も何だからと、純矢は窓際の席を示し、座ろうと相手を促す。

年季の入った椅子は引いただけでガタガタと音をたてた。

「…初めて会ったときも、君は祐介と一緒にだった」

純矢の隣の椅子に腰を下ろしながら、直樹は口を開いた。

「3人、中学で同じクラスになってさ。付き合うグループが違ったから、最初のうちはあんまり話さなかったけど」

椅子に背をもたせかけながら、直樹は懐かしげに目を細める。

その横顔を見ていたら、彼の言っていることは全て真実で、忘れてしまっている自分の方が異常なんじゃないか思えてくる。純矢は

首を横に振って、その感覚を振り払おうとした。

だって。おかしい。祐介が自分の幼馴染みだとか、3年前に一緒だったとか、そんなことは有り得ない。もしも直樹の言うことが真実なら、純矢自身の記憶が、嘘ということになってしまふのだから。無意識のうちに溜め息がこぼれた。ずっと溜め息ばかり吐いている。今日だけ数えても、すでに片手の指では足りなくなってしまうくらい。

そんな彼を見て微かに苦笑すると、直樹はゆっくり言葉を続ける。「夏休みに図書館で、席が偶然、隣り合わせになった。それが切っ掛けで、仲良くなつたんだ。否定するだろうけど…君、けっこう俺に懐いてくれてたんだよ？ …祐介は、俺をあまり気に入っていなかったみたいだけど」

「俺、あんたと友だちだったのか」  
「そうだよ。…いや、それ以上かな。少なくとも俺の方は、君をただの友だちだなんて思ってた。祐介もね」

どういう意味、と純矢が眉をひそめる。  
その問いに、直樹は曖昧に笑うだけで答えなかった。

「…ねえ。本当に忘れちゃったの。しつこいと思うかもしれないけど、俺は本当に、3年前まで君の傍にいたんだよ」

純矢は居心地の悪さを感じながらも、直樹の真剣な表情から、なぜか目が離せなかった。

むなしくて仕方ない、けれど諦められない。そんな声。  
「覚えてる…8月だった。図書館で、毎日のように会ってた。一緒に課題をやったり、閉館時間まで、ただ本を読んだりもしたんだ。祐介は先に帰ってばかりだったけど、純矢はいつも、俺が読み終わるまで待っていてくれただろう」

そう言つと、直樹はぐるりと周囲を見回し、フツと目を細めた。  
「ここは、そのときの図書館に雰囲気似ているよ。…ここへ連れてきたら、何か思い出してくれると思つたけど」

自嘲気味に呟いた後、彼はおもむろに立ち上がった。

近くの本棚から適当な一冊を取り出し、手持ち無沙汰のようにパラパラとページを繰る。

「っ、」

その仕草を目で追った次の瞬間、純矢は息が止まりそうになった。どくん。

胸が大きく脈打つ。

どこかで見たような光景。自分が何か、とんでもなく大切なことを忘れてしまったんじゃないかと。

そんな言いようのない感覚に襲われて、背中を冷たいものが流れていく。

なんで。どうして。

ページをめくる指先。横顔。

なぜ、こんなにも懐かしいのだろう。

「…純矢？」

様子がおかしいことに気づいたのか、直樹は本を閉じて顔を上げる。

そのまま本を棚に戻し、彼は怪訝そうに眉を寄せた。

「急にどうしたんだ。顔色が…」

心配そうに言いながら駆け寄ると、直樹は気遣うように、純矢の頭へ手を伸ばした。

そつと優しく。撫でるように。

直樹の手のひらが、純矢に触れる。

その途端。

「えっ…お、おい、しつかりしろ。純矢？ 純矢っ？」

何が起こったのか解らない。

いきなり激痛を感じて、純矢は直樹の腕の中に倒れ込んだ。

切羽詰まったような彼の声を聞きながら、純矢はずるずると崩れ落ちていき、体に力を入れることも出来なくなる。

だんだん周囲が騒がしくなっていくけれど、純矢は逆に、それらの音や直樹の叫ぶ声がどんどん遠くなっていくような気がしていた。

遠い夏の日

視界が暗くなり、意識も薄れていく。  
朦朧としながら純矢は思った。

どうして。

痛みを感じたのが、頭ではなく、胸だったのだろうか。

## 保健室

名前を聞いただけじゃ、すぐにあいつだとは分からなかった。だって、あれからもう3年近く経ったというのに、今さら戻って来るだなんて思わなかった。

だから俺は、朝、あいつが教室に入ってきた途端、叫び出したくなっただ。

朝川直樹。

3年前まで毎日のように見ていた顔。

少し大人びていたけれど、見間違えるはずはない。何があっても忘れないくらい、大嫌いだった相手なんだから。

直樹も俺のことが分かっただらしい。視線が絡んだ瞬間に、心の奥が嫌な感じにざわめいた。

まただ。

直感的に俺は悟った。

また朝川直樹は、俺の大切なものを奪っていくんだ。

祐介は家に帰るなり、ただいまも言わずに靴を脱ぎ捨てる。

だんだんと音をたてながら階段を上り、部屋のドアを乱暴に開けて、どさつと自分のベッドに倒れ込んだ。

「くそっ」

吐き捨てるように呟く。

なんで、直樹が。

腹立ち紛れに布団を拳で殴りつけ、ちくしょうと悪態を吐きながら寝返りを打った。

見慣れた天井を睨みつけ、祐介は気を落ち着けるために深呼吸をする。

大嫌いだった。

初めて出会った中2の頃から、祐介は直樹のことが大嫌いだった。純矢がいる手前は、それを口に出すことさえしなかったけれど、でも直樹自身には、充分その憎しみが伝わっていたと思う。構いやしない。たぶん彼も、同じくらい祐介のことが嫌いだったに違いないのだから。

気づいていなかったのは、鈍感な純矢だけだ。

「純矢」

小さく声に出してみる。その名前を呟くと、少しだけ心が落ち着いてきた。

胸のあたりが、じんわりと熱を持つ。

ずっと傍にいた。3年前、直樹が東京に行ってしまったからも、自分はずっと純矢の傍にいたのだ。

本当に、心の底から大切な、幼馴染み。

彼が祐介のことを忘れてしまっただけから、その気持ちが揺らぐことはなかった。本当に、誰よりも大切な相手だから。

何があっても、たとえ嫌われても、傍に居続けることを諦めたりしない。

忘れたのなら、何回でも覚えさせればいい。嫌われたのなら、また好きになってももらえるまで彼の傍にいればいい。

高校の入学式。

自分を忘れてしまった幼馴染みに、勇気を振り絞って「はじめまして」と声をかけた、あのときのように。

そうだ。自分はそうやって、純矢の傍に居続けた。

彼の隣を、その居心地の良い場所を、またもや直樹なんか盗られてたまるものか。

「よしっ」

今度こそあいつには負けない。

気持ちを切り替えた祐介は、さっさと着替えようと立ち上がった。ネクタイをはずし、続いてシャツのボタンも外そうとした、そのとき。

ぶるるる、ぶるるる、と。聞き慣れたコール音。

小さなランプをちかちか点滅させて、誰かからの電話がきたことを祐介に告げる。

親機が置いてあるのはリビングだけれど、祐介の部屋にも子機がある。わざわざ階下におりるまでもなく、祐介はすぐ側の受話器がちゃつと取った。

「はい、小木野ですが」

「…」

電話の相手が何かを言った。

次の瞬間、祐介の顔はみるみるうちに険しくなる。青ざめていくのが自分でも分かった。

がちゃん。

やがて投げつけるように受話器を置いた彼は、ネクタイをつける暇もなく、着の身着のまま家を飛び出した。

「直樹！」

「…祐介…早かったな」

「純矢は？」

息を切らしながら保健室に飛び込んで、祐介はさつと室内に目を走らせた。

直樹の座っている古びたソファの横に、1つのベッドがあった。

直樹の言葉を待たずに、祐介はそこへ駆け寄る。そこには案の定、少し蒼い顔をした純矢が横たわっていた。

どうやら眠っているらしい。

確かに具合はあまり良くなさそうだが、その寝息はすやすやと安定している。とりあえず大事には至っていないようだったので、祐介はホッと胸をなで下ろした。

走ったせいで、顔は汗だらけだ。祐介は袖口でそれを軽く拭くと、振り返って直樹を睨みつける。

「あの後、何があつたんだよ。お前、純矢に何したんだ」

「そんな顔するなよ。俺は何もしてない。…話してたら、急に純矢が倒れ込んできたんだ」

「いきなりか？」

「ああ。先生が言うには、貧血だったさ」

「…貧血、」

祐介は呟いて、純矢の方に目を向けた。

前髪が瞼に掛かって鬱陶しそうだったので、それを指先でそっと払いのけてやる。

起きそうな気配はない。そういえば寝不足だと言っていたし、今日は食欲がないからと昼のパンも残していた。いろいろ不摂生が重なったのだろう。

何もスポーツをやっていない純矢の頬は、白くて細くて儂かった。今は弱っているから尚更だ。

暫くその寝顔を見つめた後、祐介は直樹に向き直る。

「…で？」

「…」

「話してみて、わかったかよ。ちゃんと、理解できたのか」

あえて主語を省いた言葉。

けれど相手には伝わっている。

僅かな沈黙の後、一步だけ距離を縮めた。本当なら、同じく空間に存在することすら許せない相手なのだけだ。

直樹は少し躊躇う素振りを見せたが、やがて諦めたように祐介と目を合わせ、口を開いた。

「したよ」

悔しそうに吐き捨てる。

「理解は…したよ。でも受け容れたわけじゃない」  
ぎゅっと拳を握りしめる。

今度はまっすぐに顔を上げて、相手を見据えた。

「ねえ、君は知ってるのか。祐介。どうして、こんなことになった

んだよ。…どうして純矢は、」

言いながら、直樹も純矢の眠るベッドを見やる。その顔が切なげに歪んだ。

受け容れられない、と。心が全てを拒むように。

悲しい問いかけ、だけを繰り返す。

「どうして…純矢は…俺たちのことを覚えていないんだ？」

いくら月日が経っても忘れられるはずがない。

楽しかった。3年前の、あの夏を。

あんなにも近くで過ごしたというのに。

「純矢に近づくな」

祐介の声は冷たかった。

背後にベッドを庇うようにして立つ。

その表情は、本当にどこまでも冷たかった。

「純矢に近づくなよ。…わかっただろう。理解したんだろう。それ

なら、受け容れる。純矢はお前のことなんか知らない」

「…でも、俺は」

「お前が覚えてたって、仕方がないことなんだ。純矢が覚えてない

って言うんだから。お前はもう、無関係なんだよ」

直樹が表情が、こわばった。

祐介は追い打ちを掛けるように繰り返す。

近づくな、と。

「中坊の頃…お前が東京に行ってからだ。純矢が記憶をなくしたの  
は」

「記憶…喪失？」

「端的に言えばな」

「どうして…それが…俺のせいだって、言うのか」

「さあな」

「はぐらかすなよ！ 言うてくれ。どうしてそんなことになったん

だ？」

「嫌だね、お前にだけは教えてやりたくねえんだよ。せいぜい苦し

めばいい」

まだ純矢が目覚める気配はない。

それを確認してから、祐介は言葉を続けるために、すっかり色が失せた直樹の顔を睨みつけた。

「なあ。…あれから俺が、何年こいつの傍にいたと思う」

感情を抑え込んで、わざと冷めた声を出す。

徹底的にたたきのめしてやらないと、気が済まない。

祐介はつかつかと直樹に歩み寄って、その胸ぐらを掴み、引き寄せた。

「3年だ。お前が純矢の傍を離れている間も、俺はずっと、こいつと一緒にいたんだ」

つらいこともあった。

純矢が自分を覚えていないと知ったとき、どんなに悲しかったとか。

それでも傍にいたのは、相手のことが大切だったからだ。

どんなに傷ついても離れられないくらい、純矢のことが大事だったのだ。

「お前に俺の気持ち分かるかよ、直樹。今更のこのこ帰ってきて、受け容れてもらおうだなんて。ふざけるな」

「…っ、」

「もう絶対に、お前には譲らない。…俺は純矢のことが、」  
がらり。

祐介がまくしたてている途中に、扉の開く音がした。

驚いた2人がパツとそちらの方を見ると、どうやら、不在にしていた校医が今ちょうど帰ってきたところらしかった。

「あら」

年配の女性校医はそんな2人を見て、「どうしたの」と首を傾げる。

気まずい沈黙。祐介は、ゆっくりと直樹のシャツから手を離れた。とっさに言える言葉が見つからない。2人は何も答えずに目を泳

がせたが、呑気なこの校医は、さして気にとめなかつたらしい。小さく笑うと、「喧嘩しちゃダメよ」と、勝手に決めつけてそう言った。

啖呵を切っている最中に第三者が乱入。

先ほどまで、あれほど張りつめていた空気が、一気に霧散する。

「スズシロ君なら、もう大丈夫よ。歩いて問題ないわ。目が覚めたら、一緒に帰ってあげなさい」

「…はい」

「それにしても、スズシロ君って、本当に良い名前よねえ。スズシロ…スズシロ…確か、清白って書くんだっただかしら？ 清白純矢。

うん、とっても綺麗なお名前。真っ白で、きらきらって感じ。そう思わない？」

「そうですね…」

「うふふ」

校医はにこにこしながら満足げに頷く。

ずいぶん変わった人だなと、直樹は思った。良い意味でも、悪い意味でも、マイペースな人なんだな、と。

祐介も、そんな彼女に毒気を抜かれてしまったらしい。おかしいくらいに、大人しくなっている。

校医はそんな2人を見ると、もう一度につこり微笑んだ。

「じゃあ、私は奥の方で仕事してますからね。何かあったら呼びなさい」

そう言い置いて、くるりと身を翻す。

鼻歌などを歌いながら、校医は保健室の奥にある扉の中へと消えた。どうやら、そこには彼女のデスクが置いてあるらしかった。

「…」

「…」

どう言葉を発したものでやら。

話を再開しようにも、どうにも気が進まなくて。

2人は顔を見合わせると、同時に目をそらしながら溜め息を吐き

出した。

「あ…れ…。どうしたんだ、2人とも」

校医がいなくなつてから暫くして、純矢が目を覚ました。

寝ぼけた声を出しながら、もぞもぞ起きあがるうとする彼を、祐介が制した。

「どうした、はこっちのセリフだ。お前、倒れたんだぜ。貧血だなんて、情けねえな」

「え…祐介」

横になつたまま、純矢が驚いて目を瞬く。

「なんで…先に、帰つたんじゃなかったのか」

「俺が呼んだんだ」

直樹の言葉に、純矢はますます驚く。

ぼかんと口を開けながら2人を見比べた。

あれほど険悪なムードで別れておきながら、よくもまあ連絡できたものである。

「呼ばなかつたら、後ではれたときに厄介だと思ってね」

言つて、直樹は肩をすくめた。

そして苦笑する。

「無理をさせてごめんな、純矢。体調が悪かつたんだね」

「あ…いや」

純矢は曖昧に言葉を濁した。

正直なことを言つと、倒れた理由はそれだけではない。

自分でもよく分からないけれど、何かが自分の頭の中に起こつたのだ。忘れていたはずの記憶が一気にフラッシュバックしたような感覚。それが許容量を超えてしまつて、だから倒れたのだと。

だが言つたところで相手に理解してもらえないとは思えないので、純矢はその事実を自分の胸に押しとどめた。

気を取り直して、今度はゆっくりと体を起きあがらせる。

「俺の方こそ、心配かけて悪かった。もう、自力で帰れるよ。…祐介、鞆とって」

祐介から鞆を受け取り、純矢はベッドから下りた。少しふらついたが、先ほどまでの痛みや体の重さは消えていた。祐介が心配そうに手を握ってくる。

「ほんとに無理するなよ。…なんなら家まで、おぶってってやるから」

「いらないよ」

過保護な祐介の言葉に苦笑して、純矢はちらつと直樹の方を見やっただ。

目が合うと、彼は少しだけ寂しそうな表情を浮かべていたが、すぐにまた例の微笑を純矢に向けた。

ふっ、と。

まるで素顔を隠す仮面のように、綺麗すぎるくらいの笑顔。

「俺は、先に帰るよ」

「へ？」

「2人で、ゆっくり帰るといい」

きよとんとする純矢の隣で、祐介がフンと鼻を鳴らす。

「直樹にしちゃあ、気が利くな」

「君のためじゃないよ」

素っ気なく言って、直樹はくるっと背を向けた。

背中越しに、顔だけ振り向かせて純矢を見る。

「ばいばい、純矢。祐介がいるなら、俺はいなくても大丈夫だろう」

「…お大事に」

「…え、」

「おう、帰れ帰れ」

「うるさいよ祐介」

ひらひらと手を振りながら、直樹は去っていった。

保健室の扉が、後ろ手に、ぴしゃり、と閉じられる。

純矢はどこか呆然としながら、それを見送った。

どうしたんだろう。

なんだか急に、心へ穴が空いてしまったようで。

「…い」

「…」

「…おい」

「…」

「おいこら、純矢？」

訝しげな祐介の声でハッと我に返る。

ずいぶん長い間、放心していたようだ。

「…あ、」

「何、変な顔してんだよ」

「えっと」

「ぼけっとしてないでさ、俺たちも帰ろうぜ。…そろそろ、あいつも遠くへ行っただろう」

「ああ…うん」

「よし、今日は俺が家まで送ってやるからな。…あ、先生！」

俺たち帰りますからー」

祐介が手をメガホンのようにして、奥の部屋へ声を掛けた。

校医から、はいはいお大事にね、と返事がかえってくる。

「行くぞ、純矢」

なぜか上機嫌な祐介。

直樹が居たときはあれほど苛々していたくせに、気まぐれな奴だ。そんなことを思いながら、純矢はとりあえず頷いた。

廊下に出ると、顔見知りの教師が通りかかって、2人に声をかけていった。

確か、体調には気を遣えよ、とか。早めに帰るんだぞ、とか。そんな内容だったと思うけれど。

でも純矢は、祐介が教師に適当な受け答えをするのを横で聞きながら、どこか上の空だった。

「…なおき」

小さく、小さく、口の中で呟く。

どうしてしまったというのだろう。

なぜ、彼が帰ってしまったとき、あんなにも寂しくなったのだろう。

自分たちは、まだ会ってから二日も経っていないというのに。

ばいばい、純矢。

その言葉を聞いた途端、図書室で感じた胸の痛みが、もう一度ぶりがえすようだった。

祐介がいるなら、俺はいなくても大丈夫だろう

そう言ったときの直樹の顔が、どこか泣きそうに見えたのは。

純矢の、思い過ごしだったのだろうか。

## 御衣黄の樹

それから、直樹が純矢に話しかけることはなくなった。

本当にぱったりと途絶えるかのように。

顔を合わせれば「おはよう」「ぐらいの挨拶はするのだけど、そのまますぐに目をそらして、どこかへ行ってしまふのだ。

「もう、あいつのことは忘れるよ」

一瞬、追いかけてやろうとした純矢の腕を、祐介が掴んだ。

「無かったことにすればいいじゃないか。あいつの言っていたことも、全部」

わかったな、と。

やけに真剣な表情で言い聞かせる。

確かに直樹の言っていたことはどう考えてもおかしかったし、本来ならば相手にせず、祐介の言うとおり全て忘れてしまふのが得策だろう。そうすれば元に戻るだけだ。3年前のこととか、直樹のわけのわからない言葉で混乱することも、もう無くなる。

けれど、純矢は。

「…どうして」

姿を目で追ってしまふ。

どうして。どうして。

そればかり考えて、でも答えは見つけられない。

直樹の笑顔を見かけるたびに、胸が痛くて仕方がなかった。

夏休みに入った。

やはり高校2年ともなると、各教科から課題がわんさかと出される。1年のころも多いなとは思っていたが、今年はその比ではない。

もうあと数ヶ月で受験生なんだからな、という教師の言葉が耳に

痛かった。

これでは、3年に進級したときのことか思いやられる。進学校に通っているわけでもないのに、なぜここまで追いつめられなければならないのか。

そうやって嘆いても、事態が変わるわけではない。

とりあえずこの鬱陶しいプリントをすべて片付けてしまおうと、純矢は1人で家を出て、近所の図書館へと向かう。

珍しく、傍らに祐介の姿はない。

最近は何も気づけずと一緒になっていたものだから、1人で歩いていると、何だか隣がスースーした。

「こんにちは」

カウンターに顔見知りの司書が座っていたので、軽く会釈する。館内は静かだ。今日は結構、空いている。

ぐるりと周囲を見回してそう思い、純矢はいつもの席へと向かった。

窓際にあるテーブルが、純矢のお気に入りの場所だ。

しかし、そこには。

「え、」

「あ。」

先客が居た。

思わず声を発して立ち止まる。向こうもこちらに気づいたらしく、顔を上げた途端、ぽかんと口を開けて止まった。

…朝川直樹だった。

「奇遇、だね」

「…ああ」

沈黙の後、直樹がぎこちなく微笑んだ。

純矢もなんだか気まづくなって、躊躇いがちに頷く。

夏休みが始まって約一週間。学期末や終業式の時も2人はほとんど喋らなかつたし、近づこうとすればなぜか祐介の妨害が入っていたので、まともな会話を交わすのは本当に久しぶりだった。

このまま引き返すのも不自然と思い、純矢はゆっくりと相手に歩み寄った。

見ると、テーブルの上には教科書やプリントが載っている。

「あさが…いや、直樹も勉強？」

「家より集中できるからね」

「そうなんだ」

「うん。…あ、そうだ」

「何？」

急に思いついたような表情を浮かべた直樹に、純矢が首を傾げる。彼はにっこりと微笑んだ。

「呼び方、やっぱり朝川でいいよ。清白君」

一瞬、何を言われたのか解らなくなる。

「え…」

「その方が、君も楽だと思うし」

思わず目を見開いた純矢に構わず、直樹はのんびりと続ける。

例の、仮面のように整いすぎる笑顔で。

それを見た途端、純矢の胸にまたあの感覚が蘇った。懐かしさと、痛みと、どうしようもない焦燥感が縋り交ぜになっていった。自分が何かを忘れている、けれど思い出せない。

とても、大切なことであるはずなのに。

「なん…で」

「そんな顔するなよ。もう君に、変なこと言ったりもしないからさ」  
不自然なほど明るい声音で言いながら、直樹はなぜか帰り支度を始めていた。

テーブルの上に置いていた教科書や課題プリントを、鞆につめていく。

「忘れてくれよ。そうすれば、お互い苦しまなくて済むと思う。…

ああ、それとも、もう祐介に言われたかな」

鞆を肩にかけて、直樹が立ち上がった。

事態が飲み込めず目を瞬かせている純矢の肩に手を置き、そのままポンポンと優しく叩く。

「ま、とにかく、そういうことだから」

「…どういうことだよ」

「そのままの意味」

「…」

相手の言うことが理解できない。

いつもいつも、出会ってからずっと、直樹は純矢に理解できないことばかりを言っている。

見ている方が悲しくなるくらい、笑顔のままで。

純矢は拳を握りしめた。

「…ちゃんと、俺の解るように話せよ」

「解るように話しているつもりなんだけど」

「でも、俺には解らないんだ」

「そりゃ残念だね」

「お前…ふざけるな」

「おっと、怒るなよ」

肩をすくめる直樹。

わざと純矢の目を見ないようにしているようだった。

「俺、そろそろ帰ろうと思ってたところなんだ。清白君、良かったら、ここ使って」

「ちょ…直樹」

「朝川でいいってば」

「っ、」

きつい口調だった。思わず純矢が怯んでしまうほど。

まるで差し出された手を拒絶するかのようになり、ぴしゃりと相手をはね除ける声。しかしそれは、必死で平気なふりを装っている子どものように、どこか痛々しくも感じられた。

表情が笑顔のままだったから、尚更。

「じゃあね」

素っ気ない言葉を残して、直樹が去っていく。彼が大きな棚を横切り、その背中が完全に見えなくなった頃、純矢はようやく我を取り戻した。

「…待てよっ」

無意識に走り出す。

ここが図書館であることを忘れ、慌ててバタバタと直樹を追いかけた。

外に出ると、真夏の太陽がまっすぐ目に飛び込んでくる。

歩くのが速いのか、直樹はもう既に図書館の敷地を出て、側の歩道を歩いていた。

照りつける眩しさに目を細めながら、純矢は急いで彼へ駆け寄る。その、図書館の横に続く並木道には、昔から御衣黄という桜がいくつか植えてあった。

夏である今は、とうの昔にすべて葉桜になってしまっていたけれど、純矢はなぜかその光景の中に、舞い散る黄緑色の花びらを見た気がした。まるで遙かな記憶を重ねるかのよう。

揺れる木漏れ日の悪戯か、それとも上昇した気温が起こす曇気楼か。

幻想的なそれは、瞬きのたび瞼の裏にちらちらと残像を映し、純矢に軽い目眩すら覚えさせた。

「何の用」

腕を掴むと、直樹は怪訝そうに振り向いた。

息を切らしながら、純矢は口ごもる。

「えっと…」

「まさか、何も考えずに追いかけてきたんじゃないだろう」

「…」

その通りだった。

純矢は俯いて、もごもごと何か言い訳らしきものを呟きながら手を離す。

直樹に背を向けられたとき、頭が真っ白になってしまつて、次の瞬間、ほぼ反射的に追いかけていたのだ。自分でも、どうしてそんなことをしたのか、改めて訊かれるとよく分からなかった。

「呆れた」

そう言つて、直樹が溜め息を吐く。

「一体なにがしたいんだよ、純矢。君が困るだろうと思つて、せっかく俺が身を引こうとしてるのに…それをわざわざ追っかけて、台無しにするようなまねをして」

純矢がパツと顔を上げる。

相手の言つた内容にも驚いたが、それよりも。

直樹は今、自分のことを何と呼んだ？

「なお…」

「純矢が悪いんだ。俺、もう我慢しないよ」

「え？」

わけのわからないうちに腕をぐいっと引っ張られて、純矢はバランスを崩して前に倒れ込んだ。

純矢が状況を理解する前に、すかさずそれを直樹が抱きとめる。

以前、学校の図書室で強く抱かれたときとは違い、その腕は優しく包み込むように純矢を抱きしめた。

「な…にすんだよ！」

びっくりして両腕を突っぱね、相手を押し返そうとする純矢。

一瞬の隙に、直樹はその唇へ掠めるようにキスをした。

純矢の思考が止まる。

直樹はやけに静かな表情で、ゆっくりと顔を離した。

「純矢のせいだよ」

「…え…」

「俺は諦めようとしてたのに、純矢が望みを持たせるようなことするから」

「な…に…言つて…お前…今、何を…」

「キス」

「！」

顔を真つ赤にした純矢は、今度こそ直樹を突き飛ばした。

「ごしごしと手の甲で唇をぬぐいながら、彼はじりじり後退する。

「なに考えてんだ、この…変態つ。俺は男だぞ!？」

「知ってる」

直樹は当然のように頷いて、開いた距離を元に戻すように、すたすたと相手へ歩み寄った。

後ずさり続ける純矢の背中に、とん、と何かが当たる。御衣黄の樹だった。逃げられない。

直樹は相手の目の前で立ち止まった。

びくりと震えた純矢の肩を、彼は掴んで引き寄せる。

「祐介にばれたら…殺されるな」

純矢の背中に手のひらをまわしながら、直樹は小さく呟いた。

でも、やめるつもりもないからね、と。

まるでその言葉に縛りつけられたかのように、純矢はうまく抵抗できず彼の腕の中に収まった。

やがて直樹は、すがりつくように手へ力を込めて俯き、純矢の肩口へ顔をうずめる。Tシャツを着た純矢の肩に額を押しつけながら、彼は「純矢」と囁くように、何度も相手の名前を呼んだ。

その声がまるで、小さな子どものように弱々しいから。

純矢はなぜか拒絶できなくて、直樹の腕の中でただ呆然としながら、肩越しに広がる並木道を見つめていた。

他人が通りかかったらどうするんだとか、見られたときに何と言いつくすればいいのかとか。それ以前に、さっさと目の前のこの男を突き放してしまえば良かったのだけど、なぜか、そのときはその方法を考えつかなかった。

ただ、頭の中が真つ白になって。

瞼の裏には、ちらちらと、御衣黄の花びらが舞っていて。

目の前にあるはずの葉桜がぼやけていき、過去を回想するかのよう  
うに、懐かしい光景が浮かんでは消えた。

じゅんや、こつちだよ

遠い声。

脳裏に、黒いランドセルを背負った2人の子どもが浮かぶ。

このさくら、ぎょいこうっていうんだぜ。すげえだろ

その子どもが片割れが、こちらを振り向いて笑う。

その顔は、いつも自分の側にいるあのクラスメートと、面差しが  
酷似していた。

遙かな記憶、奥底に潜んだ懐かしさと、それに伴う鈍い痛み。

純矢は硬直した。

自分は、この場所を、祐介と一緒に歩いたことがある。

それも、遠い遠い昔に。

## 違和感

図書室を出ると、いつも綺麗な空が広がっていた。上を見上げながら歩く俺に、あいつが「気をつけるよ」と苦笑する。

茜色に染まった夕焼けが見えることもあったし、少し遅い時間になると、薄墨をひいたような淡い夜空に星が光るのを発見したりもした。すごいな、と呟いたら、すごいな、と返ってくる。

楽しかった。それだけのことが、ただ。

たとえ曇っていても、雨が降っていたとしても、俺はその空を綺麗だと思ったに違いない。

だって、隣にはいつも、あいつがいてくれたから。

「純矢」

優しい声。

夢でいつも聞く、いつも通りの …。

「ねえ、俺のこと思い出してよ」

「え？」

振り向くと、寂しげな笑顔。

心臓が凍りつく。

「待っていて、って。 … 言ったのに」

… 直樹。

目を覚ますと辺りはまだ真っ暗で、背中は嫌な汗でじっとり濡れていた。

枕元を探り、蛍光時計を引っ張り出して見ると、まだ夜中の3時である。

深く息を吸い込み、またそれをゆっくりと吐きだした純矢は、疲れたように再びベッドへ倒れ込んだ。タオルケットの端をぎゅっと

掴んで、気を落ち着かせるために何度も深呼吸を繰り返す。

「なんで…夢に、直樹が…」

3年前から、毎日のように見続けた夢。

その夢に出てくる相手の顔は、目が覚めたときはいつも思い出せないでいたはずなのに。

今日に限って、どうして覚えているのだろう。

しかもその相手は ……直樹だった。  
なぜ。

「キス…されたせいかな」  
ぼそつ、と。

思い当たる理由を小さく呟いてみる。

自分で言ったことに、純矢はどうしようもない恥ずかしさを感じて、ごろんと寝返りを打つ。顔から火が出るようだった。その熱を、枕に顔を埋めることでやり過ごす。

必死で忘れようとするほど、胸の奥がじりじり焼けるような感覚はより鮮明になった。

目を閉じると、昨日のことが嫌でも頭に浮かんでくる。

信じられないくらい近くにあった直樹の顔。

純矢、と。自分を呼ぶ、あの声。

そして、唇に触れた感触。

やわらかい、と感じる間もなく離れていった。本当に、何が何だか分からなかった。

「…っ」

ちくしょう。

一番のバカは、きっと直樹だ。

男なのに。男同士なのに。馬鹿なんじゃないか。頭がおかしいんじゃないか。あいつ、なんで俺にあんなこと。

純矢は恨めしげに唇をかみしめた。

自分がこんなに混乱しているのは、全部、直樹のせいに違いなかったから。

「じゅーんーやー」

どすん、と体の上に重み。

純矢が呻き声をあげながら目を開くと、目の前に友人の顔があった。

「祐介…」

「おはよう」

「…」

純矢は眉をひそめて黙り込んだ。

なぜ朝っぱらからクラスメイトが、自分のベッドにいるのだろう。そんな純矢の気持ちを読み取ったかのように、祐介は目が合うとにんまり笑ってこう言った。

「俺、1人だと勉強に集中できないタイプだからさ、課題、お前と一緒にやろうと思って。遊びに来たんだ」

「勉強するのか遊ぶのか、どっちだよ」

「できれば、両方」

「なんだそれ」

純矢は眉をひそめる。

祐介の特技は、早寝早起きだ。

昨晚、直樹のことを考えすぎてよく眠れなかった純矢にしてみれば、相手のその元気の良さが少し憎らしかった。

おまけに、やっと眠れたと思えば変な夢を見てしまって、気分はあまり良くない。

結局あの後、気づかぬうちに再び眠り込んでしまったらしく、二度寝のせいか頭はぼんやりして重かった。

「ごめん、祐介。もうちょっと寝かして…」

「なに言ってるんだ。さっさと起きろよ、もう10時だぜ」

「うー…」

「いくら夏休みだからって、あんまりぐうたらしちや駄目だぞ」

祐介は譲らない。

「どうやら、もう諦めた方が良さそうだ。」

「やれやれと溜め息を吐き出して、純矢は友人を睨みつける。」

「…わかった。起きるから…どけ」

「ん、何？」

「俺の上から…さつさとどけ！」

「おう、悪いな。忘れてた」

「絶対わざとのくせに。いけしゃあしゃあとそんなことを言って、」

祐介はよっこらしよと純矢の上から下りた。

「寝覚めが悪くて、純矢はむすつとしながら体を起こす。」

「祐介は相変わらず笑顔のまま、ひょいっとベッドから下りた。」

「なあ、どうせだから図書館で勉強しようか」

「え？」

「お前、図書館とか図書室、好きだろ」

「…あ、いや…まあな」

「好きというか、何というか。」

「まあ嫌いではないので、純矢はとりあえず肯定した。」

「その頭をぐしゃぐしゃと撫で回しながら、祐介は「じゃあ決定だ」

と笑う。ただでさえ寝起きで乱れていた純矢の髪が、更に爆発した。」

「着替えたら下りてこいよ。おばさん、俺たちの朝飯、ちゃんトラ

ップしてくれてたみたいだぜ」

「俺たち、って何だよ。祐介も食べるのか」

「おう」

「なんでだよ。自分の家で食べてきたんじゃないのかよ」

「だって俺、お前んちの味噌汁、好きだし」

「当然のような顔で、祐介はそんなことをのたまった。」

「えっ、と驚く純矢を置き去りにして、先に行ってるぞ、と軽い足

取りで彼は階下に下りていく。」

「…祐介」

「遠のく足音を聞きながら、純矢はベッドの上で怪訝そうに首を傾

いだ。

「なんで……あいつ、うちの味噌汁の味なんか知ってるんだ……？」  
純矢の記憶の限りでは、祐介が純矢の家に遊びに来たことなど、ほんの2〜3回しか無い。もちろん味噌汁やら朝飯やらを食わせてやったこともなかったし、そもそも母親と面識があったなんて初耳だ。

いつのまに、おばさん、なんて気軽に呼ぶような仲間になったのだろうか。本当に、いつのまに。

違和感に浸食されていく。

これは、一体どうということなのだろう。

祐介は、君の幼馴染みなのに

ふいに、直樹の声が脳裏に響いた。

御衣黄の花びらが、ちらちらと瞼の裏を舞う。

純矢はハッと慌てて首を振り、その幻影を追い払った。

## 並木道

考え事をしながら食べた朝食は、ほとんど味がしなかった。自分の母親が、祐介とやけに親しそうな雰囲気話しているのを聞きながら、純矢はぼんやりと思う。

もしかしたら、自分は、何かの病気なんじゃないだろうか。

直樹の言っていることを信じるならば、この違和感にも少しは説明がつく。自分は、何らかの理由で記憶を失っているのかもしれない。だから、こんなにも気分が落ち着かないのだ、と。

「ごちそうさま」

食べ終えて箸を置きながら、純矢は小さく溜め息を吐きだした。

直樹の言葉と。

自分自身の記憶と。

一体どちらを信じれば楽になれるのだろうか。

「純矢、課題どこまで終わった？」

「生物のレポートと、数学のプリントと…あと読書感想文。そっちは？」

「聞いて驚け。全く手え付けてない」

「…大丈夫か？」

「大丈夫じゃないから、お前のところに来たんじゃないか」

呆れた表情を浮かべる純矢と裏腹に、祐介はやけに明るい顔で笑っている。

本気で余裕があるわけではなさそうだから、多分、現実逃避なのかもしれない。

「言っておくけど、俺は手伝わないからな」

「わかってる。でも、たまに解らないところを聞いたりするぐらいはいいだろう？」

「はいはい」

純矢の家から図書館までは、歩いて15分もかからない。

朝食を食べて5分ぐらい休憩してから、純矢は祐介と共に家を出た。別に自宅で勉強しても構わなかったのだが、祐介がなぜか図書館に行く気満々だったので、あえて言われたとおりにしておいた。

空は相変わらず晴れ渡っていて、蝉の鳴き声もうるさい。外に出ただけで、体にじわつと汗が浮かんできた。

「あちい…ほんと暑いよなあ、毎日毎日…。暑すぎて干からびるかも、俺」

「鬱陶しいな、暑い暑い言うなよ、祐介。余計に暑く感じる」

「なんだと。じゃあ寒いと言えば涼しくなるのか!」

「…なんで怒鳴るんだ。暑苦しい」

「ほーら、お前も暑いって言ったじゃないか」

「小学生かよ」

馬鹿な話でもして気を紛らわさないと、やってられないくらいの良い天気。

見慣れた光景を10分くらい歩くと、図書館前の並木道に差し掛かる。

御衣黄の樹がずらりと並んでいるのを見た途端、純矢はふいに昨日の幻影を思い出した。

瞼の裏をちらちらと舞う、淡い黄緑色の花びら。

直樹に抱きしめられながら、純矢はそれらが徐々に鮮明さを増していくのを感じていた。

埋もれた記憶を掘り起こすかのように、時が経つに比例して、その幻はどんどん現実味を帯びていき、やがて最後には何が何だか解らなくなった。

これは何。一体、なに。

困惑した純矢は、なぜか溢れそうになった涙を隠すように、直樹の肩へ額を押しつけた。

夏の暑さも、互いの熱も気にならなかった。ただ、どうしても誰

かに縋り付いていたくて。

まるで寄り添うように、2人でずっと抱き合っていたのだ。それを思い出してしまった純矢は、カーッと頬に朱を上らせる。急に真っ赤になって俯いた相手を訝って、祐介が「どうしたんだ？」と声を掛けたが、純矢はそれを暑さのせいにして誤魔化した。

本当に。なんて馬鹿なことをしたのだろう、自分は。

あんな場所で、誰が通るかも分からないのに。どうかしていたとしか思えない。相手を突き飛ばして逃げればよかったのだ。いや、逃げなくとも、ただ直樹の腕をほどけば良かった。体格的には負けていないのだから、やろうと思えば出来たはずだ。それなのに、体を離すどころか、むしろ自分から抱き返すなんて。信じられない。あのときの自分は、何を考えていたのだろうか。ちようど木の陰に隠れていたことも功を奏したのだろうか。誰にも見られなかったのは幸運だったとしか言い様がない。

「ちくしょう」

立ち止まって純矢は、すぐ側の樹に手と額を置いて寄りかかった。はあ、と大きな溜め息を吐き出す。

少し前を歩いていた祐介が、くるつと怪訝な顔で振り向いた。

「何やってんだ？ さっきから赤くなったり青くなったり。また貧血か？」

「違う……」

「じゃあ何だ」

「…放つといてくれ」

「そういうわけにはいかねえよ。こんな暑い場所に置いといたら、お前すぐ倒れちまうだろ。ただでさえ虚弱なんだから」

「そんなことない」

「じゃあ、こないだのアレはなんだよ。よりもよって、直樹なんかの前でぶっ倒れやがって」

「……」

何も言えずに純矢は黙り込む。

直樹の名前を聞くだけで、顔から火が出るくらい熱が上がった。そんな彼を、祐介は眉を寄せて暫く見つめていたが、やがて小さく息を吐いてその腕をとった。

「わっ、」

「いつまでも木の陰にしゃがみこんでないで、さっさと行くぞ。図書館、きつとクーラー効いてて気持ちいいぜ」

「おい、ちよつと…」

痛いから腕を引つ張るなよ。

そう言おうとして顔を上げた純矢は、硬直した。

また、あの花びらが見えたからだ。

このさくら、ぎょいこうっていうんだぜ

大きく目を見開いて、純矢は友人の服の袖を掴んだ。

「…祐…介」

「ん、どうした」

「この…桜の木って…」

「ああ、これ。御衣黄な」

さらりと答える祐介。

それを聞いた純矢は、どくんと心臓が跳ねた気がした。

途端に、目の前の葉桜が、まるで一斉に黄緑色の蕾を開花させたかのような錯覚に陥る。

わき上がる違和感。まるで自分のものではないかのように、どくどくと脈打つ体。

息苦しさを感じて、純矢は肩で大きく息をした。

「なんで…知ってるんだ」

「樹の名前のことか？　うちの母さんが桜好きだから、ガキの頃なんとなく覚えたんだよ。それより純矢こそ、よくこの樹が桜だって分かったな。植物の種類とか、あんまり興味なさそうに見えるのに」

祐介の疑問には答えず、純矢はその袖を離して、代わりに自分の

胸の辺りをぎゅっと驚掴んだ。息が出来ない。何かを思い出さなければならぬのに、それが奥につつかえて出てこなかった。御衣黄の花びらの幻がまとわりつく。それらは目を閉じれば一層あざやかになった。思い出したい。思い出せない。思い出したら戻れない。霞む視界。直樹の声。やけに幼い祐介の声。覚えの無い記憶。胸を揺さぶる映像。どうすればいい。苦しい、苦しい、苦しい。

「ッ」

「お、おい！ 純矢っ、どこ行くんだよ!？」

無性に、その苦しさから逃れたくなくて、純矢は駆け出した。

祐介の制止にも構わず、目を閉じて闇雲に走る。

追いつかれたら、もう駄目だと思った。

自分の奥底に眠る、遠い、過去の記憶に。

キキ ッ

「純矢！」

間一髪のところ腕を引かれた。

ハッ和我に振り返直する。

大きく目を見開いた純矢は、目の前の光景を認識すると肩で大きく息をし、そのまま祐介に体を預ける形でその場にずると沈み込んだ。

自動車が数台、道路をびゅんびゅんと横切っていく。

もう少して、その中に突っこんでしまふところだったのである。

「危ないだろう、何やってるんだ」

祐介はきつい口調でそう言うと、荒く呼吸している純矢を引っ張って近くのベンチまで運んだ。

並木道の間地点に位置するそこは、ちょうど良い具合に木陰になっっている。

押さえつけるように座らされて、抗うこともなく純矢はぐったりとそのベンチに寄りかかった。

体中から、冷や汗が噴き出す。

「…悪い」

とりあえず、声に出せたのはそれだけだった。

顔をしかめながら、祐介は隣にどっかりと腰を下ろす。

「本当にな。一体どうしたっていうんだよ。いきなり、走り出したりなんかして…俺が追いつかなかったら、お前、今頃は死んでたかもしれないんだぞ。わかってんのか」

「ごめん」

「あほ。ごめんで済むかよ。こっちが死ぬかと思ったぜ。まったく、ヒヤヒヤさせやがって」

滅多に見ない、険しい表情だった。

そう思った次の瞬間、ごんっ、という音と共に、後頭部に痛み。

「痛…」

「死んだら、痛みを感じられることもなくなるんだからな」

握り拳をちらつかせて祐介が言う。

彼の拳骨は、いつもより力が入っていて強烈だった。それだけ心配させたと言うことだろう。

申し訳なくて、純矢はもう一度「ごめん」と口の中で呟いた。

そんな相手を横目で見ながら、祐介は小さく息を吐く。

「…本当に、どうしたんだ。顔を真っ青にして…何があった？」

「えっと」

くらりとする頭を支えて、純矢は口ごもった。

先ほどのことを思い出す。

御衣黄の花。幼い祐介の声。そして、直樹の言葉までもが一気にフラッシュバックして、頭がパニックに陥った。

衝動的に走り出していたのだ。どうしてそんなことになったのかなんて、自分でも解らない。

気づいたときには、車に轢かれそうになっていた。

目を閉じれば、耳にこびりつくような音が響きわたる。車の急ブレーキ音。

それは実際に聞こえた音ではなく、走っている途中、唐突に純矢の頭へ響いてきた音だった。

それはあまりにも生々しい、記憶という名の警戒音。

ぼんやりとしながら口を開く。

「前にも」

「え？」

「前にも…こんなこと、なかったか」

純矢は顔を上げて、友人の顔をじつと見つめた。

覚えている。たった今、思い出した。ほんの断片的にだが、過去の記憶が蘇った。

確か、前にも、こんなことがあったのだ。

目の前に車が突っこんできて、誰かに強く名前を叫ばれて、大きなブレーキ音を聞いた気がした。

純矢の言葉を聞いた祐介は、驚いて息を呑む。

じゅんや、と。目を睨り、信じられないことを聞いたような表情を浮かべ、彼が自分の名を紡ぐ。それを、純矢は感情のこもらない瞳で見っていた。容量オーバーを起こしたように、頭がうまく働かない。

記憶喪失になっていた者は、その失っていた記憶を取り戻した途端、意識を朦朧とさせてしまうことがある。そんなことをテレビか何かで聞いた覚えがあるが、もしかしたら、今がまさにそれなのかもしれなかった。

対する祐介はそれに気づいているのかいないのか、切羽詰まったように腕を伸ばし、がしつと強く相手の腕を掴む。

驚いている表情のまま固まった彼は、どこか呆然と、何度も純矢の名を呼んだ。

まるで確認するように、何度も、何度も。

「…思い出したのか」

やがて、ポツリと零れた言葉。

その呟きを耳にした途端、純矢は、ああやっぱりな、と思った。  
やはり自分は、大切な何かを忘れていたのだ。

## 幼馴染み

とにかく涼しい場所に移動しようということ、2人は当初の目的通り図書館へ向かった。

祐介に支えてもらうようにしながら、純矢はのろのろと道を歩く。やっと辿りついた頃には、もうフラフラだった。

「すみません、こいつ気分が悪いみたいなんです。どこか休める場所、ありませんか」

カウンターに祐介が声を掛けると、親切な職員はすぐさま部屋を提供してくれた。それは事務室の脇にある小さな部屋で、普段は職員が昼休みなどに利用する休憩室だという。

テーブルに、椅子が4つ。その奥にはソファも置いてあり、高校生男子が横たわるには多少せまかったが、寝心地は悪くなさそうだった。もとより、文句を言うつもりなど微塵もない。要は、純矢を休ませることが出来ればいいのだ。

部屋に入ると、年配の職員が祐介に麦茶を2人分、渡してくれた。だいぶ汗をかいているようだから飲んでおいた方が良く、とのことだった。

「暑気あたりかしらね。この時期は、ちゃんと気をつけないと駄目なのよ。熱中症で死んじゃう人もいるんだから。…あ、そのタオルケット、事務員の私物だけど、使ってもいいわよ。お腹を冷やさないように、その子に掛けてあげなさい」

ありがとうございます、と祐介は丁寧に礼を言った。

部屋の冷房のスイッチを入れながら、優しいな風貌をしたその職員は心配そうにこちらを見やる。眼鏡の奥の瞳は、少しだけ純矢の母親に似ていた。

「この部屋は暫く使わないから、ゆっくり休んでいてね」

「はい」

本当に親切な人だ。祐介はふっと頬がゆるむのを感じる。

このあたりの地域は過疎化が進んでいて、都会のような華やかさと賑わいは皆無だが、そのぶん人と人との密接な繋がりが存在した。同じ町に住む者は、皆ほとんど家族のようなものだ。たとえ顔見知りの相手ではなくとも、困っているときは無条件に手を差し伸べられる心の豊かさを、この町に住む大人達は持ち合わせている。

「…ゆうすけ」

職員が出て行き、ぱたん、と扉が閉じられたとき。

その音に反応したのか、純矢が緩い動作で祐介の方へ顔を向けた。

「純矢。あまり体を動かすな」

「平気だよ。…なあ、それよりも、訊きたいことがあるんだ」

「…何だよ」

「わかつてるくせに。もう、誤魔化すのはよせよ」

のそのそと体を起こす純矢。

祐介は慌ててそれを制したが、彼は言われたことを聞かずに「大

丈夫だ」と言って祐介の手を払いのけた。

目を見開いた祐介を、純矢はまっすぐに見つめる。

「正直に言ってくれ。祐介。…直樹の言葉は、ぜんぶ真実ほんとうなんだろ

う」

昼を過ぎると、日中の気温は更に上昇し、アスファルトの上に陽炎が揺らめいている。

近くの店でパンを買って食べ、再び図書館に戻ってきた2人は、植物や動物の図鑑の並べられた棚を横切り、その付近にあった2人がけの席へ腰を下ろした。

館内に人影はまばらで、特にこの辺りに置いてある本は人氣が少ないので、話を邪魔される心配はない。

午前中に、休憩室で話したいのことは話したが、純矢はそれでは納得しなかった。

もっと、もっと詳しくと、頼まれるまま話していたら、気づいた

ときには数時間が経過していた。うるたえた祐介が話すのを躊躇ったり、わざと歯切れの悪い言葉を使ったりしていたことが、その理由の一端になるのかもしれない。

気を紛らわせようと昼食を買いに外へ出てみたものの、純矢は質問の手を休ませなかった。

おかげで祐介はもう疲れ果てている。この3年間、必死で隠してきたものを吐露することは、彼にとってあまりにも重かった。できることなら一生、純矢には忘れていて欲しかったことなのだから。

やがて全てを話し終わり、2人は沈黙する。

純矢は物憂げな表情で、じつと窓の外を見ていた。もしかして直樹のことを考えているのかと思うと、祐介はどうしても不機嫌さを隠しきれない。

「知らない方が、お前も幸せだと思ったんだよ」

しんとした空気に堪えかねて、祐介は呻くように呟いた。

「直樹が、親の都合で東京に転校して…お前は、すごく寂しかった。俺と一緒にいるのに、遠くばかり見ててさ。悔しかったよ。

口を開けば直樹のことしか言わなかったし、それを俺にも強要しようとしてたんだ」

「ごめん、覚えてない」

「だろうな。…突然の事故だった。直樹が東京に行ってから、1年半ぐらい経った…高校に入る直前の、春休みのときだったかな。2人である桜並木を歩いていたら、いきなり自動車が突っこんできたんだ。かすり傷だったのは、奇跡としか言い様がない。確かに俺は、純矢が直樹のことを忘れてくれたらどんなにいいだろうとは思っていたけど、本当にそうなるとは思ってなかったよ。だから、その罰が当たったのかもな。車を避けた拍子に頭を打って…目を覚ましたとき、お前は俺と直樹の記憶だけ、きれいさっぱり忘れてたんだ」

祐介の話は、こうだった。

3年前。

中学2年の時に、直樹と純矢（と、ついでに祐介）は出会った。夏休みに図書館で偶然、席が隣り合わせになったらしい。ここまでの話は、以前直樹に聞いたものと全く同じだった。

もともと人懐っこい性格の純矢（とても信じられないが、記憶喪失になってしまふ前は、相当明るくて脳天気な少年だったらしい）は、面倒見が良い直樹とすぐ仲良くなり、保育園のときからの幼馴染みである祐介を差しおいて、一気に親友と呼べるまでの間柄になった。

これを説明するとき、祐介はやけに不機嫌になっていたが、まあそれはさておき。

「本当、異常なくらい仲良かったよ、お前ら。毎日、図書館で一緒に勉強してさ、同じ高校に行こうな、って。まだ2年生のくせに何を張り切ってるんだ、って俺が茶化しても、2人とも全然聞いちゃいなかった」

「…そうなのか」

「そうだったんだよ」

けれど。所詮はまだ中学生、大人の言うことには逆らえなかった。夏休みが終わってすぐに、直樹は東京に転校することになってしまったのである。

「直樹がいなくなっただけからのお前は、本当に抜け殻みたいだった」

「抜け殻？」

「そう。何て言うの、すっかり腑抜けちゃってさ、いつつも上の空。正直、俺は直樹が憎らしかったね。親友の座をあれ程あっさり奪い取っておきながら、自分はさっさと東京に行っちまったんだからな。…まあ、あいつだって、出来ることなら、お前の傍に残りたかったんだろっけど」

「…」

「覚えてないか」

「ああ。そのへんは、まだ記憶がぼやけてる」

「無理して思い出そうとするな。また、気絶しちまうぞ」

記憶を失うことになった原因。

事故は、何の前触れもなく、唐突に襲いかかった。

あの、御衣黄桜の並木道で。

「どうやら、運転手がハンドル操作を誤ったらしいんだ。まあ、大したスピードは出てなかったし、咄嗟に木の陰へ避けたから、俺たち2人ともケガはほとんど無かったんだけどさ」

「…でも俺、頭を打ったんだろう？」

「そうだよ。避けたときに、車体の一部がお前の体を掠めたんだ。直撃はまぬがれてたけど、お前、細っこいから吹っ飛ばされちゃった。歩道に倒れ込んだとき、後頭部をガツンと打ち付けた」

「大怪我じゃないか。何が、かすり傷だよ」

「傷自体は、本当に大したこと無かったんだ。血もそんなに出てなかったし、ちよつとした、脳震盪みたいなもんだな」

「だけど、記憶をなくすぐらい強く打ったってことだろう」

「うん。だからさ、そこが不思議なんだよ。医者も不思議がってた。普通なら、あの程度で記憶喪失にはならないし、もしなかったとしても、どうして俺や直樹のことだけ忘れてしまったのか、ってな。部分的な記憶喪失はそんなに珍しくないらしいけど、でもお前みたいに、特定の人物だけきれいにスポツと抜け落ちることは、滅多にならないうって」

「…」

「それから、高校に入ってから、お前は記憶を取り戻さなかったよ。お前の親もすごく心配してた。入院先の医者は、一時的なものだから放っておけばすぐ思い出す、なんて言ってたけどな。…高校

の入学式でさ、事故以来久しぶりに顔を合わせたとき、俺、お前を見て泣きそうになったよ。声をかけることに、ものすごい勇気が要ったんだ。そのとき、何て言ったと思う。『はじめまして。これから宜しくな』だぜ。よちよち歩きの頃から一緒にいた相手だったのにさ。本当、面白すぎて、涙が出てきた」

「…ごめ」

「謝るな。お前は悪くないんだから」

祐介の優しさが、痛くて仕方がなかった。

けれど、純矢は訊かずにいられたのだ。思い出さなければ、もっと大切なものを失ってしまうと感じていた。

純矢は黙り込み、祐介も、それきり口をつぐむ。

ふと窓の外へ目を向けたその横顔は、気づかぬうちに大人びて、その内の意志の強さを垣間見せる。

彼はきつと、純矢が望もつが望むまいが、ずっと傍にいてくれるのだろう。

まだ、幼馴染みであった頃の彼を思い出すことは出来ないけれど、純矢はこう思った。

「俺、…祐介がいて良かったよ」

こちらを振り向いた友人は、暫し驚いたように目を瞠ったが、やがて嬉しそうに破顔した。

ありがとう、と。

礼を言うべきなのは、純矢の方であるというのに。

その夕方。

勉強に集中できないまま、だらだらと図書館に居座って、2人はようやくその重い腰を上げた。

気温は少しだけ下がって、少なくとも昼間よりは過ごしやすくなっている。

夕焼けは見え、空の色も何となく薄くなって、ただ沈みゆく太

陽の残光だけがその存在を主張した。

並木道を歩いているとき、ふと純矢は思い出す。

「そついえば」

「何？」

「ここに来ると、たまに変な幻が見えるんだよ」

「まぼろし？」

「そつ。…多分、御衣黄の花びらだと思うんだけど。黄緑色の、ちらちらしたもの、目の前を舞うんだ。それで、何だろうと思っていたら、祐介の声が聞こえてくる」

「俺の？」

「ああ。と言つても、随分と幼くてさ。小学生か、それよりも下ぐらいの年齢なんだ。俺の名前を呼んでは、御衣黄のことを教えてくれる。幻とは思えないくらいハッキリしてて、ちよつと薄気味悪いなど思つてたんだ。もしかしてこれも、記憶を失つたことに関係してるのかな。頭を打つた、後遺症とか」

「過去のことを、少しずつ、思い出そうとしてるんじゃないか？」

「そつかもな。…でも。その映像を見た後は、決まつて頭がずきずきするんだ。痛まないこともあるけど、なんだか後頭部に違和感が残る。もつと思ひ出そうと、努力すれば尚更だ。でも、黄緑色の花びらが散つていく映像が、瞼の裏にこびりついて、消えないんだよほんと、矛盾してる」

「は？ 黄緑色の花びら、だつて？」

「そつ。…何を驚いているんだよ。御衣黄つて、緑色の桜なんだろう」

言いながら立ち止まり、純矢はすぐ傍の樹を見た。

その樹は確かに緑色の葉をしげらせているが、夏になった今は、花も蕾もその姿を見ることが出来ない。ただ、枝についている葉の丸みは、なんとなく春の花を思い起こさせた。

祐介は眉をひそめる。

「おかしいな」

「何がだよ」

「御衣黄の花って、散るときは紅く染まるんだぜ」  
「えっ」

純矢はびっくりして目を瞬いた。

それは、知らなかった。

何を思ったのか祐介はごそごそと鞆を探り、一冊の本を取り出す。見ると、どうやら植物図鑑のようだった。小さくて、手のひらにすっぽりと収まるサイズの。

「なんだ、それ」

「母さんに頼まれてさ、さっき図書館で借りていたんだ。確か、この樹のことも載ってたはず……お、あった」

覗き込むと、祐介は見やすいようにと純矢に図鑑を手渡してくれた。

そのページは、半分が御衣黄の写真で埋まっており、もう下半分にその説明などが書かれている。

御衣黄 - Giokko -

バラ目バラ科サクラ属

種：サトザクラ

特徴：肉厚の花弁をもつ。花の大きさは中輪から大輪の八重咲き。

色は白色から淡緑色、もしくは薄い黄緑色。ちなみに、これは花卉の葉緑体によるものである。

緑色の花を咲かせる唯一の桜で、珍しくはあるが、沖縄を除いた日本各地で見られる樹。

純矢は説明文を、ぶつぶつと呟くように読み上げた。

写真の御衣黄を指差して、祐介が口を開く。

「ほら、このへんをよく見るよ。開花したばかりのときは目立たないんだけどさ、中心に紅い条線があるだろう。これが、時間が経つにつれて広がって、散る頃にはほとんど紅色になるんだ。ま、場所

や時期でけつこう差が出るらしいけどな」

「…なんで、そんなに詳しいんだ」

「言つたろう？ 母さんが桜好きなんだよ。大ファンでさ、この樹のことも毎日のように聞かされるんだ」

「ふうん…」

純矢は小さく溜め息を吐き、ぱたんと図鑑を閉じて祐介に返した。「じゃあ、どういうことなんだろう。あの幻は、確かに黄緑色をしていたよ。紅色なんか少しも見えなかった。俺の記憶が、間違ってるってことかな。せつかく思い出しかけたと思ったのに」

「多分、混在してるんだよ。いろんな記憶がごっちゃになって、よく解らなくなってるだけさ。焦らなくても、ゆっくり思い出して、整理していけばいい」

再び歩き出しながら、祐介はポンと純矢の頭に手を置いた。

意外に大きい手のひらだった。

「俺は、待つてるよ。お前が全部、思い出すまで」  
優しい声。

大切な友だち。

純矢は、ちりちりと罪悪感に苛まれる。

「…ありがとう」

申し訳なくて、「ごめん」の代わりに感謝の言葉を口にした。きつと彼は、純矢の謝罪など望んでいない。

溜め息を吐きながら上を見上げると、淡い青空が視界に広がった。並木道が終わる。暫く歩くと、住宅街に入った。ここからは道が2つに分かれるのだ。

祐介が、「じゃあな」と言って手を振り、去っていく。

その後ろ姿を見つめながら、純矢は眉目を歪めるようにして目を細めた。

どうして忘れてしまったんだろう。  
大切なのに。

遠い夏の日

きっと、  
すごく大切な相手であつたに違いないのに。

## 電話

待ってる。

ずっと、待ってるよ。

大切な思い出。忘れない。覚えてる。声も、指先も、笑顔も、全部。

絶対に、消してしまったりなんかしない。

いつまでも大切に、心の奥へしまっておくから。

ねえ、だから。

早く帰ってこいよ。

待ってるから。

ずっと、ずっと待ってるから

。

アルバムを見せてほしい、と言ったら、母は少し複雑そうな顔をしていたが、何も言わずに頷いて、押し入れの奥から古いアルバムを引っ張り出してきてくれた。

中の写真は丁寧に貼り付けられていて、純矢がまだ小さかった頃  
保育園や、小学校のときのものも、きちんと整理してある。

写真の下に、見慣れた母の文字で、『純矢、 歳』などと説明が書いてあった。

「…あ」

自室でそれを開いて眺めているとき、ある1つの写真を見つけた。校門の前で、小柄な少年2人が、真新しい制服に身を包んで満面の笑みを浮かべている。

背景から察するに、おそらく小学校の入学式。  
2人の少年は、純矢と祐介だった。

祐介から、自分が記憶喪失であったことを告げられて、2日経つ。初めのうちは、もちろんシヨックだったけれど、でも心の隅には「やっぱりな」という気持ちもあった。そのせいか、時間が経つにつれ、混乱していた気持ちも大分収まりがついてきつつあった。

「思い出さない方が幸せ、か」  
祐介の言葉を思い出す。

溜め息を吐きながら純矢は自室へごろんと寝転がり、ぱらぱらとアルバムのページを繰った。

保育園、小学校、中学校。

全ての写真に純矢が写っており、その隣には、必ずと言っていいほど祐介の姿があった。

仲良さそうにじゃれ合う写真。

2人で頬を寄せ合い、一冊の本をなにやら真剣に読んでいる写真。  
運動会で応援している写真。

100メートル走で、1位と2位の旗を持って、2人でピースしている写真。

小学校の卒業式の写真もあった。

他の友だちと一緒に、桜の木の下で、目を少しだけ赤くしながらこちらを見ている。

覚えていない。その、他の友達のこととは何となく覚えているのに、祐介のことだけはまだ思い出せなかった。

「なんで、なのかな」

少し焦りながらも、焦るなという祐介の言葉を思い出して、純矢は小さく息を吐いた。

ゆっくりと、自分を落ち着けるような動作で、再びページをめくる。

次の写真は、中学校の入学式だった。  
初々しい学ラン姿。

小学校より少しだけ背が伸びた、でも今よりは小柄な2人。  
祐介がふざけて純矢に飛びついていてる。

両親と一緒に、玄関をバツクに微笑んでいるものもある。

2人はまるで当然のように、隣り合わせで写真に写っているのだ。

「…祐介」

お前、本当に俺の幼馴染みだったんだな。

俺はお前のことを忘れちゃったのに、お前はそれでも俺の友だち  
でいてくれたんだな。

そう心の中で呟いて、僅かな痛みを瞼を閉じる。

「ごめん」

どうして思い出せないのだろう。

桜の木の下に立つ祐介の横顔を、そつと指でなぞる。

なんで忘れてしまったのだろう。

写真の中で笑う祐介に向かって、もう一度「ごめん」と呟いてか  
ら、純矢は手のひらで顔を覆った。

「ごめん。祐介、ごめん。」

どうしてそんなに謝るのか、自分でも解っていないかった。

電話が鳴ったのは、午後2時を少しまわった頃のことだった。

いつのまにか、うたた寝をしていたらしい純矢は、母親の呼ぶ声  
で目を覚ます。

目を擦りながら階下におりると、一言「電話」と言われて受話器  
を渡される。言われなくても分かっているのだが、素直に頷いて受  
け取った。

もしかして祐介かな、と思ってそれを耳に当てた純矢は、そこか  
ら聞こえてきた声に驚いて、受話器を取り落としそうになってしま  
う。

「直樹…」

『ビックリした？』

電話の向こうで、直樹がクスリと笑う気配がする。それまで硬直していた純矢だったが、体の緊張が解けるなり眉間に深く皺を寄せた。

先日の恥ずかしさやら怒りやらも蘇って、意識せずとも声が険を帯びる。

「何の用だよ」

『やっぱり、怒ってるんだね』

「当たり前だよ。お前、どうして俺に、…あんな」

どうして俺にあんなことしたんだよ。本当はそう怒鳴ってやりたかったけど、羞恥心が邪魔をして、語尾が尻つぼみになってしまう。思い返すだけで、体中が熱くなった。

「ごによごによと言葉を濁している純矢に焦れたのか、直樹は小さく息を吐く。

『言っとくけどね。俺、謝るつもり、ないよ』

「なっ…！」

『ふざけて、あんなことしたわけじゃない』

笑う気配が消えた。

まるで緊張でもしているかのように硬質な声で、直樹は続ける。

『俺、本気だから』

「ほ…本気って、」

『解ってるんだろう。俺は本気で、純矢のことが、』

「うわっ！」

思わず純矢は叫び、一瞬、受話器を耳から遠ざけた。顔が熱い。額にじんわり汗がにじむ。

恥ずかしくて頭がどうにかなってしまいそうだった。

「い、いきなり何を言い出すんだよ」

『俺の気持ち。ちゃんと聞いてほしいんだよ』

「そんなこと言われても」

『仕方ないな。…ねえ、今から出てこられない？』

「へっ？」

『直接会って、話したいんだ』

「え、あ、えっと」

『嫌なら来なくてもいいよ。…学校で待ってる。図書室の横に、使  
つてない教室があるだろう。あそこで待ってるから』

「ちよつ、おい、急にそんな、一方的に」

『ごめん。じゃあね』

「直樹！」

ツーツーと音がする。一方的に通話が断ち切られた。

暫し受話器を持ったまま呆然としていた純矢は、我に返った途端  
がしゃんとそれを台座に投げつけた。

羞恥心、憤り、動揺、…そしてもう1つ。わずかな期待。

どうしてこんな思いを抱いてしまうのか解らなくて、純矢はまず  
まず混乱する。

本当に、直樹にはいつも混乱させられてばかりだ。

「ばっかやろう」

悔しまぎれに悪態を吐いて、純矢は階段を踏みならしながら2階  
の自室に戻る。

2分後。

大急ぎで制服に着替え終えた彼は、財布だけを引つつかんで家を  
飛び出した。

## 空き教室

純矢の学校は、ほとんどの公立高校がそうであるように、たとえ長期休暇の最中でも私服登校は認められない。

この暑い中、黒のズボンにカッターシャツ、そのうえネクタイを身につけて道を歩くのは、結構つらいものがある。

一応、シャツは半袖だったけれど、そんなもの涼しさの足しにはならない。増えるのは暑さだけだ。

純矢はいつそのことネクタイをはずしてボタンも開けてしまおうかと思つたが、もし生活指導の教師にでも見つかったら厄介なので汗をぬぐいながら何とか我慢した。

直樹のヤツ。

一体、何のつもりなんだ。

俺にわざわざこんなことさせて、許さない。

純矢はブツブツと怒りを言葉にしながら校門をくぐった。

気づかぬうちに早足になる。直樹に対する憤りの表れなのか、それとも、とつとと校舎内に入って直射日光から遠ざかりたかっただけなのか。自分でも解らなかった。もしかしたら両方かもしれない。「人を呼びつけて、あいつ何様のつもりだよ」

吐き出すように呟きながらも、しかし純矢は、自分自身に対する苛立ちもすっかりと感じていた。

昇降口で靴を履き替えながら溜め息を吐く。

直樹は馬鹿だ。

だけど、呼び出されるがままに、のこのこ家を出て来た俺も、同じくらい馬鹿だ。

あんな一方的な電話、無視したって良かったのに。

「わけわかんねえ」

自分の心も。

直樹の意図も。

全部が全部、わからないことだらけだった。

図書室は、本を傷めないようにするためなのか、日の当たりにくい校舎北に位置している。

北側の廊下はひんやりしていて、外から引きずってきた暑さも幾分は和らいだ。

夏休み中でも、本を借りたり勉強をしに来たりする生徒は少なからずいるはずだから、おそらく図書室の中は冷房が効いていて気持ちが良いだろう。だが、純矢の目的地はそこではない。

扉の隙間からにじみ出てくるような涼しい風に誘惑されながらも、純矢は何とか我慢して図書室の前を素通りした。

本場の目的地は、その隣。

過疎化で生徒数が減ったため、今は使われなくなってしまった空き室。

「あーあ」

その扉の前で立ち止まって、純矢は大きな溜め息を吐き出した。なんで、来てしまったんだろう。

一瞬、このまま引き返して帰ってしまおうかとも思った。けれど、出来ない。扉の前から足を動かすことが出来ない。

どうして俺はここにいるんだろう。

何のために、あいつに会おうとするんだろう。

ぐるぐると考えながらも、純矢はゆっくりと手を扉に掛ける。

やがてフツと短く息を吸い込んだ彼は、意を決したようにガラッとその扉を引き開いた。

「純矢……」

室内には、使い古した椅子や余った机がずらっと詰め込むように並べられ、掃除係がサボっているのか、中に入ると少し埃くさかった。

扉の反対側に3つ並んだ窓からは、淡く明るい光が見える。

その澄み切った水色の空をバツクに、直樹は端の席に腰掛けていて、彼は純矢が部屋に入るのを見た途端、そこを立ち上がった。

純矢は目を細める。

光を背にした直樹の顔は影がかかって、表情が良く見えなかったけれど、その声はどこか嬉しそうだった。

「こんなに早く来てくれるなんて、思わなかった」

「わざわざ呼びつけといて、何を言っただ」

「でも、君は無視することだって出来たはずだろう。俺は、絶対に来てほしい、なんて言わなかった」

「…」

純矢は小さく舌打ちしながら、渋々といった感じで直樹に歩み寄る。

直樹は安堵したような笑みを浮かべながら、座れよ、と傍の椅子を指し示した。

「ごめんな、いきなり電話して。ビックリした？」

「別に」

「そっか。よかった」

純矢が座つたのを確認して、自らもその向かいに腰掛けながら、直樹は言った。

「ちゃんと話したかったんだ」

「何を」

「この前のこと。純矢、俺を突き飛ばして帰っちゃっただろう」

「当たり前じゃないか」

純矢は精一杯の虚勢で、内心の恥ずかしさを押し殺しながら、相手を睨みつけた。

「…どういう、つもりだったんだよ。あんなこと。信じられない…」

何、考えてたんだ。馬鹿じゃないのか」

「怒るなよ。純矢だって、満更じゃなかっただろうに。…それに、俺をすぐに突き放さなかったのは、君のミスだ。そっちこそ、あれ

はどういうつもりだったんだよ。俺はちゃんと、距離を置こうとしたんだ。君を困らせたくなかったからね。だから図書館を出たんだよ。でも純矢は、わざわざそれを追いかけてきた。あれで、我慢しろって言う方が無理じゃないか。嬉しくて、キスの1つもしたくないって」

「う、うるさいっ」

せっかく隠そうとしていたのに。直樹の言葉で、みるみるうちに顔が真っ赤に染まる。

純矢は俯き気味に、ぼそぼそと弁解を始めた。

「あのときは…びっくりして。混乱してただけだ。追いかけたのは…その、お前が急に出て行くから…なんか、俺が追い出したみたいで、あのままじゃ気分が悪かったからだし…」

「じゃあ、キスの後すぐに逃げなかったのは？」

「あ、あれは！…あれは…その、本当は、お前をぶん殴ってやりたかったよ。逃げたいとも思った。でも…でも、なんでか知らないけど、えっと、何だか体が動かなくて…」

「嫌じゃなかった、てことじゃないの？」

「違う！」

思わず大声を出す。相変わらず真っ赤な顔で、純矢は、ばつが悪そうに目をそらした。

こんなふうには、相手の言葉をむきになって否定するのは、それが図星であることを示すようなものだ。純矢が自分の心を正当化しようとするほど、どんどん墓穴を掘ってしまっ。

直樹が苦笑した。

「あまり大声を出すなよ。隣の図書室で、勉強してる人もいるんだからさ」

「…誰のせいだと思ってるんだ。大声出させてる本人が、よく言うよ」

相手の顔をまっすぐに見られない。目を合わせると、なんだかむずむずする。

それが嫌悪感からくるものなのか、それとも別の何かなのか、純矢は見当が付かなかった。

こんな感情、初めてで。

初めてのはずなのに、微かな懐かしさも感じている。

そんな自分に混乱は増すばかりだ。

直樹は物静かな表情で、じつとこちらを見つめている。気配で、なんとなく純矢はそれが分かった。

どちらともなく、それきり黙りこくってしまふ。

ふと目をやると、窓の向こうで真っ白な雲が、空をゆっくりと横切っていた。

外ほどではないが、クーラーがない場所はそれなりに暑い。北側といえども、この教室は決して涼しいとは言えなかった。蝉の音がうるさい。みんな、ではなくて、じゃあじゃあと、まるで、下手くそなエレキギターを一斉に鳴らしたような、そんな音声。

手のひらに、じんわり汗がにじんでくる。

暫しの沈黙。

「俺の方を見なくてもいいからさ、言葉だけでも、ちゃんと聞いててよ」

それを破った直樹の声は、先ほどまでの軽さを無くしていた。

神妙な口調。

純矢は身動きできないまま、続きを待つことしかできない。

「俺はね、ずっと…確認したかったんだ。君が、俺のことを覚えてないって言ったときから、ずっと思ってた。3年前のこと。…3年前、俺たちが一緒にいたってことは…それだけは、事実なんだ、って」

純矢は怪訝そうに目を瞬く。

ぼつりぼつりと、独り言のように直樹は続けた。

「東京に行ってからよね、俺は君が好きだったよ。だから、手紙だつて書いたし、電話をかけようと思っただけでも、数え切れなくらい沢山ある。…全部、実行には移せなかったけどさ」

「なんで、」

「怖かったんだよ。君と一緒にいた夏休みが、夢みたい楽しかったから。…だから、本当に夢だったらどうしよう、って思ったんだ。…君は笑うかもしれないけど…とにかく、俺にとって、それくらいあの夏は大切だった。だから、怖かった。もし、現実じゃなかったら、って。それを思うと、確認することすら出来なくなって。君への手紙も、結局、書いて切手を貼っただけで、ポストには入れられなかった。返事が返ってこなかったらどうしよう、って…そればかり」

直樹は自嘲するように、唇の端を歪めた。

「女々しいだろう、」

「…、」

純矢は顔を上げて、何かを言おうとしたけれど、一体何を口にしたのか自分でも解らなくなってしまって、結局もう一度、目を伏せた。

ふいに、祐介の言葉を思い出す。

直樹がいなくなっただけのお前は、本当に抜け殻みたいだった

言うべき、なのだろうか。

ほんの少しだけ、過去の記憶を思い出せたのだということ。

祐介が幼馴染みであったことも、直樹が3年前まで一緒にいたことも、まだ、完全に思い出したわけではないけれど。でも、時折ほんの僅かに、手がかりになるような映像が脳裏に浮かんでくることもある。

そのことを、直樹に教えるべきなのだろうか。

「…ごめん」

「え？」

「ごめん…」

「なんで謝るの、純矢」

「どうして俺、思い出せないんだろう」

無意識のうちに、言葉が口をついて出た。

聞いた直樹が目を見開く。

純矢は苦しげに、まるで吐き出すように、顔を歪めて続けた。

「忘れた理由も、思い出せない理由も、自分じゃ見当が付かないんだ」

いつも、いつも、違和感ばかりが付きまとして。

「思い出したいよ。俺、もうこんなの嫌なんだ。祐介に謝ってばかりなもの、あんたの前で混乱してばかりなもの。もう嫌だ。早く思い出して、すっきりしたい。それで、あんたの気持ちにも応えてやりたい」

「…純…矢」

「俺、あんたが嫌いだ。変なことしか言わないし、…やることも、変なことばかりだし…。ほんと、大嫌いだよ。でも、昔の俺はそうじゃなかったのかもしれない。あんたのこと…、大切な友だちだと、思ってたのかもしれない」

純矢は、自分自身の言葉に途惑いながらも、おそろおそろ直樹と目を合わせた。

「だから…ごめんな。俺はもう、あんたの知ってる純矢じゃないんだよ、きつと。3年前のこと、夢じゃなかったんだって、あんたにも証明してやりたいけど、でもそんなこと出来ない。証明するため記憶がないんだから。出来ないんだよ、どうしても。なんだかもう、一生無理なんじゃないか、って気さえしてくる」

いつも奇妙な夢ばかり見ていた。

大切な人。大切な思い出。それが夢となって脳裏に浮かんでくる。あれも手がかりの1つだというのなら、自分はなんと馬鹿なんだろう。

あんなにも大切なものを、思い出すことさえ出来ないだなんて。

「…祐介は、それでいいって言うてくれるけど。でも、俺は

納得できない。…思い出したい。ぜんぶ思い出して、それでもう、こんなこと終わりにするんだ」

再度、ごめんと小さく呟いた。

謝ってばかりの気がするけれど、無意識のうちに声に出してしまうのだから仕方がない。

「ごめん。直樹、…ごめ」

「純矢」

謝る声を遮って、直樹がガタンと席を立ち上がった。

驚く純矢の頬に、彼はそっと手を伸ばす。その顔は、なぜか切なげに歪んでいた。

「どうして泣くんだ」

「…え、」

「泣かないですよ。そんなつもりで呼び出したんじゃないんだ。涙なんか見たくない。お願いだから、泣きやんで」

「俺、泣いてなんか…」

言いながら自分も頬へ手をやって、純矢は驚いた。

涙が、じつとりと頬を濡らしていた。

## 痛み

手のひらが、髪を梳くように何度も頭の上を往復する。  
優しい感触。

懐かしくて胸が潰れそうだ。

なのに、脳裏にちらちらと浮かぶ映像の欠片は、いまだに記憶の形を成さない。

ぼやけて、揺らめいて、今にも消えそうなくらい霞んでしまう。  
いくら思い出そうとしても、その出来損ないの記憶たちは、純矢が望む鮮明な画を示してはくれないのだ。

苦しかった。こんなにも、思い出したいと願っているのに。

そう考えると、唐突に流れ出したこの涙も、必然のものではないかと思えてくる。

だって、こんなにも優しい。だから、こんなにも苦しい。

直樹。

ごめん。

「…っ」

相手のネクタイを、縋り付くように、ぎゅっと握って。

純矢は肩を震わせた。

泣き出した当初は、自分が泣いていると全く気づけなかったぐら  
いなのに、いざ自覚すると、その涙はどんどん溢れ出して止まらな  
くなった。それと同時に、胸の辺りへ重苦しい感覚がのしかかる。

喉が押しつぶされたように声が出ない。代わりに嗚咽が漏れだした。

「なんで泣くの」

自分まで泣きそうな声を出しながら、直樹は純矢の頭を撫でつづ  
ける。

その問いかけに純矢は答えられなかった。

叫びだしたいほどの懐かしさが襲いかかって、それを抑えるため  
に唇をかみしめる。

まるで、事故の記憶を思い出したときのように、切ない衝動。既視感<sup>デジャヴ</sup>、とでも言うのだろうか。

…前にも。

前にも、こんなことが、あったような。

奇妙な感覚に、純矢はそっと顔を上げた。

直樹と目が合うと、赤くなった目の端から一筋の涙が流れ落ちる。唐突に肩の震えがなくなった。

「直樹：お前、もしかして」

「え、何？」

頭を撫でる手が止まる。

途惑いながら聞き返した、その瞬間だった。がらりと扉が開く音。

2人は、びくつと肩を震わせてそちらを見る。そこにいたのは。

「何、やってんだよ」

「祐介…」

いきなり現れた幼馴染みに、純矢が驚いてその名前を呟く。

祐介は、純矢の方ではなく、まっすぐに直樹を睨みつけていた。

乱れた前髪。上気した頬。汗のにじむ額。しわになったシャツと、ゆるんだネクタイ。

大急ぎで駆けつけたのだと、一目でわかる格好だった。

突然にやってきた祐介は、今にも殴りかかりそうな勢いで直樹に詰め寄り、鋭い表情で真正面から相手を見つめる。直樹は、少し硬いが冷静な顔で、その視線を受け止めていた。

やがて祐介は、じろつと純矢の方へ目を向ける。

「純矢、またこいつに泣かされたのかよ」

「え、あ、いや。これは…」

慌てて、ぱつと直樹から体を離すと、純矢は口ごもる。

気まずい沈黙の中、祐介だけが激昂していた。

「忘れる、って言ったよな。なんで会ったりしてるんだ。そいつと、今更なにを話すことがあるんだよ」

「えっと」

「待てよ、祐介」

それまで黙っていた直樹が、祐介と純矢の間に入ってきた。

正直返答に困っていた純矢は、それにホッと息をつく。

「どうして君がここにいるんだ。まずはそれを説明しろよ」

「お前に教えてやる必要はないな」

吐き捨てるように言つと、祐介はくるつと純矢の方を振り向いた。どうやら、純矢には教えてやる必要があると考えたらしい。

「借りてた雑誌を返そうと思つて、お前の家に行つたらさ、おばさんに、純矢ならお友だちに会いに出かけたわよ、って言われたんだ。最初のうちは、クラスの奴らと遊びに行ったのかとも思つたけど…」

雑誌だけでも置いて帰ろうとして、お前の部屋にあがらせてもらつたら、いつも壁に掛けてある制服がなくなつたのに気づいたんだ。それで、お前が学校に行つたんだと分かった。なんとなく嫌な予感がしたから、そのまま俺も家に飛んで帰って…」

「で、大急ぎで制服に着替えて、純矢を捜し回つたわけだ」

「うるせえ直樹」

落ち着きを欠いた祐介は、怒りを隠そうともせず直樹の胸ぐらを掴んだ。

「祐介！」

純矢が悲痛な声を出す。

しかし相手には聞こえないらしかった。

「お前のせいだ。お前なんか、帰ってこなきゃ良かったのに。お前のせいで純矢が混乱するんだ。このあいだ倒れたのだって、お前が純矢に余計なこと言つたからだろう？ あの食い意地張つた純矢が、

食欲ないとか言って昼飯残してたんだぜ。見るよ、ただでさえ細っこいのが、ますますやつれてさ」

「…君がそうやって俺に突っかかるのも、純矢を悩ませる原因になっているとは、思わないのか」

「なんだと！」

振り上げられた祐介の腕に、純矢は慌てて飛びついた。

暴力はまずい。焦燥に満ちた声で「やめろ」と叫ぶ。

なんだか随分と熱くなっているみたいだけれど、早く、いつもの明るい友人に戻って欲しかった。

「落ち着けよ。祐介、俺は大丈夫だから」

「じゃあ、なんでさっき泣いてたんだ」

「え、えっと、目にゴミが…」

「ベタな嘘はやめとけ」

ぐつと言葉に詰まった純矢の腕を、祐介は無言で引っ張った。

直樹から引き離すように、自分の方へ抱き寄せる。

「わっ」

「帰るぞ、純矢」

「へ？」

きよとんとする純矢に、祐介は何も答えたくない。

引きずられるようにして、扉の方に歩き出す。

「待てったら」

その前に、直樹が険しい表情で立ちはだかった。

編入初日の放課後、純矢に見せた顔とよく似た、どこか切なさを帯びた表情だった。

「話はまだ終わってない」

「なんのことだよ。どけ、純矢は俺が連れて帰る。これ以上、泣かしてたまるか」

「俺が泣かしたわけじゃないって、言ってるだろう」

「でも、お前と一緒にいたせいで泣き出したのは事実なんだ」

「っ、…」

直樹が唇をかみしめて俯いた。  
その間にも、祐介は純矢の肩を抱いたまま、ずんずんと歩いてい  
る。

すれ違ふとき、肩越しに直樹の表情が見えた。

きつく目を閉じて、耐えるように唇を引き結んでいる。

純矢は、ハツとした。

心臓が早鐘を打つ。

苦しそうな、切ない直樹の表情。

この顔を見たことがある。

そして、もう二度とこんな顔はさせまいと誓った

…。

「うあつ」

「純矢!？」

いきなり膝をついて倒れ込んだ純矢に、祐介が驚いて振り向く。

直樹も目を見開いて、反射的に純矢の傍へ屈み込んだ。

「純矢、どうしたんだ。純矢っ?」

「頭が…」

純矢は呻いた。

頭が痛い。割れるように痛い。

床に倒れたまま、制服に埃が付くのも構わず頭を抱え込む。

がながんと、後頭部を連続で強打されるような痛みが、純矢を苛

んだ。

声にならない声で、苦痛を訴えるように呻き続ける。

「なに…これ…」

ノイズのかかった映像。

壊れかけたビデオを流すように不鮮明な、画。

でもそれは、どこか懐かしい。

「っ…っ…あ…!」

痛みを堪えるために、純矢は目の前にあつた制服の裾をぎゅっと  
握り込んだ。

ぎりぎりど、血が滲みそうなほど強く握る。

直樹と祐介、どちらのものなのかは分からなかった。

「しっかりしろ！」

「待ってる、純矢。いま誰か呼んでくるから！」

切羽詰まった2人の声。

やがて、あまりの痛みに、純矢は意識を失った。

## カウンセラー

苦しませたかったわけじゃない。

泣かせたかったわけでもない。

傍にいたくて、誰にも渡したくなくて。

俺以外が、その隣に立つことなんて許せない。

それくらい大切な相手だった。

「ごめん」

好きだったんだ。

ただ、好きだっただけなんだ

。

「もう大丈夫ね。呼吸が安定しているわ」

純矢が倒れてから、祐介がすぐに校医を呼びに行き、その後、直樹と2人で保健室のベッドまで運んだ。

校医は最初のうちこそ驚いていたものの、今ではもうすっかり元のマイペースさを取り戻している。慣れた手つきで行った処置にも、全く手抜きは見られない。校内で純矢が倒れたのはこれで2回目だったし、どんな状況でも、人間は慣れてしまいう生き物なのだ。

「純矢…」

寝ている彼の横顔を見つめて、直樹はホッと安堵の息を漏らす。

その隣で、祐介が胸をなで下ろしていた。

さつきは本当にビックリしたのだ。急に倒れ込んで、頭を押さえ悲痛な声をあげ続ける純矢を前にして、自分たちは情けないぐらい何も出来なかった。それを考えるとつい沈んでしまっけれど、何はともあれ、彼に大事がなくて良かったと思う。

「さて。じゃあ、あなたたちは出て行きなさい」

「はいっ？」

直樹と祐介が同時に聞き返す。

あまりにも息が合いすぎたせいか、驚いた2人は思わず顔を見合わせ、次に「マネすんなよ」と低い声で呟いた。睨み合いながらもやはり息はぴったりだ。案外、似たもの同士なのかもしれない。

そんな2人にクスクス笑いながら、校医は繰り返した。

「ほらほら。聞こえなかったの？ 出て行きなさい、って言ったのよ」

「えっ。でも、どうして」

「この間、ケンカしてたでしょ。あなたたち、仲悪いのよね？」

「もちろん」

その問いには、2人とも一も二もなく頷いた。

仲が良いなんて思われたら迷惑だ。お互い、相手のことが大嫌いなものだから。

校医は自分の考察が当たったことが嬉しいのか、満足げにふふつと笑う。

「こんなところで、またケンカでもされたら、騒がしくてスズシロ君が目覚ましちゃうわ。彼、今は安静にしてなきゃいけないのよ。だから、あなたたち2人とも、暫く図書室にでも行っかけてくれないかしら」

「こいつと一緒に？」

祐介が顔をしかめて直樹を一瞥し、直樹は冷たい表情でその視線を受け流した。

ライバルの目など全く気にならないとでも言うように、直樹は校医の言葉に首を振る。

「先生。俺は静かにしていますから、ここに残ってもいいでしょう？」

「なにっ？ おい、直樹、お前めけがけする気かよ」

「事実を言ったまでだね。俺、君みたいに騒がしくないし」

「俺のどこが騒がしいって言うんだよ」

「そっやって、すぐ突っかかるところか」

「なんだと…！」

「はいはい、そこまで」

早速ケンカを始めようとした2人に溜め息を吐きながら、校医は意外に強い力でその首根っこをガシツと掴んだ。

「おわっ」

「ちょ、先生」

首根っこを掴まれている2人は、そのあまりの強引さに目を白黒させながら、大した抵抗も出来ないままに、扉の所までずると引つ張られていった。

校医は何故か、にこにこしている。

「スズシロ君の目が覚めちゃうでしょ。安眠妨害禁止。ほら、さっさと図書室にお行きなさい」

言いながら、足でガラリと扉を開いた。

大変、はしたない行為だが、すばらしく男らしい仕草だった。一応、彼女は女性なのであるが。

「え、あ、ちょっと、先生、ひきずらないで…　ぎゃっ！」  
ぽいつ。

まるでゴミを捨てるような要領で、校医は直樹と祐介を保健室の外へ放り出した。

そして、ぴしゃん、と扉を閉める。極めつけに、がちやりと鍵までするされてしまった。

「…」  
「…」

蝉の声が響く廊下で、2人は尻餅をついたまま、暫し呆然と保健室の扉を見上げていた。

床がやけに冷たい。

何が起こったのか、よく分からなかった。

しかし、やがて我を取り戻すと、お互いゆっくりと相手の方を横目で見やる。

鋭い視線が、交差した。

「…お前のせいだぞ」

「…何を言うんだ。君のせいだろう」

たっぷり数秒間ほど睨み合った2人は、これまた同時にぷいっと顔を背けた。

「ついてくんなよ」

「そっちこそ」

保健室を放り出されてから、約3分後。

悪態を吐きながらも、2人は肩を並べて、のろのろと図書室へ向かっていった。

「…ん」

瞼を開けると、白地に少し染みの付いた、見覚えのある天井が目に入る。

瞬きを繰り返しながら、ぼやける頭をゆっくりと動かして、純矢はベッドの横へ目を向けた。

薬品棚。椅子。テーブル。

白衣を着た女の人。

「あら、目が覚めたみたいね」

校医はくるつと振り向いて、純矢と目が合うと微笑んだ。

「気分はどう？」

純矢は手で額を押さえながら、のそのそと起きあがった。

先ほどまでの激しい痛みは、もう無かった。

「平気です。…また俺、倒れたんですね」

「ええ。お友達が血相変えて私のところに飛んできたわ」

言いながら、校医は純矢の顔を覗き込む。

純矢の額に手を当てたり、瞼の裏の血色を見たり、本当に必要があるのかどうかは知らないが、「口を開けなさい」と言って、口内を観察したりもしていた。

暫くして、彼女は満足げに「よし」と頷いて、純矢から離れた。

「本当に大丈夫のようね。あなたがあんまり蒼い顔しているから、最初は救急車も呼ぼうかと思ったけど」

「頭痛くらいで、大げさですよ」

「でも、普通の頭痛じゃなかったんでしょ。あの苦しみ方は異常だったわ」

思い出したのか、校医はただでさえ皺の目立つ顔を、更にしかめた。

眉をひそめた彼女は、普段の呑気な雰囲気が消えていて、なんだか、かなり有能な医者のように見える。

実際、純矢に対する処置は的確だったから、それなりの実力は持っているのだろう。ベテランらしい落ち着きと余裕が、言葉の端々からも感じられた。

「あの…そういえば、2人はどこに行っただんですか」

真剣な表情で考え込む相手に、純矢は少し気まずさを感じて、とつさに思いついたことを尋ねる。

校医は顔を上げて、ああ、と手を打った。

「お友達のことね。あの2人なら、今ごろ図書室あたりにでもいるんじゃないかしら」

「図書室…？ い、一緒に、ですか？」

「そうよー。ふふつ。2人一緒に放り出したからねー」

なぜか楽しそうに、校医は小じわの浮かぶ目をくしゃっとさせながら笑った。

純矢は苦笑いを返しながら、そうですか、と少し乾いた声で返す。

「…またケンカしてなきやいいけど…」

2人は互いに天敵だ。言うなれば犬猿の仲。まるでハブとマンガース。

顔を合わせれば、まず睨み合いを始めるだろう。

とてつもなく心配だった。2人が、ではなくて、図書室にいてあるう2人以外の生徒達のことだ。

巻き込まれていなければいいのだが。

そう思つて、純矢は大きな溜め息を吐き出した。

「ねえ、スズシロ君」

「はい？」

「あんな頭痛が起こつた理由…あなた、心当たりはある？」

「え、」

なぜか見透かされたような気がして、純矢は小さく息を呑んだ。

校医は優しいに微笑んで、ベッドの横に椅子を持ってくると、底へ腰掛けながら緩やかに小首を傾いだ。

「憶測で喋つて、ごめんなさいね。でも一応、これでも医者の方で端くれですからね、なんとなく解るのよ。私が思うに、多分あなたの頭痛は、精神的なものが原因じゃないかな、って。…それも、かなり深い部分のね」

「先生…俺の…こと、知つて…？」

「いいえ、知らないわ。ただ、なんとなく感じるのよね。さっきの2人と、何か関係があるんじゃないかしら」

「鋭いんですね」

純矢は、驚きを通り越して、諦めたように苦笑した。

彼女のことは、ただのマイペースなおばさんだと思つていたのに、それは大間違いだったらしい。

校医はにこにこしながら、何もかもを承知の上で、純矢に問いかけているように見えた。

「ねえ。私に、話してみてくれないかしら。ちょっとしたことでもいいの。そうすれば、何かアドバイスが出来るかもしれないわ。頭痛を治す方法とかも」

「あ、いや、」

「ふふつ。やっぱり、こんなおばさん相手じゃあ、言いくいわよね。それなら、言えることだけでも構わないわ。暇つぶしに喋るみたいな感覚でね、嫌になつたら、途中でやめればいいのよ」

口調や声は、あくまでも優しくかった。

相手をリラックスさせるように、のんびりした声。誰も、自分に

害を与える気はないんだと、言外に教えられた心地がする。その言葉はまるで催眠術のように、心へ染みこんだ。

話してみるのも、いいかもしれない。

この校医は本当に不思議な人だ。かたくなだった純矢を、いとも簡単に自分のペースへ乗せてしまう。

「えっと」

暫く考え込んでから、純矢はおそろおそろ相手と目を合わせた。

「さっきの2人は…俺の友達で」

「うんうん」

「でも俺は、2人と初めて出会ったときのことを、覚えてないんです」

「あらまあ」

そして、まるでズルズルと引つ張られるように、次々と言葉が溢れ出す。

うまく説明できている自信はなかったけれど、でも、それらは絶えることなく発せられた。

なんか、変な感じ。

大した躊躇いもなく喋りだした自分に、純矢は少し驚いた。

不思議なことだが、この校医の傍にいるとなぜか心が落ち着いて、そして何故か、全てを白状してしまった方が楽なんじゃないかという気さえしてくるのだ。

もしかして彼女は、心理カウンセラーの勉強でもしているのかもしれない。

とにかく純矢は、今日まで自分の心の中に溜めこんでいたもやもやを、少しずつ吐き出すように彼女へ伝えた。

直樹が編入してきたこと、そして、放課後の途惑いも。

のちに判明した、自分の記憶喪失のこと。

祐介から聞かされた、事故の真実も。

もちろん、さすがに直樹とのキスのことは言えなかったけれど、それ以外はほとんど口にしてしまった。

つつかえながら、それでも止まることなく、全てを。

「…そう。それで、苦しかったのね」

「はい。でも、なんかもう平気なんです」

嘘は吐いていなかった。

もちろん、そのもやもやが、解消したわけじゃない。

しかし喋り終えた後、なんだか心を軽くさせている自分に気がついて、純矢は内心驚きながらも微笑んだ。

## 理由

「人間ってね、とっさのとき、無意識に大切なものを守ろうとするんですって」

「え？」

「その大切なものは、人それぞれで違っているのよ。もちろん一番大切なのは命だろうけど。それ以外で言うと、たとえば、スポーツ選手なら腕とか足だったり、妊婦だったら赤ちゃん…つまり、お腹をかばったりするの。危ない、って考える前に体が反応するらしいわ」

「はあ…」

取り留めのない話の中に、校医は時折ヒントのようなものを混ぜ込んで、困惑する純矢の様子を眺めて楽しんでいるようだった。それはただの世間話のようだったり、彼女の得意分野である医学の話題であったりした。

彼女の声は穏やかで、年配女性特有の少し掠れたような響きが、なんとも優しい。つられて口を開く純矢は、なんだか誘導尋問にかかっているような気分になる。

「それって…事故にあったときの俺も、何かを守ろうとしてた、ってことですか」

「断定は出来ないけどね。でも、私の考えを聞いてくれる？」

「どうぞ」

ふふ、と笑って、彼女はゆっくりと語る。

「きつとスズシロ君にとって、その無くしてしまった記憶は、すごく大切なものだったんじゃないかしら。そう、それこそスポーツ選手にとつての手足と同じくらい、何物にも代え難い、守るべき宝物だから事故にあったとき、その思い出をとっさに心の奥へしまい込んで、頭を打った衝撃から守ったんだわ」

「え…でも、それじゃあ、なんで…」

「今になっても思い出せないのか、って？ それは多分、あんまり大事に大事にしまいこんだもんだから、取り出せなくなってるのよ。ほら、ドアの鍵とか、へそくりとか、たまにどこへ隠したのか忘れちゃうことがあるでしょう？ あれと同じ」

「取り出せない、だけ？」

「そうよ。なくしたわけじゃないの」

校医はゆったりと椅子に背をもたせかけ、組み合わせた指を見つめながら穏やかに続ける。

「焦らないで。大丈夫。きつと、そのうちフツと思い出すわ」

暫く黙り込んだ後、純矢は、やがて小さく頷いた。

幼馴染みの彼にも、何度となく繰り返し言われた言葉だ。焦るな。きつと大丈夫。お前は、悪くない。

それでも微かに胸をちくちくと刺す罪悪感。

純矢は思いを馳せるような表情で、なんとなく校舎北へ視線が向く。図書室のある方向だ。

そんな彼の横顔を見て、校医はにっこりした。

「さっきの2人、きつと、あなたのことが大好きなのね」

「うえっ？」

「あなたも2人のことが好きなんでしょう？」

「は、いや、あの」

「わかっちゃうのよね」。そういう悩みを持つてる生徒さん、あなただけじゃないの。友情と恋愛の境界線が曖昧になって、混乱して思春期にはありがちなんだけど、他人には相談しにくいことだから、結局は自分1人で、内側に溜めこんじやったりするの。それがストレスになって倒れちゃって、私のところへ来る人、今までにも結構いたわ。あ、私は以前、大学病院の精神科に勤めていたことがあったね。そういう人たちの心のケアとか、そうそう、数年前には中学校でスクールカウンセラーも兼任してたのよ。ふふ、懐かしいわあ」

「はあ」

いつのまにやら話が随分と変わってしまった。

目をぱちぱちさせながら、純矢は頬を引きつらせる。

「…で、でも俺は、その、そういうんじゃないよ」

「あらあら。違うの？ 本当に？」

言葉が見つからず、純矢は困ったように視線を彷徨わせた。

校医はそれを見ると苦笑して、否定しなくてもいいのにねえ、と肩をすくめる。

純矢はシーツの裾をぎゅっと握って、相手から目をそらした。なんだか落ち着かないというか、妙に気恥ずかしい。

純矢の…否、普通の感覚で言っても、男子高校生が年配の女性校医を相手に、こんな会話をしていること自体がおかしいのだ。普段の自分なら、何を訊かれたとしても答えやしなかっただろう。

今日の自分は、やっぱり少しおかしい。

「好きとか…嫌いとか。そんなんじゃないんですよ」

ぼろりと、本音らしきものが溢れ落ちる。

無意識に出てしまったそれに、純矢は疲れたように溜め息を吐いて、緩く首を振った。

「祐介はともかく…直樹にとっては、今の俺が誰を見ていようが、きつと関係ないんじゃないかと思うんです」

「あら、どうして？」

「だって。あいつが見ているのは俺じゃない」

自分で言っておきながら、その瞬間、純矢はハッと目を見開き…

愕然とした。

ああ、そうか。

ようやく合点がいつて、純矢は手のひらに顔を埋めた。

なんてことだろう。今更こんな形で気づかされるだなんて。知らず知らずのうちに顔が歪んだ。

「まあ…急にどうしたの」

校医がきょとんとしなから覗き込む。

純矢は、なんでもありません、と呻くように低く答えた。

「自分の馬鹿さ加減に、呆れただけです」

… やつとわかった。

あんなにも苦しかった、理由。

直樹が好きなのは、3年前までの…記憶をなくす以前の純矢だ。彼が大切だと思っっているのは、遠い夏の日、ともに過ごした懐かしい思い出。

彼はきつと、今の純矢に、過去の幻影を重ねて見ているに過ぎない。

何も覚えていない身にしてみれば、それが重くて仕方なくて。

でも、今の純矢が好きなのは …。

「あら、もう帰られるの？」

「はい。ご迷惑おかけしました」

「いいえ、お仕事ですからね。じゃあ、お友だちはまだ図書室にいると思うから、一緒に帰りなさいね」

「…どうも」

つくづく、変な校医だと思う。

その口調はあまりにも優しく穏やかで、こちらがどんな態度を取ろうと全く関係ないようだ。まるで、小学生を相手にしているように接せられる。しかし、不思議と嫌な気はしないのだった。

グラウンドで部活をやっている生徒の声、校舎内まで響いてくる。吹奏楽部も活動しているようで、音楽室のある特別教室棟の方から、金管系の低音が聞こえてきた。

ほんの少しネクタイを緩めて暑さをしのぐ。

図書室に向かう途中の廊下で、開け放された窓から、爽やかな風

が舞い込んだ。

思わず立ち止まり、その風の道筋をたどって、その先にある群青色の夏空を見つめる。風になぶられる前髪を鬱陶しげに払いながら、誘われるように、ゆっくり窓へと近づいた。

窓枠から少し顔を出して見上げると、空の真ん中に、白い綿雲がぼつかりと浮かんでいるのが目に付いた。雲は形や性質によってそれぞれ名前がある。自分はあまりそういうものに興味を持たなかったから、中学生の頃、理科のテストに出てくる積乱雲やら乱層雲やらの他には、その名を一切覚えようとしなかった。その知識は幼稚園児とそう大差はなく、見た瞬間に名を思い出せるのは、飛行機雲ぐらいなものだ。

綿雲：羊雲：まだら雲：鱗雲：すじ雲。

思い付く限り並べ立ててみても、一体どれがどれなのか、全然わからない。

ほら、よく見て。下が水平で、上がドームみたいになってるだろう。あれが綿雲だよ

目をすがめて、窓枠をぎゅっと握り込む。

懐かしい、けれど今の自分にとっては全く聞き覚えのない声が、脳に直接ささやくように響いた。

ああ。またか。

そつと閉じた目の奥で、じわじわと湧き上がる熱いものを、静かに内側へ押し返した。

もう、迷うことはやめるのだ。

言い聞かせながら、ゆっくりと窓から離れ、再び歩き出す。

風はもう、やんでいた。夏の暑苦しい空気が、体にまとわりつくようで鬱陶しい。けれど、前ほどは不快に感じなかった。きつと感覚が鈍くなっているのだろう。繰り返す蘇る過去の記憶と、浮かんでは消える懐かしい映像。最初のうちにはあれほど荒れ狂っていた

混乱が収まって、諦めにも似た、達観したような余裕が生まれてきつつある。

「焦るな。大丈夫」

ほんの数秒だけ立ち止まり、自分で自分の腕を抱えて、呟いた。

焦ったって、思い出せるわけがない。ちゃんと自分の内側に向かい合って、それで。

「…そうしたら、きっと」

ひんやりとした空気に包まれた。

北廊下を暫く歩いて、図書室の扉にたどりつく。

手をかけてガラリと開きながら、純矢は、涼しげなクーラーの匂いを感じ取った。

## 夕焼け

「純矢、もう平気なのか」

「おう。心配かけて悪かった」

中に入るとすぐ、がたがたと立ち上がる音がして、祐介が駆け寄ってきた。直樹もその後につき、こちらを心配そうに見つめる。「もう平気だよ」と笑う純矢の肩に手を置いて、「無理はするな」と念を押してきた。

図書室内は珍しく人気が多く、雑然としている。

3人が喋っていても誰も咎める者はおらず、祐介はそれ幸いとはかりに純矢に飛びつくと、ついでに直樹を押しつけて、そのまま遠慮無く愚痴りだした。

その主な内容は、こんなヤツ（直樹のことだろう）と一緒に過ごした時間が、どれほど無益で退屈で嫌悪すべきものであったか、と執拗にこちらへ訴えてくるものであった。

純矢は適当に相槌を打ちながら、なんとなく室内を見渡す。

扉から見て右側に、勉強する生徒のために設置された机が並べてあって、2人はそこに座って待っていたらしい。

直樹は読書中だったらしく、片手に本を持っていた。

見ると、それはB級映画を元にしたライトノベルで、その表紙のイラストは目に痛いほど鮮やかな原色で描かれていた。どうやらアクションものらしい。それが彼の趣味であるとは思いがたいので、多分、祐介と話すのが嫌だったから、そこらの棚から適当に抜き取って読み始めたのだろう。

それだけでもう、2人がどんなに刺々しい雰囲気での場にやってきたか、察することが出来る。あの冷静な直樹が、本の種類も確かめなかつたぐらい苛ついていたのだ。

その、抜き取った本を開いた途端に、顔をしかめたであろう直樹を想像すると、少し可笑しかった。

「…なに笑ってるの、」

「別に、」

「ふーん。そう」

急にクスクスと笑い出した純矢を訝りながらも、直樹は「本を戻してくる」と言っただけを返す。

それまで純矢の斜め前に立ち、直樹を威嚇していた祐介が、ぱつと振り向いて純矢に笑顔を見せた。

「なんか、懐かしいな」

「え、何が」

「お前のそういう笑い方。久しぶりだ」

純矢はきよとんとしながら、無意識に自分の頬へ触れた。

どんな顔で笑っていたのかなんて、自分じゃ分からない。笑い方を変えたつもりなんかなかった。けれど、祐介がそう言うのなら、きつとそうなのだろう。いつのまにか自分は、昔とは違う顔で笑うようになっていたのだ。多分、事故にあった、あのときから。

返す言葉を見つけれずに純矢が目を瞬いていると、祐介は上機嫌な表情のまま、ぽんと純矢の頭に手を置いた。

いつも思うけど、大きな手だ。

「俺は、お前が記憶を取り戻さなくても別に構わないけどさ。でも、そんなふうに笑ってくれんのは、なんだか嬉しいよ。昔に戻ったみたいだな」

破顔して、ぐしゃぐしゃと純矢の頭を撫で繰り返す。

雑な動作に、純矢は「痛えよ」と顔をしかめた。

もちろん、本気で痛がっているわけではなく、半分は照れ隠しだ。それに気づいた祐介が調子に乗って、今度は両手を使って掻き回してくる。髪はもうボサボサだ。何が面白いのか、祐介は純矢にじやれつきながら大笑いした。

やめろってば騒ぐなよ図書室だぞ、と一応たしなめるような台詞を言っただけから、純矢も仕返しに相手のわきをくすぐってやる。確か、祐介にはこれが一番効くのだ。

案の定、効果は抜群だった。相手が身をよじって逃げようとするのを、純矢はすかさず追っかけた。

「待てよ祐介」

「うひゃっ、ちよ、タンマ！俺、そこ弱いんだよ」

「うん、知ってる」

「ひ、てめえ性格悪いぞ…っあはは！」

なるべく抑えてはいるが、祐介の笑い声はよく通る。

「何いちゃついているのさ」

帰ってきた直樹が、仏頂面で割り込んできた。

司書教諭の痛い視線を背に受けながら、3人は図書室を出る。

涼しかった図書室内と、冷房設備など全く無い廊下との温度差は激しく、外に出た途端むわっとしたぐらいだ。ただ、もう日はだいぶ傾いてきていたから、学校に来たばかりのときほど暑くはなかったけれど。

「お、夕焼け」

昇降口から一歩外に出ると、茜色の光が3人を包んだ。

祐介の指差す方を見て、純矢と直樹は「おお」と感嘆した。

学校の裏には小さな山が2つ3つ連なっていて、その上に浮かぶ薄い雲がすべて淡紅色に染まっていた。

周辺の空は、薄紫と茜が混ざり合ったような絶妙な色合いをしていて、それは東側に行くにつれ濃紺へと変化していった。陽は西に沈む。その反対側から、もうすぐ夜が迫ってくるのだ。

どこか寂しげに、日暮らしの鳴き声が聞こえた。

「なんか帰るの勿体ないな」

祐介が、歩きながらそんなことを言う。

校門を出て、坂道を下り、暫く行ってバス停を通り過ぎてから、彼は再び空を見上げた。ここからの方が、さっきの場所よりも夕焼けが綺麗に見えるのだという。

子どものように、ぽかんと空を見上げたまま歩き続ける祐介に、直樹が呆れたような顔で口を開いた。

「おい。気をつけるよ。そんなことして、転んだって知らないから」「うるせえな、お前に注意されなくても、…わっ」

躓いてバランスを崩しかけた祐介を、慌てて純矢が支えた。

「なんだか、普段と役回りが逆になっているような気がして、思わず笑ってしまう。」

「大丈夫か？」

「あはは…悪い、純矢」

「ほーらみる」

「うるせえ直樹」

「ケンカすんなよ、2人とも」

言いながら、クスクス笑いが止まらない。なぜだか無性に楽しかった。

そんな純矢に気づいたのか、直樹が振り返って、つられたように微笑む。

「どうしたの。随分と機嫌が良いんだね」

「うーん…なんでだろうな。なんか懐かしくて」

「懐かしい？」

「ああ。だつてさ、3人で一緒に帰ったのなんて、中2の夏休み以来じゃないか」

「え、」

怪訝そうな顔で首を傾げる直樹に気づかず、純矢は歩きながらやけに脳天気な表情で笑う。

まるで当然のことを喋るかのように、彼は陽気に続けた。

「ほんとに懐かしい。直樹がいつも遅くまで本を読んだから、祐介はしょっちゅう先に帰ってたけど、何回か、3人で夕焼け眺めながら歩いたんだよな。…あ、そういえば、あのときは俺が転びそうになったんだっけ。それで、祐介が助けてくれ…て…あれ？」

違和感。

言いかけた口を開けたまま、純矢は思わず歩みを止めた。  
祐介が驚いたようにバツと振り向き、直樹も大きく目を見開いて  
いる。

数秒間の沈黙の後、少し掠れた声で祐介が問うた。

「純矢…今、何て言った…？」

日暮らしの声が、再び訪れた沈黙を埋める。

祐介と直樹は、じっとこちらを見つめたまま動かない。

やがて、ゆっくりと顔を上げた純矢は、少し不安げに目を泳がせた後、おそろおそろ口を開いた。躊躇いがちだったけれど、でも心の奥にどこか確信めいたものがある。

「なんだか…記憶、ぜんぶ戻ったみたいだ」

「…え」

「…え？」

問いかけの内容とは少しずれた答えに、再三の沈黙が訪れる。

遠くで、カラスの鳴く声があった。

やがて。

「…えええッ!？」

祐介と直樹は目を丸くし、見事2人同時に驚愕の声をあげたのだ。  
つた。

## 病院

「純矢、これは？」

「小学校5年生の遠足で、祐介と一緒に弁当食ってるときの写真」

「よし正解。次、これは？」

「えっと…小学校…何年生かは忘れたけど、学芸会ときの写真。」

ちなみに俺が召使いAでお前がナレーター」

「うん、いいぞ。それじゃあ、これは？」

「図工の時間に、顔に絵の具つけて遊んでたところを先生に盗撮された写真。ちなみに、このあと2人一緒に職員室へ呼ばれて注意された」

「そうそう。先生も俺たちのこと見て楽しそうに笑ってたくせにさ、後になってから、授業は真面目にやりましょう、だもんな。ちゃっかり写真まで撮っておきながら、説得力ないよ。ふざけんなって感じ」

「でも、これ確かタダで焼き増してもらったんだろ？ やっぱり

良い先生だよ」

「ん…まあな。そんじゃ、次はこれ」

「まだやるのか！」

疲れたように純矢が溜め息を吐く。

アルバムを開いてから、もうかれこれ一時間が経過していた。

切っ掛けが何だったのかは分からない。

校医が言っていたように、本当にフツと思い出したのだ。

記憶を心の奥底にしまいこんでいただけなのだと彼女は言うが、確かにそうなのかもしれない。切っ掛けさえつかめたらもう、祐介と過ごした幼い頃のこと、事故に遭ってしまうまでの過程も、純

矢が思い出したい事柄は、ほとんど何の障害もなくスラスラと取り出すことができた。ただ、やはり年月が過ぎたせいか脳裏に浮かぶ映像は大分色褪せていて、それは少し寂しかったけれど、まあ仕方のないことだと諦める。

もともと純矢は記憶力の良い方ではなかったし、今までは全く分からなかった自分の過去が取り戻せたというだけでも、充分すぎるほど嬉しかった。

だが、しかし。

記憶が戻ったとはいえ、問題がないわけではなかったのだ。

「空白？」

怪訝そうに聞き返す医者に、「はい」と頷く。

記憶を取り戻した翌日のことだった。純矢は母に引きずられるようにして、事故当時に大変お世話になったという病院へ検査を受けに行った。

脳波に異常がないかどうか調べられたり、思い出した状況について質問をされたり、とにかく色々あったせいで、終わり頃にはもうくたくただった。

最後に、担当の医師のカウンセリングを受けて終了とのことだったので、純矢は重い足を引きずって精神科に向かう。高校生にもなっ  
って付き添いは要らないと言い、母には先に帰ってもらってあった。

「どうぞ」

白く清潔な室内に足を踏み入れる。

「こんにちは」

「どうも」

そこにいた医師は顔見知りで、母方の親戚だった。

血のつながりは薄いから、特別親しいわけでもなかったけれど、患者に対する丁寧な対応は、高校生の純矢から見ても好感が持てた。

「頭痛はもう平気？」

「はい」

「痛みを感じた場所は？」

「えっと…最初の方で、後頭部をがーんと殴られたみたいな感じで…そのあと、痛みが前の方に移動するんです。場所は…だいたい、このへんだったかな。ここが特に痛い。で、最後の方はもう、頭全体がズキズキするんです」

「前頭葉…それと、海馬だね。記憶を司る部位だ」

「知りませんよ、そんなもの」

暫く、来たときに別の医師からされたのと同じような質問を繰り返された後、とりとめのない雑談に移る。

この若い医師（とは言っても、そろそろ三十路に入るかもしれない）は気さくで話しやすく、純矢もリラックスして答えることが出来た。一時期、純矢が入院していたころも、律儀に色々と世話を焼いてくれていたし、人の良さそうな笑顔は少し直樹に似ている。

だから彼が好きなのかもしれないと考えて、純矢は正直すぎる自分の心に、思わず呆れてしまった。

「じゃあ、2人のことも、ちゃんと思い出せたんだね？」

「はい。ただ…」

「ただ？」

言葉を濁したのには、わけがある。記憶を思い出した経緯や、校医の言葉、祐介や直樹のことも少しずつ掻い摘んで話すうち、純矢はあることに気づいた。

「ときどき、空白があるんです」

「空白？」

「はい」

まるで、喉の奥に引っかかってしまった小骨のようなもの。

次々と取り出されていく記憶の中に、いくつか、おぼろげで心許ない映像が見え隠れする。

それをハッキリさせたくて、必死で引っ張り出そうともがくのだけれど、どうしても尻尾を掴むことが出来ない。だから、気になっ

て仕方がないのだ。なんだか焦ってしまふ。

それは、久方ぶりに再会した知人の名前が思い出せなかったり、書けるはずの漢字をど忘れしてしまったときの感覚に、少し似ていた。

「だいたいの流れは思い出せる。だけど、ときどき映像が途切れるみたいに、思い出せない部分があるんです」

「ほう…たとえば？」

「事故にあった瞬間のこととか、直樹が転校したときのこととか…」  
出会ったときからずっと彼の傍にいたのだという事実を、純矢はしつかりと認識している。3年前の夏休み中、図書館で毎日のように直樹と会っていたことだけは、そのとき彼が読んでいた本のジャンルまで、はっきりと思い出せた。

なのに、別れの瞬間だけが、どうしても浮かんでこない。

親しい相手との、突然の別れ。

つらくなかったはずがないのに、その当時のことだけが霞んでいて、不鮮明なままだった。

医師は、ふむ、と顎に手を添え頷く。

「事故にあった瞬間のことは、覚えていなくても仕方ないな。衝撃を受けて、記憶が飛んだのかもしれないし、思い出さない方が良くと、君自身が判断したのかもしれない。だいたい人間は、自分にとって都合の悪い記憶は、どんどん消してしまうものなんだ。意識して覚えようとした場合と、どんなに時が経っても忘れられないくらい、心に傷を残してしまった場合を除いてね」

「でも、じゃあ、直樹のことは、」

「それは多分、まだ頭が混乱してるだけだよ。時間が経てば次第にハッキリしてくるさ。焦らないでいいよ」

どこか楽天的な笑顔で、医師はそう告げた。

焦るな、と。ここ最近言われ続けている言葉だった。祐介といい、校医といい、この医師といい、彼らから見て自分はよほど焦っているように見えるのかと、純矢は少し苦笑した。

「さて。もうそろそろ帰らないといけない時間かな。君、今日はバスで帰るんだらう?」

「あ、はい」

「お母さんにもよろしく伝えてくれよ」

「わかりました」

頭を下げて、看護師の「お大事に」という決まり文句を背に受けながら部屋を出た。

病院内は外来の患者が多いのか雑然としていて、隣の小児病棟から子どもの泣き叫ぶ声まで聞こえてくる。かん高い、その音声は凄まじく、純矢は泣いている子どもに同情するどころか小さな畏怖さえ感じてしまった。

代金を支払って病院を出た後、純矢はなんとなく空を見上げる。

「あ、雨降りそう」

小さく独り言。

頭上は久しぶりの曇天が広がっていて、空を埋め尽くす灰色の雲は、今にも落ちてくるかと思うほど重たそうだった。

家に帰ると、母に「祐介君が来てるわよ」と言われ、2人分のお茶を手渡される。

階段を上って自室に行くと、純矢のベッドの横に、幼馴染みがちよこんと座っていた。

「よっ、純矢」

「何しに来たんだ?」

「冷てえな。第一声がそれかよ」

言葉と裏腹に、祐介は相手を気遣うように自分の使っていたクッションを差し出す。まあ、もともとそのクッションは純矢のものであるから、当然と言ってしまえば当然なのだけれど。

ありがとう、と礼を言いながら、純矢は腰を下ろした。

「麦茶、飲むか?」

「おう。悪いな」

「用意したのは母さんだよ」

病院帰りで疲れていた純矢は、ぐったりとベッドに寄りかかる。

そんな相手を少し心配しながらも、祐介は機嫌の良さそうな表情のまま、今日ここに来たわけを説明した。

「どうやら彼は、純矢の記憶が戻ったという事実がにわかには信じられなくて、自分の家でじっとしてられなかったのだという。」

「ジーンズにTシャツというラフな服装の彼は、なぜか小脇にアルバムを抱えていた。」

「なにそれ」

「ん、ちょっと確認しようと思って」

「はい？」

「悪いけど、付き合ってくれよな」

「確認って…何のことだよ。アルバム使って、何するつもりだ？」

「記憶テスト」

「はあ？」

怪訝そうに眉をひそめる幼馴染みに頓着せず、祐介は1人いそいそとアルバムを開いた。

「懐かしいなあ」

「だから、何」

「純矢、俺が写真を見せるから、それがいつ、どこで撮られたものが当ててみてくれよ」

「…え？」

「いいからさ。ほら、スタート！」

やけに元気な祐介。

そして、話は冒頭に至る。

「一時間以上もそのテストを続けて、ようやく祐介は満足そうな顔でアルバムを閉じた。」

「気が済んだかよ」

疲れが溜まったせいか、不機嫌そうな声を出す純矢に、幼馴染みは「おう！」と思いつきり良い笑顔で頷いた。

ごめんな、疲れてるところを無理させちまって。そんなことを言いながらも、彼の表情はどこまでも明るい。

純矢が首をひねる。

「なんで、そんなに機嫌が良いんだ」

「嬉しいんだよ」

「嬉しい？」

「ああ。…俺、前に言ったよな。お前の記憶が戻らなくても、別に構わないって。あれ、嘔吐いたわけじゃないけどさ、やっぱり思い出してくれて嬉しいんだよ。正直言つと、俺だけが昔を覚えてるのって、なんだか寂しい気がしてたし」

「え、」

「ごめん。お前は、事故のこととか、思い出したくなかったことまで思い出しちゃってんのにさ。俺、どうしても嬉しいんだ。喜ばずにはいらねえよ。ほんと、記憶が戻って良かった。前みたいに笑ってくれるようになったし、なんか、ほんとに、すげえ嬉しい」

言いながら、祐介が甘えるように純矢の肩へ額を押しつける。

気の強い彼がそんな仕草をするのは珍しくて、純矢は目を瞬いた。

「祐介、」

「おかえり。純矢」

「…ただいま」

少し躊躇った後、純矢はおずおずと言葉を返す。

微笑もうとして失敗し、純矢は苦笑に似た表情で俯いた。

「心配かけて、悪かった」

言えなかった。途切れる記憶があるのだということ。

取り戻したはずの思い出に、埋めることの出来ない空白があったのだという事実を、純矢はなぜか、祐介に告げることが出来なかった。

肩に相手の体温を感じたまま、純矢はそっと目を閉じる。  
ずっと傍にいてくれた、大事な友人。  
自分の本心には、とっくに気づいてしまっていた。  
けれど、このぬくもりを裏切ることなんて、もう出来るはずがな  
かったのだ。

## 登校日

次の日から学校で夏季講習が始まり、高校生たちは、自由参加という名の強制登校を強いられた。

もちろん純矢も例外ではなく、じめじめとした空気の中、鞆を持って学校へ向かう。

昨日から珍しく雨が降り続いていて、太陽の光は分厚い雲にさえぎられ、日中でも外はぼんやりと薄暗かった。

天気が悪いと、なんとなく気が重くなってしまっるのは、なぜだろう。

快晴が続いていたときは「暑すぎる」と文句を言っていたにも関わらず、いざ青空が消えてしまうと、あれほど疎ましがっていた真夏日ですらも、少しだけ恋しくなってくる。

しとしと小さく響く雨音も、肌にとわりつくような湿気も鬱陶しい。

人間なんて気まぐれなものだなと、教科書を読む教師の平淡な声を聞きながら、純矢は窓の外を見つめて考えた。

「悪い、純矢。ちょっと行ってくる」

「え？」

「なんか、ミーティングやるから来い、って言われてさ」

昼休憩のときだった。

祐介は3年生に呼ばれて、純矢に「メシ先に食ってていいから」と言い残すと、そのままパン1つを片手にさっさと教室を出て行ってしまっ。

その後ろ姿を見送ってから、そういえば祐介はバスケット同好会に入っていたんだっけ、と今更ながらに思い出した。

週に1〜2回程度しか活動しないらしいし、祐介自身も「ただの

お遊び」と言っていたから、スポーツとは無関係の純矢が忘れてしまっていて無理はない。これは記憶喪失とは何の関係もないよな、と純矢は席を立ちながら考える。ただの物忘れだ。

おにぎりのラップをガサガサとはずし、とりあえず純矢は昼食を食べ始める。

一体何を話すことがあるのやら、ミーティングは随分と長引いたおにぎりを2つ、3つ食べ終え、沢山のおかずが入った弁当箱を空っぽにしても、まだ祐介は戻ってこない。ポケットに入っていたキシリトールガムを口へ放り込んでから、純矢は弁当を片付けた。

昼休憩は、まだ後30分ほど残っている。

そのまま暫く待ってみたが、祐介の戻ってくる気配はない。

純矢は思索したのち、おもむろに席を立ち上がった。

「田中」

「んー？」

「祐介が戻ってきたら、俺は図書室に行ってるって言っというて」

「はいよー」

教室の後ろで雑誌を読んでいた級友に伝言を頼み、純矢は教室を出た。

ざわめく廊下は、北側に行くにつれ静かになっていく。

途中でゴミ箱を見かけたから、先ほど噛んでいたガムを、包み紙にくるんでポイツと投げ捨てる。

図書館に着いたら何を読もう、と純矢は考えた。もともと、読みたい本とか、そういう目的があつて来たわけではないのだ。ただ、あの教室にじつとしていられる気分じゃなかった。

「…そういえば」

ふと立ち止まる。あと5、6mも進めば図書室という位置で、廊下にはもう、純矢以外の人影はなかった。

「直樹、どこにいるんだろう」

記憶を取り戻してから、まだまともに話していなかった。

あときは3人とも混乱していて、なんだかうやむやのうちに各

自の家へ帰ってしまったのだ。祐介はその後、家に遊びに来たので少しは話せたが、直樹からは全く音沙汰がなかった。なぜか少しだけ気まずくて、純矢の方からも連絡は取れずにいたのだ。

直樹のことになると、ただでさえ働きの悪い頭がよりいっそう役に立たなくなってしまう。

昼休憩にはいると同時に彼の姿は消えていた。

おおかた仲の良い連中と一緒に購買にでも行ったのだろうか、それきり戻ってこなかったのは少しおかしい。雨が降っているから、屋上やら中庭やらには行くわけがないし。もしかしたら学食だろうか。

そこまで考えて、純矢は無意識のうちにくるりと踵を返す。

目的地だったはずの図書室へ背を向けて、学食のある南棟の方向へ。

教室で頼んできた祐介への伝言が気に掛かったけれど、不思議と足が止まることはなかった。

南棟へ続く渡り廊下から、体育館の裏口が見える。

そこには大抵、柄の悪そうな3年生か、休憩中の運動部連中がたまっていたりするのだが、今日に限っては違った。

「あ」

直樹。

窓から何気なく目を落とした先に、目当ての彼を見つけて、純矢は思わず声を発した。

渡り廊下を暫く行くと非常階段があつて、下りられるようになってる。よく生徒らが近道に使う階段だ。

純矢は迷うことなくそこへ向かった。

「直樹」

「…え、」

校舎から体育館までは屋根伝いになっているから、雨に濡れるこ

とはなかった。ただ、しめったコンクリートの上には砂埃が張り付くように広がっていて、たぶん後で上履きの裏を拭いておく必要があるだろう。

純矢が声を掛けると、直樹は少し驚いたように顔を上げた。目を瞬いた後、やがて躊躇いがちに小首を傾ぐ。

「どうしたの。…俺に、何か用？」

「あ、えっと」

口ごもってしまった。

確かに直樹を探してはいたけれど、探し出してどうしようかなんて考えていなかった。

「さ…さつき、廊下から、お前の姿が見えたから、ちょっと気になつて。こんなところで何してるんだ？」

思いついたことをそのまま尋ねると、直樹は曖昧に微笑んだ。

「なんにも。昼飯食い終わって、やることなかったからさ。教室や学食は騒がしかったし、どこか静かなところに行きたくなって…それで、ここを見つけた」

「へえ、そっか」

それきり会話は途切れてしまった。

雨の音ばかりが、ざあざあ言っている。いつのまにか雨脚が強まっているらしかった。

純矢と直樹は、目を合わせ、そしてすぐに逸らすという、非常に不毛な動作を何度も繰り返す。お互い、言うべきことは沢山あるはずなのに、それがどうしても口から出てこない。そんな感じだった。

「…記憶」

「うん？」

「戻ったんだよね、全部」

「ああ」

ようやくと話題を見つけれられて、純矢は安心したように笑う。

体育館の中からは、熱心な部員が昼練習でもしているのか、ボールを叩く音やシューズが床を擦る音、意味のよく分からない掛け声

のようなものが扉越しに聞こえてきた。

直樹の隣に移動した純矢は、その扉に背をもたせかけて口を開く。「本当に、ごめんな。編入してきたとき…びっくりしただろう」

「当たり前だよ。まさか、たった3年で忘れられるとは思ってなかった」

「だから悪かったって。…ぜんぶ言うよ。お前がいなくなっただけからのこと、全部」

そうして純矢は、事故のことや、記憶を失ったままだった理由などを掻い摘んで話し始めた。

聞いている間、直樹はじつと遠くを見つめていて、何を考えているのかよく解らない。彼の視線の先にあるのは、灰色の空から降ってくる大粒の水滴だけだ。

ただ、目が合わないからと言って、不安にはならなかった。

取り戻した過去の数々が、そう簡単に崩れる関係ではないことを教えてくれたから。

「それで、さ」

「うん」

「実はまだ、思い出せないところもあるんだ」

「え？」

「祐介のことは大体わかるんだけど、お前のことになると…何て言うか、ときどき映像が掠れるみたいになるんだよ。特に、お前が転校しちゃった直後のこととか。別れ際、どういうことを話したのかとか、自分がどんな様子だったのか、全然、わかんないんだ」

「…」

「なあ、教えてくれないか。俺、あのときお前に何を言ったんだ？」  
そう言っただけで相手の方を見やり、純矢は少し驚く。

直樹が、怒ったような泣きそうな表情でこちらを見ていた。

「え、…何、どうした」

「…なんでいつも、祐介ばかり」

「へっ？」

「どうして、祐介のことは思い出せずに、俺のことは後回しなの。俺が何のために、東京から帰ってきたと思ってるんだよ。どうして…俺が傍にいなかったから？ 約束を守らなかったから？」

「ちよ、何を言ってる…」

急にガラツと態度を変えた直樹に、わけがわからず慌ててしまう。相手を落ち着かせようと手を伸ばして、ふと気がついたように純矢は眉をひそめた。

「なあ、約束って何のことだ？」

それが地雷だったらしい。

顔にさっと影をよぎらせて、そのまま直樹は衝動的に、純矢の腕を自分の方へ引っ張った。

キス

「んっ」

吐息が漏れる。

背中には、硬いコンクリートの壁。

一瞬のうちに引き寄せられて、暗がりには体を押しつけられて、何が起ったのかよく分からない。

まるで噛みつくように乱暴なキス。

深く唇を重ねられて、その感覚に純矢はぞくりと背を粟立たせる。

息をつく暇もなく、角度を変えて、何度も奪われる。

「やめっ！」

やめるよ、と言い終えることも出来ず口を塞がれてしまう。

相手はまるで逃げ道を塞ぐかのように、純矢の顔の横にある壁へ腕を付いていた。

反対の方の手で抱き寄せられ、腰を固定されているから、逃げようとしたって簡単には逃げられないのに。

「直…樹っ、よせ…！」

荒い呼吸の合間に、やっとそれだけを絞り出す。

けれど直樹は、純矢を捕らえる腕によりいつそう力を込めただけで、放そうとはしてくれなかった。

一応、扉のところから少しずれて、渡り廊下からは見えないような場所だけだ。

でもこんなところで、誰が来るかも分からないのに。

いや、それ以前に、なんでいきなりこんなことを。

ぐるぐると思考が絡まっていく。

純矢は必死で抵抗したが、呼吸を奪われるうちに、なんだか頭がぼうつとしてきてしまって、相手の肩を押し返そうとする腕も弱々しかった。

「…ねえ。いつになったら思い出すの。俺は、いつまで待ってれば

いいの」

直樹の声は不気味なほど静かだ。

ようやく解放され、純矢は肩で荒く息をする。目は、生理的に浮かんだ涙で濡れていた。

「なお…」

「ごめんね、純矢。俺そこまで我慢強い性格じゃないんだ」

今にも再び唇が触れてしまいそうなほど、互いの顔が近くにある。息を呑んだ純矢は、思わず一瞬、声を発することを忘れた。どうして。

「直、樹…」

「いつも、いつも。なんで祐介が先なんだろうね。子どもっぽいって自分でも解ってるけどさ、こんなの、嫉妬するなって方が無理だ。不安で仕方ないよ。…3年前、君は俺を好きだと言ってくれたけど…でも、もしかしたらそれって、祐介の次に、って意味だったのかな」

そう言っつて、彼はゆっくりと体を離れた。

壁に付いていた腕も下ろして、もう逃げていいよ、と言っつように一歩退く。

わけがわからないまま、純矢は途惑っつて直樹を見つめた。

本当に、彼はいつもわけがわからない。言動や行動に一貫性が無いのだ。自信满满だったり、急に不安がったり、怒ったり、優しかったり、…悲しそうだったり。こちらの都合などお構いなく、気まぐれに、不規則に、揺れ続ける。

なぜ彼が今、こんなことを言うのか、記憶を取り戻した今ですらも、純矢は理解できなかつた。

長いような短いような沈黙が落ちる。

やがて、それは破られた。

「…純矢」

雨音が、うるさい。

独り言のようなトーンで紡がれる直樹の声は、普段の彼からは想

像も出来ないほど不明瞭で、頼りなかった。  
それでも純矢は聞き取ってしまう。

「今の君が好きなのは、だれ？」

声が出ない。

驚いたように目を睨り、純矢は半ば呆然と相手を見つめた。

どうして。

どうして、そんな顔をする。

どうして今、そんなことを訊く。

どうして、いつも、いつも、俺を混乱させることばかり、するんだ。

「直樹」

どうして、お前が泣いてるの。

「おい、どこ行ってたんだよ。探したぞ！」

ぼんやりと廊下を歩いていたら、誰かに肩をぐっと掴まれた。

振り向いた純矢は、しばしばと目を瞬く。

「あ…祐介…」

「あ、祐介、じゃねえよ。お前、田中に伝言頼んだんだろう。なんで図書室にいなかったんだ」

「ごめん」

しかめっ面の幼馴染みに、純矢は掠れるような声で謝罪の言葉を口にする。

何が起こったのか、頭の中でうまく整理することが出来なくて、もはや混乱と言うよりは放心に近い状態だった。

そんな相手の様子に気づいたのか、祐介が怪訝な顔で覗き込んで

きた。

「どうした、元気ないな。…それにネクタイも歪んでる。シャツもよれよれだぜ。ほんと、どこに行ってたんだよ」

「…なんでもない」

「ふーん？」

眉をひそめながらも、祐介はそれ以上の追求はしないで、乱れきった純矢の制服を直してくれた。

「なあ、ところで、さっき直樹のヤツを見かけたんだけどさ。お前、あいつに何か言ったのか」

「え？」

「なんかこう…すっげえ落ち込んでた。お前を探してる時、西廊下の方で会ったんだけど、俺に気づかないままトボトボ歩いてたんだよ。正直、ざまーみろって感じだったけど、少し気になってな」

「…」

ぎゅっと拳を握りしめ、純矢は目をそらす。  
祐介は、そんな幼馴染みの様子を無言で見つめ、やがて小さく息を吐き出した。

「なあ、純矢」

「何」

「俺が、お前に記憶を取り戻してほしくなかった理由、覚えてるか」  
「事故のことを…忘れてほしかったんだろう」

「そう。で、その他に、もう1つあったのを言い忘れてた」

「…？」

「言いくかかったんだけどさ、…俺…お前を直樹に取られんのが嫌だったんだ」

「え…？」

「記憶を取り戻したら、お前がまた直樹の方に行っちゃうんじゃないか、って。ずっとそう思ってた。でもさ…今は違うよ。お前が、どこに行こうが関係ない。気にしないことにしたんだ。どこへでも、俺と一緒に付いていけばいいんだから」

「祐介、お前、」

「あはは。鬱陶しいかな」

「…少しな」

「ちえっ。はつきり言うよなあ、お前。昔から本当に、嘔吐けない性格なんだから。誤魔化すの下手くそだし、何かあると、すぐ顔に出る」

努めて軽い口調で言うと、祐介は肩をすくめた。

ネクタイを結びなおしてくれながら、彼は下から覗き込むように純矢と目を合わせてくる。

表情のない顔、それでいて雰囲気はどこか優しかった。

「何があったのか、今は聞かねえよ。後で、落ち着いたら話してくれるか？」

「考えとく…」

「おう」

仕上げにきゅっとタイを締め、祐介は相手の背中をばしんと叩いた。

「よし、行くぞ。もう午後の講習始まるからな」

「…痛い」

「慣れてんだろ。ほらっ、急げ」

腕を引かれて、走り出す。

祐介はいつもこうやって、立ち止まりそうになる純矢を、正しい方へ連れて行ってくれた。

もちろん彼にだって間違いや寄り道はあるけれど、でも裏切られたことは一度もない。いつだって当然のように、すぐ傍で一緒に歩いてくれた存在だ。今さら腕を振り払おうだなんて思わなかった。

唇だけが、まるで自分のものではないかのように熱かったけれど。

## 決心

信じていると、君は言った。

また逢える日まで、ずっと待っているから、って。

確かに君は、言ったんだ。

「おーい、朝川」

廊下をぼんやり歩いているときだった。

呼ばれて振り向くと、そこはいつものまにやら自分の教室の前で、中からクラスメイトが2人ほど、こちらに手を振っていた。重い頭をあげ、直樹は寝起きのような顔で目を瞬く。

その反応を訝しんだのだろうか、声をかけてきたうちの1人が座っていた窓際から腰をあげて、たたたと直樹の方に駆け寄ってきた。

「どこ行ってたんだよー。もうそろそろ講習始まるぞー？」

「あ、うん。悪い」

「まったくもう。昨日、近くの本屋で面白い漫画買ってきたからさ、お前にも見せてやろうと思ってたのに、メシの後すぐにどっか消えちまうんだもん。俺、がっかりしたよー」

「だから、ごめんって。また後で見せてくれよ」

「ん、百円ね」

「…金、取るんだ」

「えへへっ。うっそー。冗談、冗談」

明るくけらけらと笑うクラスメイトに、直樹もつられて微笑む。

彼らは高校生らしからぬほど人懐っこい性格をしていて、田舎町特有のおっとりした雰囲気も持っていた。

地方の人間はよそ者に警戒心が強いと言っが、彼らの場合それは

全くの逆で、編入初日から直樹はいろいろと彼らの世話になっている。本当に親切な友人たちだ。

「もしかして、清白やオギと一緒にいたのか？」

「え？」

教室に入り自分の席へ腰を下ろしたとき、もう1人のクラスメイトに尋ねられて、直樹は慌てたように周囲を見回した。

純矢はまだ戻ってきていないようだ。祐介もいない。

それを確認してから、直樹は何気なさを装ってクラスメイトに目を戻す。

「…違うよ。なんで？」

「いや、なんかさ、最近お前ら仲良しじゃん。一緒に帰ったりとかしてるだろ？ グランドで部活してたときに見えたんだ」

「そっか」

クラスメイトは、確か2人と野球部だった。

真っ黒に日焼けた顔に、丸坊主とまではいかないが、かなり短いスポーツ刈りの頭。

直樹と全く違うタイプの人間だが、だからこそ、一緒にいるとお互い刺激があつて楽しかった。

キーン…コーン…。

「あ、時間だ」

「んじゃ朝川、また後でな」

「うん」

自分の席へと帰っていく友人たちに微笑んで、直樹はカバンから参考書を取り出す。

ガラスと音がして、教師が扉を開けて入ってくると同時に、祐介と純矢がぎりぎり教室に飛び込んだ。

「なんだ、お前ら。遅いぞ」

「すんませーん」

教師に向かって祐介が軽い調子で謝り、純矢がぺこつと頭を下げる。

ちらりとそれを見やった直樹は、じりじりと心臓を締め付けるような思いを抱えて、ぎゅつと目を閉じた。

嫉妬心を抑えつける。

もう自分は、彼を独占できる立場じゃない。

愚かなことにも自分から、その資格を投げ捨ててしまったのだから。

夕方。

講習が終わった後、これから練習があるのだという友人たちと別れて、直樹は一人で下校した。

カナカナカナカナ…。

虫の鳴き声。短い一生の間、必死で鳴き続ける彼らの声が八方から聞こえてくる。

こんなふうには、歩きながら耳をすませることも、東京にいた頃は決してかなわないことだった。毎日とても忙しかったし、何より東京では、よほど郊外に出ない限り、虫の声など滅多に聞かれない。

「懐かしいな」

確か、中学3年の頃だっただろうか。

東京にいたとき、この町の風景を思い出せば、早く帰りたいと心から祈った。

帰りたい。

逢いたい。

早く、早く。

約束を破りたくない。守りたいのだ。彼と交わした、最後の約束だけでも、どうか。

「…もう遅い、か」

小さく呟いて、直樹はそれきり考えることをやめた。

家まではもうすぐだ。

町の中心から、少し離れた場所に建てられたマンション。その2階、突き当たりが、彼と彼の家族の家だった。窮屈というわけではないが、高校生の息子を入れて3人暮らしをするには、もう少し広いところが良かったなと、父がたまに呟いている。

しかし、直樹はそうは思わなかった。東京では、寮生活とはいえそれなりに広い部屋に住んでいたし、両親の実家もここよりはもっと大きなところだったけれど、今の生活に特に不満はない。小さいとか狭いとか、そんな感情は不思議なくらい湧いてこなかった。

だって自分は、この町が好きだから。ゆっくり流れる時間も、少し古くさい建物の匂いも愛おしくて、ずっと帰ってきたかったのだ。ポケットから鍵を取り出して、少し錆のあるドアの鍵穴に押し込む。

がちやりと、手に馴染んだ感触。

「ただいま」  
きい、ぱたん。

両親はまだ仕事だろう。誰もいないことは分かっていたが、直樹はとりあえず「ただいま」を言った。

彼が律儀な性格というわけではなくて、逆に、誰もいないからこそ「ただいま」を言うのだ。誰もいない家の中に、黙って入っているのは少し気が引ける。恐怖ではない。ただ、虚しいだけだった。

「ん？」

自室で服を着替えているとき、リビングの電話が鳴っているのに気づいた。

直樹はのろのろと上衣を羽織ってその部屋に移動し、随分と長い間放置されていた受話器をガチャツと持ち上げる。

「はい、朝川 …… なんだ。父さんか」  
よそいきの声を出して損をした。

他人からの電話に出るときは、意識せずとも声がやわらかくなる。

そんなふうには仮面をかぶる自分が、直樹は嫌いじゃなかったけれど、自分の身に染みついてしまったその習慣が、ときどき憎らしくなることもあった。

小さく溜め息を吐き出した後、直樹は受話器を持ったまま横の壁にもたれかかる。

「何か用。夕飯の買い物なら、母さんが帰りにやっておくって言うてたから、別に心配しなくても……え、違うの」

父の声はやけに真面目だ。

暫くそれを聞いていた直樹は、やがてフツと表情を消し、静かに「そう」と頷いた。

話の内容は唐突だったが、直樹は大して動じることもしせずに答える。

「…わかったよ、父さん」

以前の自分なら、父の言葉を頭ごなしに拒否して、絶対に嫌だと言い張っただろう。

だが今は少し疲れていたから反抗する気も起きなかったし、何より、良い機会だと思った。

直樹は目を閉じて、今日のことを顧みる。

約束を忘れてしまった純矢。当然のように彼の隣にいる祐介。

子どものように嫉妬して、衝動的に、純矢を傷つけてしまった自分。

思い出しただけで、重い。

ぐちゃぐちゃになってしまった頭の中を整理する、冷却期間が必要なのだ。

電話の向こうにいる父の言葉に忤えて、直樹は閉じていた瞼を上げて、ゆっくり言った。

「俺、東京に帰る」

遠い夏の日

## 緑色の花

夢を見た。

いつものように2人で、茜色に染められた図書館にいる。

本をめくる音。

それ以外はしんとした、居心地の良い静寂。

ただ、いつもと少し違ったのは、隣にいるあいつの顔がはっきり見えるということ。

そしてその姿は、もう中学生ではない。

3年前のあの日から大分成長して、高校生になった直樹の姿が、すぐそこにあった。

手を伸ばして、触れようとして、諦めて。それでもまだ傍にいたいと思ってしまうのは、これが夢の中だからだろうか。

現実では許されないことを、夢の中でなら叶えられると思っているのだろうか。

だとしたら、自分は、なんて愚かなことを。

結局は、伸ばした手を下ろすしかないというのに。

心がいつも叫んでいた。

欲しいものは、なに。一番欲しかったものは、一体なに。

自分自身に問いかけて、答えは解っていたくせに、気づいていないつもりでいたのだ。

「直樹」

どうしていつも、本ばかり読んでたんだ。

俺がどんな思いで待ってたか、知ってるのか。

どうして、こっちを見てくれなかった。

俺のことを好きだと言いながら、お前はいつも過去を振り返るばかりで、思い出してくれと訴えるばかりで、今の俺が何を考えているかが、まったく気に掛けてなんかくれなかったじゃないか。

本気で相手のことを思うなら、相手が何を考えていようが、受け容れてくれるものだろう。

それともこれは、俺の自分勝手な思いこみなのか。

「直樹、なあ、こっち向けよ」

俺はもう、3年前の俺じゃない。

無邪気で脳天気な、中学生の純矢じゃない。

こっちを見るよ。直樹。

頼むから過去にしがみついたりしないで、俺を見て。

今の俺を、否定しないで。

つらい。

苦しい。

でも好きなんだ。

ずっと、ずっと好きだったのに。

直樹。直樹。

どうして、もっと早くに、帰ってきてくれなかったんだよ。

ジリリリリ。

けたたましい目覚まし時計の音で目を覚ました純矢は、ぼやけた頭で枕元を探り、かちつと時計のスイッチを切った。

この目覚まし時計は最近買ったばかりのもので、少し高かったけれど、ものすごい音が出る。おかげで目覚めはばっちりだ。否が応にも現実世界に引つ張り上げられる。

変な夢ばかり見ているせいで眠りの浅い純矢は、明け方になってから深い眠りに落ちることが多かったので、朝は起きるのが非常に

つらかった。今日もまた例外ではなく、おそらくこの目覚ましがあったら、このまま遅刻するまで寝てしまっていただろう。

まあ、それはさておき。

「う……わー……」

先ほどまで見ていた夢のことを思い出し、純矢は呻き声を出しながら手で顔を覆った。

あいつが、今のあいつになっていた。

鮮明すぎる映像。あれほどまでに鮮明な画として見たのは初めてのような気がする。

やはり記憶を取り戻したことが関係しているのか、いつもならぼんやりして思い出せない細部のことまで、全て反芻することが出来た。

ああ、泣きたくなってくる。

純矢は手のひらに顔を埋めたまま、小さな声で、悔しそうに低く呻いた。

夢の中の自分はあまりにも情けなかったのだ。

自分のことを見てほしい、だなんて。そんな、嫉妬深い女の子じやあるまいし。

しかも、その嫉妬する相手が過去の自分では、もう笑うしかない。まったく救いようがなかった。

こんなにまで好きなのに、好きだと自覚すらしているのに、いまだに迷っている自分。

祐介の手を離すことが出来ない。

自分が直樹の方へ行ったらもう、彼は付いてきてなんかくれないだろう。祐介は直樹のことが嫌いだから。だからきつと、自分のことも一緒に嫌ってしまう。否、嫌うことはないだろうが、離れていってしまうかもしれない。もう二度と元に戻れないかもしれない。

馬鹿だ。

自分のことなのに、どうすればいいかも知らないなんて。

「……ちくしょー……」

臆病だと解つていながら、友人を失うのは嫌だった。

祐介と、直樹。

どっちつかずも苦しいけれど、だからといって、どちらか一方に決断するのは、もっと苦しいような気がしていた。

今日も講習があるから、学校に行かなければならない。

気が重たかったが、仕方なかった。

どうせなら余裕を持って行こうと、いつもより早めに家を出た純矢は、1人のんびりと並木道を歩く。例の、御衣黄桜の植えられた道だ。学校へ行くには少し回り道になるけれど、今日はなんとなくこっちを歩きたかった。時間ならば、充分あるのだから。

朝早いせいか周囲に人影はなく、ただ時折、通り過ぎていく風に小枝がさわさわと揺れるだけだった。

散るときは、紅く染まるんだぜ

祐介の言葉がふと頭に浮かんで、立ち止まる。

道ばたで、純矢はふっと側に植えてある御衣黄の樹に手を伸ばした。

記憶が正しいのならば、確か、ここだったはずだ。

純矢が車に吹き飛ばされたのは。

純矢！

悲鳴のような声。

事故の瞬間、吹き飛ばされていく自分の姿を、あの優しい幼馴染みは一体どんな思いで見えていたのだろう。ぎゅっと目を瞑り、純矢は思い出した。

ああ、そうか。そういうことか。

瞼の裏にちらちらと舞う、緑色の花の正体が、ようやく解った。

「ぶつかった車が、花を散らしたんだ…」

道を歩きたびに瞼の裏に映ったのは、命を終えて散りゆく瞬間の花ではなくて、あの全ての元凶とも言える事故の瞬間、人為的に散らされてしまった、まだ八分咲きぐらいの哀れな花たちだったのだ。御衣黄桜は、満開のとき、その花びらを紅く染める。

その寸前に衝撃を加えられ散ったのならば、まだ緑色のままでもおかしくはない。

簡単なことだ。

どうして思い出さなかったんだろう。

何度も、何度も。事故にあって記憶をなくしてから、自分は何度もこの道を歩いたのに。

瞼の裏に浮かぶ映像は、きっと自分自身へのヒントだったのだ。

記憶を取り戻すための手がかりだったのだ。

それなのに、どうして今更になって気づかなければならないのか。

「俺って、ほんと馬鹿」

わかりきったことを呟いて、純矢は再び歩き出した。

もう何もかもが遅いのだ。

## 涙

嫌じゃなかった。

最初のキスも、あのとときのキスも。

出来ることなら、あのまま、相手の腕にしがみついたって良かったんだ。

でも、出来ない。

俺には、その資格がない。

迷ってばかりで、大切にしてもらっているのに、相手を傷つけてばかりで。

なあ。誰か、教えて。

思い出せないよ。

約束って、いったい何のことだ？

「おーい、清白」

いつも通りの時刻に学校へ着くと、泥だらけのユニフォームに身を包んだ少年が駆け寄ってきた。

見ると、同じクラスの野球部員である。

純矢は苦笑した。

「おはよう。どうしたんだよ、その格好」

「朝練が終わったところでさ。お前の姿が見えたから、着替えるの後回しにして来ちゃった。あ、臭う？」

「いや、別に大丈夫」

泥と汗の臭いはするけれど、我慢できないほどじゃない。だいたい、臭いだとか面と向かって言うなんて、日々汗を流して頑張っている運動部に対して失礼だ。

純矢は靴箱のふたを閉めて、上履きを履きながら相手に微笑みかける。

「それより、俺に何か用なのか？」

「ああ。うん、そうなんだ。お前、朝川と仲良かったよな。確か、同中だったんだろう」

「え…なんで知ってるの」

「田中から聞いた」

「なんで田中が知ってるの」

「え？ だって、田中も同じ学校だったんだろう？ 2年の時は隣のクラスだったとか言ってたぜ」

「…知らなかった」

「ごめん、田中。」

そのクラスメイトに心の内でこっそりと謝った純矢は、もしかしてこれも記憶喪失の一端なのかな、と少し考えてみた。

いや違う。言っちゃ悪いが、これはただ単に、田中の存在感が薄かったのだ。

「あはは。田中、かわいそう。黙っというてやるうか」

「そうしてくれ」

軽快に笑う相手に純矢は苦笑を返した。

ふと思いつ出したが、そういえば、この野球部員は日頃よく直樹と一緒にいる。

短い髪に日に焼けた顔で、いかにも野球やってます、という顔をしているクラスメイト。読書家で室内にいるのを好む直樹とは正反対のように思えるが、彼らは仲が良いらしく、けっこう楽しそうに連んでいた。編入初日、隣の席だったこともあるのだろう。休み時間は一緒に過ごしている姿を見かけることが多かった。

それを思い出すと何だか少し面白くないような気分になり、純矢は小さく溜め息を吐く。

話を元に戻そうと、改めて相手に向き直った。

「…で、」

「ん？」

「俺が直樹と仲良いから、何？」

「ああ、うん。そうそう、忘れるところだった」

ちよつと突っけんどんになつてしまつた純矢だが、おおらかな性格の野球部員は全く気にしていない様子である。

えつと何を話そうとしていたんだっけ、と彼は首をひねり、やがて、ああ思い出した、と手を打った。

「あんな、今日あいつ休みらしいんだけど、なんでか知ってるか？」  
「えっ」

純矢は目を瞬き、それからだいぶ間を空けて、ようやく「知らない」と言葉を絞り出した。

声が掠れてしまつたのはご愛敬である。なんでそんなに動揺しているのか分からなかつたけれど、純矢はもう一度、ひっくり返りそのような声で「昨日はそんなに話せなかつたから」と付け加えた。

それを聞いた野球部員は「なーんだ、そっか」と軽く頷いて、腕を組み考え込むような仕草をする。

「いや、昨日さあ、俺あいつに漫画貸す約束したんだ。学校に持っていくから、そのとき読ませてやる、って。そしたら朝川のヤツ、夜になつてから急に、やっぱりまた今度でいいよ、って電話してきた……」

「……り、律儀だな」

「なっ。そうだろ？ だから俺、なんで急にそんなこと言ったのかな、って。少し気になつたんだ。休むにしても、声を聞いた限り、風邪とかの病気じゃなさそうだったし。清白なら、何か知ってるかと思つたんだけど」

「さあ。家の、都合とかじゃないか」

「うーん……だよな、やっぱり」

かなり短く刈られたツンツン頭をがりがり搔いて、野球部員は咳く。

やがて彼は自己完結したように小さく息を吐くと、純矢の方を見

て肩をすくめてみせた。

「まっ、別にそんな気にすることでもないんだけどな。夏期講習さばるくらい、誰でもやってるし。ただ、朝川って結構まじめなヤツだろう？ だから、引つかかったのかもしれない。ごめんな、変なこと聞いて」

「あ…いや」

「ちよつと、確認したかっただけなんだよ。わざわざ時間とらせて悪かった。じゃ、また教室でな」

泥に汚れた、白い背中が駆けていく。おそらく、部室へ服を着替えに行くのだろう。

その後ろ姿が見えなくなった後、純矢はのろのと足を動かした。教室の方に向かって歩き始めながら、思わず溢れそうになる溜め息をなんとか飲み込む。

なんで。

いま会ったって、何を話せばいいか解らないのに。

ちくちくと、苦々しい痛みが胸を刺す。

顔が見られないだけで、ものすごく残念に感じてしまう自分は、もう手遅れなのかもしれない。

「純矢」

「…」

「おい、純矢」

「…」

「純矢、つてば！」

「…えっ？」

ぱつと顔を上げると、祐介が呆れたような目でこちらを見ている。

「何、ぼつとしてんだよ」

「あ…ごめん」

ずっと下を向いていたせいか、相手の顔の方を向くと少し眩しく

感じる。

昼休みのことだった。天気が回復したから、外でランチにしよう  
と祐介が言い出したので、購買で安いサンドイッチを買い、日当た  
りの良い校舎脇まで出てきたのである。やはり彼も純矢と同じよう  
に雨続きにうんざりしていて、青空が恋しかったのだろう。

いつのまにやら最後の1つになっていた卵サンドをもぐもぐしな  
がら、祐介が顔をしかめて尋ねてくる。

「また、何か悩み事か。最近、多いよな、お前」

「そういうわけじゃ…」

「違うのか？」

「いや…」

「どっちだよ」

祐介はやれやれと肩をすくめ、卵サンドを口に全部押し込め終え  
ると、家から持ってきたらしいペットボトルのお茶を、ぐいっと豪  
快にラッパ飲みした。

「言ってみろ」

「え？」

「どんなこと言われても、笑ったり呆れたり怒ったりしないから。  
だから俺に、言ってみろ」

「…」

この幼馴染みは、純矢のことに關して、ときどき妙に鋭くなる。  
隠しても無駄だなと思っ、純矢は躊躇いながらも口を開いた。

「訊いても、いいか」

「答えられることならな」

「…3年前のことなんだけど」

今度はちゃんと自分から相手の方を見て、まっすぐに目を合わせ  
る。

「直樹が、いなくなったとき。俺って、どんな様子だった？」

その質問に、祐介が怪訝そうに眉を寄せる。

ペットボトルを脇へ置いて、彼は答えようと口を開いた。

「どんな、って…前にも言っただろ。こっちまで暗くなっちゃうぐらい落ち込んで、魂が抜けたみたいになってたよ」

「それ以外には？」

「それ以外に…わかんねえよ。こっちは、お前が元気なくしてるのが心配で心配で、なんとかして直樹のこと忘れさせようと必死で。他のことに気が回らなかった」

「そう、か…」

残念そうに呟いて、純矢はせつかく上向きにしていた視線を、また下げてしまう。

俯きながら、再び溢れそうになった溜め息を飲み込んだ。一日に、そう何回も溜め息を吐いてなどいられない。

後ろの壁にもたれかかって、純矢は目を細めた。校舎の外壁は、天高く昇った太陽の日射しで暖められ、ほんのりとした熱が背中へ伝わってくる。

「…あんな、祐介。俺、まだ思い出せないことがあるんだ」

「なんだって？」

「3年前の…直樹がいなくなった直後のことだけが、ぼっかり抜け落ちてる」

祐介は驚いたように、何度もぱちぱちと目を瞬いた。

そんな幼馴染みに純矢は弱々しく苦笑して、降りそそぐ光に手をかざした。

眩しい。

けれど秋が近づいてきたせいか、それとも学校裏の山が涼しさを与えてくれるからなのか、照りつける陽も、それに伴う暑さも、今はそれほど鬱陶しくなかった。

「…約束」

「え？」

「約束を、したんだ、って。直樹が言うんだよ。でも、俺はそれを忘れてしまって、今になっても思い出せない。すごく、すごく大切なことのはずなのに」

「純、矢……」

珍しく不安げな声で、祐介が自分の名前を呼ぶ。

たぶん、それほど純矢は情けない顔をしているのだろう。いつも心配をかけて、本当に申し訳ないと思っっている。

それでも、今さら元気なふりをして取り繕えるほど、純矢は器用な少年ではなかった。

無言で目を閉じて、つい先日までの出来事を全て反芻する。

…本当に、覚えてないの

編入してきたとき。

驚いたように硬直して、次の瞬間、切なげに顔を歪めた直樹。

祐介がいるなら、俺はいなくても大丈夫だろう

純矢が倒れて保健室に運ばれたとき。

泣きそうな顔で背を向けて、1人、先に帰ってしまった直樹。

解ってるんだろう。俺は本気で、純矢のことが、

電話で告白されそうになって、思わず遮ってしまったとき。

彼は一体、どんな顔をしていたんだろう。

俺は君が好きだったよ

静かな表情。真剣な目。

あのときはまだ記憶を取り戻していなくて、気持ちに伝えることなど出来なかった。

でも、今は後悔している。

胸が苦しい。

今更になつて、こんなにも苦しい。

…過去形なんかじゃなくて、今でも好きだと、言つて欲しかった。

なんでいつも、祐介ばかり

傷つた子どものような顔をした、彼。

自分は、いつも振り回されてばかりで。でも、それでも嫌いになれなくて。

キスされても、本気で相手を突き放せなかった。

はつきりと拒絶することが出来なくて、結局、傷つけてしまった。

揺れ続けていたのは、直樹じゃなくて、純矢だったのだ。

臆病な自分自身に邪魔をされて、答えを見つけられずにいたのは、ずっと、純矢1人だったのだ。

でも。

「…ほんと、ばかだよな…俺」

今なら解る。

今更になつて、解る。

今の君が好きなのは、だれ？

直樹だ。

直樹が、好きだ。

3年前も今もずっと好きだった。ずっと待ってた。記憶をなくす直前まで、ずっと、信じてた。

心の奥では、そう叫んでいたんだ。

ただ、思いがあまりにも大きすぎて重たすぎて、言葉にすることが、出来なかった。

「お前を取られたくなかった」と言う、祐介の思いも裏切れなくて、今更どうしようというのだろう。これでいいんだと、この方が良いんだと、そう思って、自分は直樹の言葉を否定し続けてきたというのに。

「純矢」

祐介が苦しそうに顔を歪めて、こちらを覗き込んでいる。

まるで、荒れ狂っている純矢の心を、そのまま映した鏡のようだった。

「なんで泣くんだよ」

優しく背を撫でてくれる手のひらに、これ以上ないほどの罪悪感を感じながら、純矢は肩を震わせた。

「ごめん」

相手の袖をぎゅっと掴み、声を絞り出す。

情けないけれど、何かに縋っていないと崩れてしまいそうだ。

「俺…最近、涙腺ゆるいんだ」

誤魔化すように呟いて、純矢は相手の肩口に顔を埋めた。

## 天敵

「なあ、約束って何のことだ？」

たった一言。

それだけで俺がどんなに傷ついたか、なんて。

君は一生、知らなくていい。

荷造りを済ませて、重くなったポストンバッグを脇へ放る。

放ると言うより、脇へ寄せたと表現した方が正しいだろうか。着替えやらそのほか必要なもの諸々を詰め込んだ鞆は、床へ置くと大きくドスンと音がするくらいの重量があった。

明日の昼過ぎに、この町を出る。

電車で、隣の市にある空港へ向かい、そして飛行機で東京に戻るのだ。暗くなる前には向こうに着くだろう。親戚が車で迎えに来てくれると言うし、1人で飛行機に乗れないような歳でもないので、特に不安はなかった。

「あ、そうだ」

ふと思いつく。今日の夕飯をどうしよう。自分が食事当番だというのに、買い物に行くのを忘れていた。

直樹の両親は共働きで、家事は基本的に交代でやっている。2人とも忙しくて手が回らないときは、その全てを直樹が受け持ったりもした。

働き者の両親のおかげで小遣いには困らないし、その代わりに家事をやらされるとはいえ、それほど負担ではない。今のところ、直樹に不満はなかった。

しいて文句を言わせてもらうならば、親の仕事の都合で、引越しゃ転校の回数が他人より多いということだろうか。そのせいで、自分は純矢と離ればなれになっていたのだから。

「……」  
純矢。

うつかり彼のことを思い出してしまった自分に呆れてしまう。思い出せば、それだけ胸の痛みが増すことなど分かり切っているのに、溜め息を吐きながら、直樹は買い物に行こうと財布を片手に玄関へ向かった。この時間なら、まだ近所の店は開いているだろう。さつさと材料を買って、夕飯の準備をしまおう。そうだ、今日は冷や奴にしようか。豆腐とネギでも買って、後は、普通に味噌汁と白飯でいいだろう。もともと、直樹も両親も小食な方だから。鶏肉のそぼろや、酒のつまみに鰯でも買っておけば、父も満足するだろうか。

そんなふうには、必死で純矢のことから意識を逸らしながら、直樹はスニーカーを履いて家を出る。

でも、どうせ無駄な足掻きだ。

気づけば彼のことを考えてしまう。少しでも気を抜けばアウト。舗装の遅れた道には、無数の砂利が散らばっている。それらは踏むたびにジャリジャリと音をたてて、彼の意識を現実へ引き戻してしまうのだ。

純矢を好きだという、どうしようもない現実に。

「ちよいと、その奥さん」

買い物済ませた、その帰り道のことだった。

背後からふざけたような声がかして、直樹が無視したまま歩き去ろうとしたところを、その声を発した人物がひょいと追い抜いて、笑う。

「ずいぶん重そうな荷物ですね。片方、お持ちしましょうか」

「……ご親切にどうも。けど、結構です。こう見えても割と力持ちなんですよ」

地を這うような声で返答し、直樹は相手の横を通り抜けようとし

た。

が、その腕をがしつと掴まれ、足止めされてしまう。

直樹は苛立ちを隠そうともせず、相手に睨みつけ、「放せ」と鋭く言い放った。

「何のつもりだ、祐介」

わけも知らずに束縛され、苛立つ。

右腕が買ひ物袋でふさがってさえいなければ、今すぐ突き飛ばしてやりたいくらいだ。

「顔見た途端に、大した御挨拶だな」

そんな直樹の表情を見て、相手はニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「まあ、そんなに怒るなよ。穏便にいこうぜ」

「以前、俺に殴りかかろうとした人間の言葉とは思えないね」

「忘れたな。そんな過去のことは」

直樹の腕を掴んだまま、祐介が笑う。

驚くべきことだが、あのふざけた声を発した人物は、祐介だったのだ。

自分を毛嫌いしているはずの彼がなぜ、わざわざこんなところで声をかけてくるのか理解できずに、直樹は警戒しながら相手を見つめた。祐介は気まぐれな野良猫のような奴だ。懐いたのかと思っ手て手を伸ばせば、思わぬ瞬間に、その鋭い爪で引き裂かれる。縄張り意識が強いのだろう、自分の大切なものを奪っていく相手に対しては、本当に容赦がない。特に、純矢のことが関係しているのならば尚更。

「俺に何か、用でもあるのか」

「ああ。大ありだ」

頷いた祐介は、ようやく直樹の腕を解放した。

こいつ、わざと強く握ってたな。

そう思いながら、じんじんと痺れた左腕を引っ込めて、直樹は舌打ちをどうにか我慢する。

祐介は顔の笑みを消すと、くいつと方向を顎で示した。その拍子に、胸元で緩めに結ばれたネクタイが揺れて、相手が学校帰りの姿であることに、直樹はようやく気がつく。

「長くなりそうな話だ。どうか、落ち着ける場所に行こうぜ」

「…わかった」

出来るなら、話などしたくない。

けれど、いつかはこんな時が来るであろうことも、ずっと前から解っていた。

「俺の家に来いよ。近いから」

祐介は品定めするように目の前の天敵を眺め、やがて「ああ」と小さく頷いた。

「いいのかよ」

「何が」

「純矢より先に、俺を家に上げてさ」

「別に。義理立てするようなことじゃないし、それに純矢は、中学生のとき1回遊びに来たことあるから」

「は？ 俺、知らねえぞ。そんなの聞いてない」

「言っていないからね。純矢にも、口止めておいたんだ。君に言ったら、ろくなことにならないだろう」

「…お前、抜け目ねえな」

「ありがとう」

「褒めてない」

自分の部屋に入れるのは嫌だったから、玄関から近いリビングに通した。

適当に座らせて、その向かい側に自分も腰を下ろす。

「言っておくけど、お茶とか出さないからね」

「だろうと思ったよ」

苦々しく呟き口の端を歪めた祐介だったが、さっそく本題に入る

うと顔をすぐに引き締めた。こんなところに長居するつもりはない。「んじゃ、手短かに聞く。お前、純矢に何した？」

その何かをしたのが直樹だということを前提にした問いかけ。

直樹は一瞬だけ目を睨り、やがて我を取り戻したように「なんのこと」と聞き返した。

「とぼけるなよ。純矢があんなふうになってるのは、大抵お前が原因なんだ。お前のことで落ち込んで、お前のことで悩んで、迷ってきつと今回もそうなんだろう。…吐けよ。純矢に、いったい何したんだ」

「どうして、祐介に言わないといけないんだ」

だんだん先ほどの苛立ちがぶり返してきた直樹は、普段の冷静な自分を忘れ、鋭い口調で言い放つ。内面の怒りが見え隠れする目つきで、相手をぎろりと睨みつけてやった。

「保護者面するなよ。答える義理はない」

「…なんだと。よく、平気な顔してられるな。否定しないってことは、純矢を傷つけた自覚はあるんだろう？ それなのに何も言わないだなんて、卑怯にも程があるぜ」

「卑怯、」

「そうだ。いつもいつも、肝心なときに逃げやがって」

「抽象的だな。はっきり言え」

「3年前のときも、今も、お前は全然変わってない。そういう意味だ」

「…なに、」

「一方的に気持ち伝えて、後は知りませんって顔で逃げて。置き去りにされた方の身になってみるよ。ただでさえ、純矢は情緒不安定なんだ。記憶が戻ったばかりで、まだはっきりしていないのに、そこを更に混乱させるようなこと、お前がするから」

「言いたいことが、さっぱり分からない。もつと簡単に…」

「お前のこと、大馬鹿野郎って言うてんだよ！」

「っ、」

相手の勢いに気圧され、直樹はぐつと詰まった。相手の意図や言葉の意味はいまいち解らないままだが、とにかく、ひどく責められていているという事は確かだ。

苛立ちを奥に押し込めて、なんとか平静を取り戻そうと努力する。けれど、一度昂ぶった感情はなかなか落ち着いてはくれず、拳をぎゅっと握りしめて黙殺することしか方法はなかった。悔しい。感情のコントロールが出来ない自分が齒がゆかった。まるで、小さな子どものようだ。

あのキスだって、子どもっぽい独占欲だった。

この胸の痛みも、大人になることが出来れば、きっと消えるはずなのに。

どうして自分は、いつまでも無力な子どもなんだろう。

日が沈み、少し薄暗くなったりビングは、冷房が効いているわけでもないのに薄寒かった。

「逃げて、何が悪いんだ」

「は？」

「俺が逃げたって…いなくなっただって、別に純矢は困らない。だって…」

純矢の傍には、いつも、お前がいるじゃないか。

そうだろう、祐介。

「…」

言いかけて口をつぐみ、直樹は目をそらす。

ああ、まただ。

少し気を抜いただけで、彼のことが思い出される。

約束って何のことだ？

忘れたのなら、それでいい。

思い出せないというのなら、もう、それでも構わない。

自分にとってはどんなに大切な約束であろうとも、今さら言った

って、きつと相手には重いだけだ。

だからもう、自分の思いを告げることは諦めた。  
これでいい。

もともと、戻ってくるのが遅れた時点で、破ってしまったも同然  
なのだから。

直樹は俯いたまま、口を開いた。

「なあ、祐介」

「何」

「こんな時間は無駄だと思わないか」

「…急に何を言うんだ？」

「俺たちが、こんなことを話している間に、純矢は1人なんだろう。  
行ってやれよ。傷ついていたんなら、お前が傍にいて、慰めてやれ  
ばいい」

祐介はピクリと片眉を上げて、訝しそうに相手を眺めやった。

「随分と殊勝だな」

「事実を言っているだけさ」

「自分が行く、とは言わないのか」

「言えない」

自分が行ったって、また傷つけるだけだ。

あの、キスの後。

目を見開いて自分を見つめていた、純矢の顔が忘れられない。

純矢はきつと信じていてくれた。それを裏切ったのは、こちらの方だ。全面的に悪いとは思ってなかったけれど、でも、罪悪感はいくら以上ないほどに感じている。

痛くてしょうがなかった。

押さえつけた相手の腕が、最後まで自分の方には伸ばされなかったことも。

深く重ねた唇が、思いの外やわらかく、幼かったことも。

「祐介」

大嫌いだ。お前なんか、大嫌いだ。

でも。

「俺、は……」

何かに急ぎ立てられるように、あるいは自分で自分を追いつめるように、直樹は告げた。

明日の、ことを。

自分の決心を。

## 優しい人

いつだって、ずっと傍にいてくれた。

どんなに救われていたか、どんなに感謝しているか。

なあ、祐介。

きつと言わなくても、俺の気持ち、お前なら解るよな。

「伝わってる」

だって、ずっと一緒だったんだから。

その日は夏季講習が午前中で終了し、純矢は祐介の家で昼ご飯をご馳走になった。

久しぶりに会った祐介の母は、純矢を見るなり大喜びして手を叩き、思い出したのね、良かったわねと満面の笑顔で出迎えてくれた。純矢が記憶喪失になっていたことは、家族と一部の親戚を除いては、ほとんど知らされていない。知っている者も、その全員が守秘を貫いていたので、大事にはされなかつたのだ。祐介の母は、関係者以外（事故被害者である祐介の母だから、全くの無関係とは言えないが）でそのことを知っている、数少ない人間の1人だった。

「純矢くん、純矢くん。そういえば小さい頃、おばさんのホットケーキ好きだって言ってくれたわよね。あ、良かったら食べる？ 今から、10分でちゃっっちゃと作っちゃうから」

「あ、えっと」

「やめろよ母さん。何年前の話だよ。それにほら、純矢の奴、もう3杯目だぜ。これ以上、腹の中に食い物いれたら破裂しちまう」

「あら…確かにそうね。ごめんなさい」

「いや、破裂はしれないと思うけど…」

もごもご言う純矢の横で、祐介が「ごっそさん」と両手を合わせる。

立ち上がった、彼はすぐに純矢の腕を掴みぐいぐいと引つ張った。  
「純矢。俺の部屋いこうぜ。あんまり長くここに居ると、母さんの  
下らない話に付き合わされるぞ」

「まあ！ 下らないとは何よ」

「そのまんまの意味。ほら、純矢、早く」

「えっ、あ、ああ。…じゃ、おばさん、ごちそうさま」

「はいはい。お粗末さま」

祐介の母はにっこり笑って2人を見送った。

ふくよかな体つきとか、笑ったときの目尻の皺だとか、えくぼの  
出来る頬だとか。その様子は、記憶の中の「おばさん」と全く変わ  
っていないくて、純矢は何だか少し安堵する。

「ちよっ、おい。祐介、あぶない」

「いいから早く早く」

「腕、引つ張らなくても歩ける、ってば」

少し古びた階段は、男子高校生が2人で上るとギイギイ鳴った。

純矢は引きずられるようにして歩き、懐かしさに浸るまもなく部  
屋へ引つ張り込まれる。

「…変わってない」

「嫌みか？」

「まさか」

幼馴染みの部屋は、中学生時代のまま時間が止まったようになって  
いた。本棚に詰め込まれた漫画や、スポーツ関係の雑誌。その多  
くはあるべき場所からこぼれ落ちて、床に散乱している。机の上  
には参考書やノートが開きっぱなしで置かれていたが、埃をかぶっ  
ているものもあり、その使用頻度は低そうだった。

ただ、寝る場所だけはきちんとしているようで、ベッドとその付  
近は不自然なほどに片付けられている。制服も、ちゃんとハンガー  
に掛けてあった。

「お前って、大雑把なの、几帳面なの、どっちなの」

「さあ」

部屋の様子はまるで、明るく気まぐれな祐介の内面そのものを表しているかのようだ。

「あつ、これ、懐かしい」

漫画を適当に取り出して、ぱらぱらとページを繰る純矢に、祐介が「座れよ」と声をかける。

「読みたいんなら、それ持って帰ってもいいぜ」

「いや、いいよ。どうせ近所だし、また読みたくなつたときに借りに来るから」

「…」

「なに。その顔」

急に噴き出して肩を震わせはじめた幼馴染みを、純矢は怪訝そうに見やった。

祐介は顔を崩したまま、「なんでもない」と言つて首を振る。

「ただ、なんとなく…お前、本当に変わつてないんだなあ、つて」

「どういう意味」

「中坊の頃にさ、さっきと全く同じ会話したの、覚えてるか」

「え？」

「今日みたいに俺んち遊びに来たとき、お前、部屋の漫画に夢中になつてさ。あんまり真剣に読んでるもんだから、俺が、よかつたら持つて帰れよつて言つたら、お前さっきと全く同じこと言い返したんだぜ。近所に住んでるんだから、読みたくなつたとき読みに来ればいい、つて」

「…」

「あれつ、覚えてない？」

「知らない」

ゆるゆると首を横に振つた純矢は、打つて変わつて暗い表情を浮かべた。

どうしたんだと心配そうに覗き込む祐介に、彼は暫く黙り込んだ。

「…もしかして」

「ん？」

「もしかして、これも、失くした記憶の1つなのかな」  
「はあ？」

ようやく口を開いたかと思っただら、妙なことを言い出す。  
まだ何か言いたそうな表情だったから、祐介はそんな相手の顔をじつと見つめて、言葉の続きを待った。

「不安なんだ。直樹との約束のことも、まだ思い出せてないし。もしかししたら、他にもまだ沢山、思い出せてないことがあるのかも知れない。俺が気づかないだけで、いろんなこと、忘れたままなのかも」

「…お前なあ」

祐介は呆れたように顔をしかめ、沈んだ表情を浮かべる幼馴染みの頭をぐしゃぐしゃ搔き回した。

まったく。ちよつと放つとくと、すぐに悪い方向へ考えを持っていつてしまうのだから、困った奴だ。

「焦るな、って。何度言えば分かるんだ、このアホ」

「だって」

「だってじゃない。いいから、落ち着けよ。お前はまた、記憶が戻ったばかりで混乱してんの。だから、ちよつと思いつけないことがあつたり、ど忘れしたりしても、仕方がないんだよ。それが普通なんだ。まったく、どうして、お前らはそれが分かんないんだろうな。せかせかしたって、良いことなんかないのに」

「お前…ら？」

「そう。お前と、直樹」

目を瞬く純矢の額を、祐介は指で思いっきり弾いてやった。

「いいかげん、冷静になれ。それで、自分のことを肯定しろ。お前は、なんにも悪くない」

「…痛い…」

大げさに呻く純矢を見て、祐介は笑った。

しかしその笑みの奥には正反対の感情があつて、全く別のことを考えている。

直樹。

こいつがこんなに不安がるのも、全部あいつのせいだ。直樹の不安定な感情が、純矢にも悪い影響を与えている。ただでさえ視野が狭いというのに、純矢は直樹のことになると物事を一直線に考えてしまいがちだ。

ため息が出る。

いつだって、いちばん傍にいるのは自分だという自負はしていたけれど、いちばん好かれていているという自信は、いつまで経っても湧いてきやしない。もともと、純矢の「一番」は自分ではないのだ。いや、もしかしたら、比べることすら間違っているのかもしれないかった。

多分、「好き」の種類、そのものが違うから。

相手に見られないよう顔を背けて眉をひそめ、小さく溜め息を吐いた祐介は、気を取り直して何事もなかったかのように口を開く。

「わかってるのか、純矢」

「ん？」

「相手を思いやるのと、相手の感情に過敏になりすぎるのって、ぜんぜん違うからな」

「…急に、何を言い出すんだ。」

「いいから聞けよ。あのな、俺は直樹あいつのことが大嫌いだ。なんでかって言うと、あいつが自分のことしか見ていないから」

「はい？」

「あいつ、せっかちなんだよ。それで、すっげえ独占欲が強い。…まあ、これは俺も他人のこと言えた義理じゃねえけどな。とにかく、直樹の奴、いつまでたってもお前から望んだ答えが返してもらえないもんだから、焦ってるんだ」

「望んだ答えって、」

「好きだって言われたんだろっ？」

純矢が、口を開いたまま固まる。祐介はそれを見て、少し寂しそくに笑った。

「俺が、気づいてないとも思ってたのか」

「違」

「違わないよ。なあ純矢、お前、俺に気でも遣ってるわけ。それで、俺が喜ぶとでも思った？」

「な、に」

突然、相手の声のトーンが変わった。

諭すように、静かに、それいてどこか不安定な。

「なあ純矢。俺はお前が好きだよ」

「！」

「直樹になんか負けない。あんな奴よりも、俺の方が、ずっとお前のこと理解してる。…だから」

表情を消した祐介が、純矢の手首を掴んだ。

純矢がびっくりして相手の顔を見ると、今まで見たこともないほど、冷たい目をした幼馴染みがそこにいた。

「解るんだよ。言っただろう、お前は、嘘をつくのが下手なんだ。

何かあると、すぐ顔に出る。…隠し通せるとでも思ったかよ」

「…何…を」

「直樹のことが好きだろう？」

「っ、」

息を呑んだ。とっさに否定できなくて、黙りこくる。

愚かだと、自分でも思った。それではもう、相手の問いかけを肯定してしまっただも同然ではないか。

「純矢」

引き寄せられて、相手の胸へ顔を埋める形になる。純矢は一瞬、何が起こったのかよく分からなかった。暫くしてから、抱きしめてくる相手の腕が微かに震えていたことに、ようやく気がつく。

ぎゅう、と痛いぐらいの力を腕に込めて、祐介はもう一度「純矢」と呼んだ。

「知ってたか。俺、けっこうプライド高いんだ」

「…」

「同情で、傍にいてほしくない」

「…でも」

「何」

「でも、直樹は、もう俺の顔なんか見たくないかもしれない」

「どうして」

「だって。思い出せないままなんだよ。約束。きっと、あいつにとつては何よりも大切な」

「それがどうした。あんな奴の気持ちなんかどうだっていい。大事なのは、お前が、誰を好きか。それだけだよ」

ようやく純矢を解放して、祐介は淡々と言った。

「あいつ、今日中に東京へ帰るらしいぜ」

「…!」

「確か、午後には家を出るって言ってた。今から行けば、もしかすれば間に合うかもしれない」

「…」

「いいのかよ。行かないと、もう、二度と会えなくなるぞ」

それでも黙りこくったままの純矢に、祐介は冷めた視線を向ける。

やがて彼は何を思ったのか、相手の顔を覗き込むようにして、視線を合わせこう言った。

「なあ、純矢。俺とキスできる？」

「えっ？」

いきなり顔を寄せられ、唇が触れそうになって、純矢は反射的に相手突き飛ばしてしまう。

思いきり肩を押された祐介は、痛そうに顔をしかめて舌打ちした。純矢がハツとしたときには、もう遅かった。

「あ、ご、ごめ…」

「ほらな。出来ないだろう。それがお前の答えだよ。お前の好きなのは…俺じゃない」

苦しそうに呟いて、それきり祐介は頂垂れた。

重い沈黙と、息苦しさ。それを破って、心優しい幼馴染みは口を

開く。

「行けよ」

「でも」

「同情されるのが、一番つらいんだ。そんなことも解んねえのか、アホ。アホ純矢。俺のことは放つといて、さっさと直樹のところに行けよ。その方が、俺もすつきりする。…だから、行けつてば」

「祐…介…」

「早く、行け！」

「ありがとう」

胸が痛い。祐介の優しさが、ちくちくと胸を刺し続ける。

でも、それよりも大きな感謝が、心を満たした。

優しい。祐介は、本当に優しい。

いつだって、純矢の一番欲しいものをくれる。

滲む視界を手の甲でこすって、純矢は階段を下り、ばたばたと幼馴染みの家を飛び出した。

台所で皿を洗っていたらしい祐介の母が、目を丸くする。

「あら？　ちよ、ちよっと、純矢くん。どうしたの。どこへ行くのっ？」

呼びかける声にも、もう、振り返らなかった。

一方。

部屋に残った祐介は、走り出した純矢の背中を見送って、自嘲するよつに顔を歪める。

「俺、ばっかみてえ」

掠れた声で呟いて、ぐしゃぐしゃになった顔を、手のひらで覆った。

遠い夏の日

## 約束

会いたい。

触れたい。

性別だとか、過去のことだとか、そんなものは全部どうでもよかった。

ただ、会いたかった。

会って、その手に触れたかった。

走り続けるうちに、中学生の頃のことごまるで走馬燈のように頭を駆けめぐった。

そつだ。近道。あいつの家は、確か。

細かいことを考える前に足が動く。見慣れた住宅街を突っ切り、純矢は図書館前の並木道へ入り込んだ。なんとなくだけけれど、覚えている。頭ではなく、体が記憶している。確か、この道を真っ直ぐ行って、右に曲がった細道を通れば、すぐに着くはずだった。

教えてもらった、近道。

直樹。

お願いだから間に合って。

「っわ、」

あんまり急いだものだから、目の前に垂れ下がっている木の枝に気づけなかった。

人は急には止まれない。勢いそのままに突っこんだ純矢の顔に、横広の葉をわさわさとつけた、細くて硬い棒がびしつと当たる。けっこう痛い。

思わず止まって、純矢が悪態を吐きながら顔を押しさえた。

瞬間。

まるで待ちかまえていたように、ふつと記憶が戻ってくる。

「あ……」

そうだ。ここだ。

ここ、だった。

「直樹と…別れた場所…?」

無意識に呟きながら顔を上げ、純矢は顔を歪めた。

ここまで全力で走ったせいか息は荒く、肩で大きな呼吸を繰り返す。首筋を拭い、目に入りそうな汗を瞬きでやりすごすと、滲みがちだった視界が一気にクリアになった。

寂れた町。通勤時間や学生の下校時間の関係か、この時間帯は尚更だ。

しんとした並木道。葉桜だけがざわざわ揺れている。

誰もいない。今は、誰もいない。静かだ。

でも、3年前は違った。

人通りが多くて。

去っていく直樹の背中に、抱き着くことすら出来なくて。

ただ、こっちが泣きたくなるくらい、切なげな顔でこちらを振り返る彼の姿を、瞬きもせず目に焼き付けたのだ。

「…!」

思い出す。

どンドン、記憶が戻ってくる。

ああ、そうだ。約束。俺の方から言ったんだ。

最後のとき。別れる間際。直樹が、あんまり悲しそうな顔をしているから。

もう、こんな顔をさせたくない、と思って。

ずっと傍にいてやりたい、ずっと傍にいて欲しいと、そう思って。

俺、待ってるよ

ずっと待ってる。だから

だから、早く帰って来いよ

同じ高校に、通おう

震えた声で、叫んだ。  
ずっと待ってるから、と。約束。  
周囲には人の目があったから、好きだと伝えることは出来なかつたけど、でも。  
信じてた。  
言わなくても通じているはずだと。  
ずっと、信じて。

約束！

最後に振り向いた、直樹の表情。  
泣き笑った彼の顔がどうしようもなく愛しかった。  
そして、それと同じくらい、切なかつた。悲しかった。彼が去つた後のことを思うと、寂しくて仕方がなくて。  
待ってる。ずっと、待ってる。  
信じているよ。

「直樹……」

「ごめん。本当に、ごめん。」

俺、自分から言い出したくせに、約束のこと今までずっと思い出せなくて。

直樹は戻ってきてくれたのに。

少し遅くなつたけど、でも、ちゃんと約束通り、同じ高校へ帰ってきてくれたのに。

「ごめんな。」

許してくれ、なんて言わない。

でも好きなんだ。ちゃんと伝えるから。今度こそ、伝えるから。だから。

もう一度、俺のことを好きになつて。

「急がないと」

純矢は再び走り出した。  
もう迷っている時間はなかった。  
直樹の住むマンションは、もうすぐそこに見えている。

時計の針が、ぐるりと一周した。  
もうそろそろ、出なければいけない時間だ。

直樹はそう思って何度も椅子から立ち上がるうとしたが、正直な体はなかなか動こうとしてくれない。理性的には、さっさと出掛けなくてはと解っているのだけれど、心の奥でまだ少し躊躇っている。純矢。

心の中でその名前を呟いて、直樹はいいかげん自分の諦めの悪さに呆れてしまった。

もう、やめなければいけないのに。

彼の隣を望むことも。

彼を傷つけることも。

本当は、もっと早くやめなければならなかったのに。

「ああもう」

低く唸るように声を発し、直樹はテーブルの上にゴツンと額を乗せた。

情けない。昨日、決心したのではなかったのか。

祐介に、東京へ帰ることを、そして、もう二度と純矢を傷つけないと誓ったことを、打ち明けて。

「あいつ、変な顔してたよな」

無意識に独り言が漏れた。昨日、家にやってきたときの祐介の顔を思い出す。

あんな奴、名前を思い浮かべるだけで嫌気が差すけれど、純矢のことを考えて悶々とするよりは遙かにマシだった。

東京へ帰る。

それで、頭を冷やしてくる。

直樹がそう告げたとき、祐介はとても驚いたような顔をして、やがて「マジかよ」と呟いた。

マジかよ。

お前、出来るのか。

本当に、そんなこと出来るのか。

信じられないものを見るような目で、そう問いかけてきた、彼。

出来るのか、なんて。そんなの自分じゃ解らない。否、出来ないかもしれない。

けれど、やるしかないじゃないか。

そうでもしなきゃ、苦しいままだから。純矢も自分も、きっと苦しむままだから。

「……」

純矢。

気づけばその名前を繰り返す。

好きだよ。

前から、ずっと、今でも、好きだよ。

言えなかった。

多分、言ったら、また傷つけてしまうのだろう。

だって、純矢の隣には祐介がいる。

優しい彼が、長年一緒にいた幼馴染みのことを、裏切れるはずがないと知っていた。

「切りがないな」

自嘲的な表情を浮かべて、直樹はようやく重たい腰を上げた。

もう、行こう。

これ以上ここにとどまったって、どうにかなるわけでもない。諦めよう。全部。それでいい。

自分にそう言い聞かせて、直樹はゆっくりと部屋から出る。

重いポストンバックを肩に掛け、火の元を確認して、部屋の電気をパチンと消した。

蝉の声はなぜか聞こえない。もしかして、暗く沈んでいる自分の

心に同調してくれたのかなと、そんなことを考えて直樹はちよつと笑った。もちろん、自分を励ますための空元気だ。なんとも寂しいんだけど、そんな寂しさも、受け容れるしかないのだ。

古びた扉を開くと、少し眩しい晩夏の日射しが、やわらかく目を刺した。

思い出す。

3年前の夏。楽しかった休暇。静かな図書館。

隣には、いつも純矢がいた。

確かに彼は…あのころの彼は、自分を好いてくれていたはずだった。

それを思うと、嬉しいのと悲しいのと、口惜しいのが縋い交ぜになって、声が出せなくなってしまう。

…だから、これで最後。

誰に向けるでもなく言い訳をして、直樹は静かに目を閉じる。

最後に。どうか、最後に1回だけ。

大好きな、彼の名前を。

「…純矢…」

切なく呟いた、その瞬間だった。

「直樹！」

聞こえるはずのない、でもずっと待ち望んでいたその声が、直樹の耳に届く。

はじめたように顔を上げた彼の目に、つい先ほど思い描いていた人物が、自分の方へ飛び込んでくるのが見えた。

## 最終話

びっくりして、何が何だか分からなかった。

もしかしたら、夢を見ているのかもしれないと、一瞬思った。

勢い余って腕に飛び込んできた純矢に、直樹は咄嗟でポストンバツクをその場に落とし、両腕でその体を受け止める。かろうじて純矢の方が細身で軽かったけれど、実を言うと体格はそれほど変わらない。情けないことにも、直樹はそのまま後ろへ、どすんと尻餅をついた。

扉が開けっ放しの状態だったから、2人して玄関へ倒れ込んだ形になる。

「…う…そ」

肩で息をしながら、直樹が呆然と呟いた。

どうして。なんで彼が、ここに。

腕の中にいる純矢は、とても夢とは思えないほど温かくて、今ここに、確かに存在しているのだという事実を直樹に教えてくれた。

それでもまだ信じられなくて、おそろおそろ手を伸ばし、その頬に触れる。 …本物だ。

「直樹」

驚きのあまり固まっている直樹の首へ、純矢が腕を回してしがみついた。

ぎゅっと相手に抱き着いたまま、彼は震えた声を出す。

「よ、かったあ…」

「え？」

「会えた。間に合わないかと思ったのに…逢えた」

心の底から安心したように、ほお、と息を吐きだして、純矢は肩の力を抜いた。

直樹はあまりにも驚きすぎて、逢うことが出来た嬉しさに心が付いていかない。わけがわからないまま目を瞬き、「どうして」と怪

訝そうに呟く。

「どうして、君がここにいるの」

「…言わなくちゃいけないことがあるから」

純矢は相手の肩口に顔を埋めて、か細い声で囁いた。

ずっと。ずっと、言えなかったこと。でも、言わなきゃならなかったこと。

言わないと、絶対に後悔すること。

「好きだ」

「え？」

「帰ってきてくれて、ありがとう」

「…っ」

直樹の瞳が、揺れた。

動揺を隠そうともせず、例の仮面の笑顔すらも忘れたかのように、揺らめき続ける年相応な少年の顔になる。

躊躇いがちに相手の手首を掴んで、直樹はその顔を覗き込もうとした。

「約…束…」

「うん」

「思い出した…の？」

「うん」

肩口から顔を上げた純矢の瞳もまた、揺れていた。

今にも泣き出しそうな表情。

「遅くなって、ごめん」

それがもう我慢の限界だった。

堰が切れたように感情が溢れ出して、玄関先だということも気にならず、直樹は相手を引き寄せキスをした。

深く唇を重ねて、相手が、自分の腕の中のことを何度も確かめる。

きつく抱きしめても、純矢はもう抵抗しなかった。

「…ん、…」

どれほど時間が経ったのかは解らない。

少し名残惜しそうにしながらも、2人はようやく唇を離した。

本当ならば、このままずっと相手を抱きしめていたかったけれど、もともと（純矢のこと以外では）冷静な性格をしていた直樹は、そつと相手の肩を掴んだ。

「純矢」

「…何？」

「とりあえず、場所、変えないか」

「なんで」

「この状態、誰かに見られたら、ちょっと危ないと思うんだ」

「へっ？」

「それに俺…押し倒されるよりは、押し倒す側でありたいというか

…」

「！」

見る見るうちに、純矢が顔を真っ赤にする。

勢いでしてしまったことだから仕方がないが、確かにこれは、かなり恥ずかしい。

純矢に抱きつかれた直樹は、バランスを崩して玄関の中に倒れ込んで。

つまり彼は今、玄関の靴箱のすぐ横に尻餅をついている状態で。

抱きついた純矢の方はというと、その上にのしかかっている体勢なのである。

「ッ、ご、ごめんっ！」

「いやいや。嬉しかったけどさ」

直樹はそう言って笑いながら、ゆっくりと体を起こした。

相手も立ち上がったことを確認すると、彼は先ほど落としてしま

ったポストンバッグのところまで歩いて行って、それを持ち上げ肩に掛けた。

「出来るなら、家の中でゆっくり話したいけど…ごめんな。時間がないんだ」

「あ…それ」

「祐介から聞いた？ 俺、実は…」  
「知ってる」

相手の言葉を遮って、純矢は俯いた。

「そうだ。直樹は東京へ帰るのだ。せつかく気持ちが通じたと思ったのに。」

「また、置いていかれる。また、あの寂しい思いを味わわなければならぬ。そう考えると、悲しくて顔を上げることが出来なかった。さすがに泣きはしないけど、でも気を抜くと危ない。」

「そんな彼を、直樹はどこか怪訝そうに見つめた。」

「えつと、純矢？」

「…何」

「途中まで、一緒に来てくれないか。歩きながら話そう？」

「…」

「純矢？」

首を傾げる直樹を見て、なんだか胸がいつぱいになる。無意識のうち手を伸ばして、バッグを掛けているのは反対の袖を、ぎゅつと掴んだ。

「え、なに」

「行くな」

「…え？」

「2回も、俺の前からいなくなるなよ」

俯いたままで、純矢は言葉を継ぐ。こんな子供じみたことしか言えない自分が情けなかったけれど、でも直樹が東京に行ってしまうのは本当に嫌だった。

「会えなくなるのは、嫌だ」

しがみつくようにして言った純矢の頭に、直樹はそつと手を置いて、髪を梳くように優しく撫でてやる。昔、中学生のころ、図書館で眠っている彼に何度もしてやったのと同じように。

「大丈夫だよ、純矢」

ここにいるよ。俺は、ずっと。

幼い子どもに言い聞かせるような口調で、彼は言う。

「俺はいなくなったりしない」

「でも、」

「ん？」

「東京に…行くんだろう」

「そうだよ。でも、たったの数日間じゃないか」

「へっ」

びつくりした純矢は素っ頓狂な声と共に顔を上げ、ぱちぱちと目を瞬いた。

「数…日…間…？」

「うん」

頷いて、直樹は不思議そうな表情を浮かべ純矢を見つめる。

「東京に住んでる、父の従兄が急病でさ。俺も小さい頃から世話になってただけで、その人は独身で、俺や父さん以外に頼れる血縁者がいないんだ。だから、入院の準備とか、身のまわりの世話とかするために、俺が呼ばれた。本当なら父さんが行くところんだけど、あいにく仕事が忙しい、って言うから…」

純矢？

「…それで…数日間…東京…」

「うん、そうだよ。だから、そう言ってるのに」

ちよつと呆れたような声を出して、直樹は小さく息を吐いた。

「どうして、そんな変な顔をするの。祐介から、俺の話は聞いていたんだらう？」

「祐介は…直樹は、東京に帰るから、もう二度と会えなくなるぞ、って…」

「はあ？」

「だから俺…すごい焦って…ここまで、大急ぎで…」

…」

暫しの沈黙。  
純矢はぐるぐると絡まりそうになる思考を、なんとか整理しようと頑張った。

じゃあ、何か。あれか。自分は、どうやら勘違いをされていて。確かに直樹は東京に帰るけれど、それは自分は思っていたよりも遙かに短い期間で。もちろん、このまま会えなくなったりなんてことも、ないわけで。

「…」

「…ぷ」

やがて、堪えきれなくなったように直樹が笑い出した。

「ちよ、直樹？」

「ふ…く…つ…あははははは。それじゃあ俺、あとで祐介に礼を言わないといけないな」

「ど、どういうことだよ」

「ははっ。騙されたんだよ、純矢」

「うえっ？」

驚き目をまん丸くした純矢を見ると、直樹は再びお腹を抱えて、けらけらと笑い出した。

こんなふうには大笑いする直樹が珍しくて、純矢はますます驚く。

本当に、何が何だか分からない。…祐介が、自分に、嘘を吐いていた？

ようやく笑いの発作が治まったのか、直樹は目尻にたまった涙を拭いて、ひいひい言いながらも口を開いた。

「あのね、俺、実は君のこと諦めようと思ってた」

「え、」

「東京に行って、頭を冷やしてこようとしたんだ。それを、昨日、祐介に言った」

「なっ」

「多分、祐介のやつ、気を利かせてくれたんじゃないのかな。黙っておくことも出来ただろうに…まったく、あいつって本当に純矢思いだね。粹なことしてくれるよ」

「へ…」

「こうでもしないと、純矢はここへ来てはくれなかっただろうし。そうしたら俺たち、擦れ違ったままだっただろう？」

「じゃあ、祐介…」

「ああ、やってくれたよな。あいつに借りを作るのは不本意だけど、今回ばかりは心の底から感謝するよ」

満面の笑みを浮かべながら、直樹は純矢の腕を引いた。

一応マンション内だから、抱きしめることまでは自重したらしい。誰かに見られたとしても怪しまれない程度に顔を寄せて、彼は嬉しそうに囁く。

「好きだよ。純矢」

「っ、」

恥ずかしくて顔を真っ赤にさせながら、それでも純矢は腕を振り払ったりはしなかった。

「直樹…」

「なに」

「本当に、数日間で帰ってくるんだな。そのまま東京に住みついたりとか、しないよな」

「当たり前だろう。こっちに編入してきたばかりなんだよ」

クスクスと笑って、直樹は言った。

「誓うよ。東京から戻ったら、出来る限り、これからはずっと君と一緒にいる。3年間離れてた分を取り戻そう」

「…ああ」

ようやくと、純矢も安心したように微笑んだ。

夢みたいだ。

遠い夏の日、当たり前のように信じていた約束。

一度は失いかけて、諦めて、でもやっぱり愛しくて。やっと、取り戻すことが出来た。

何もかもが昔のようにはいかないけれど、でも。

「好きだよ」

「俺も」

お互いにだけ聞こえるくらいの、小さな声。

何度も確認するように繰り返して、2人は幸せそうに笑った。

PDF小説ネット発足にあたって  
インターネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5903c/>

---

遠い夏の日

2009年3月24日10時57分発行